

●山本 剛（やまもと つよし）

1969年8月7日茨城県生まれ。気鋭のゲームデザイナー集団F. E. A. R. に所属。TRPGのデザインやライティングを中心に活躍中。主なゲームに『アラベスク 運命の風』(ホビー・データ)がある。趣味はスポーツをすること。特に好きなのが、アメリカンフットボールと格闘技。


カバーイラスト/壱
カバーデザイン/小林博明(K Plus artworks)






S
56-4
Y540
山本 剛
新☆魔導物語1 アルルとおとぎの国
角川スニーカー文庫


ISBN4-04-415604-2
C0193 ¥540E
9784044156046
1920193005400
定価：本体540円(税別)


今日はアルルの４歳のお誕生日。おかあさんもおばあちゃんも、楽しいお祝いをしてくれました。でも……大好きなおとうさんは、今もお仕事に出たまま行方不明です。元気のないアルルをなぐさめようと、おばあちゃんは古いお話の本を借りてきてくれました。「むかしむかしあるところに……」そしてアルルは、ふしぎなふしぎなおとぎの国へと迷いこんでいったのでした——。おとぎの世界の八つの国を駆け抜ける、アルルの初めての大冒険!!

スニーカー文庫☆山本 剛の本 (99.5)




カバー 暁印刷

# 新★魔導物語1

アルルとおとぎの国

山本剛

角川文庫 10096

新★魔導物語1 アルルとおとぎの国

山本剛

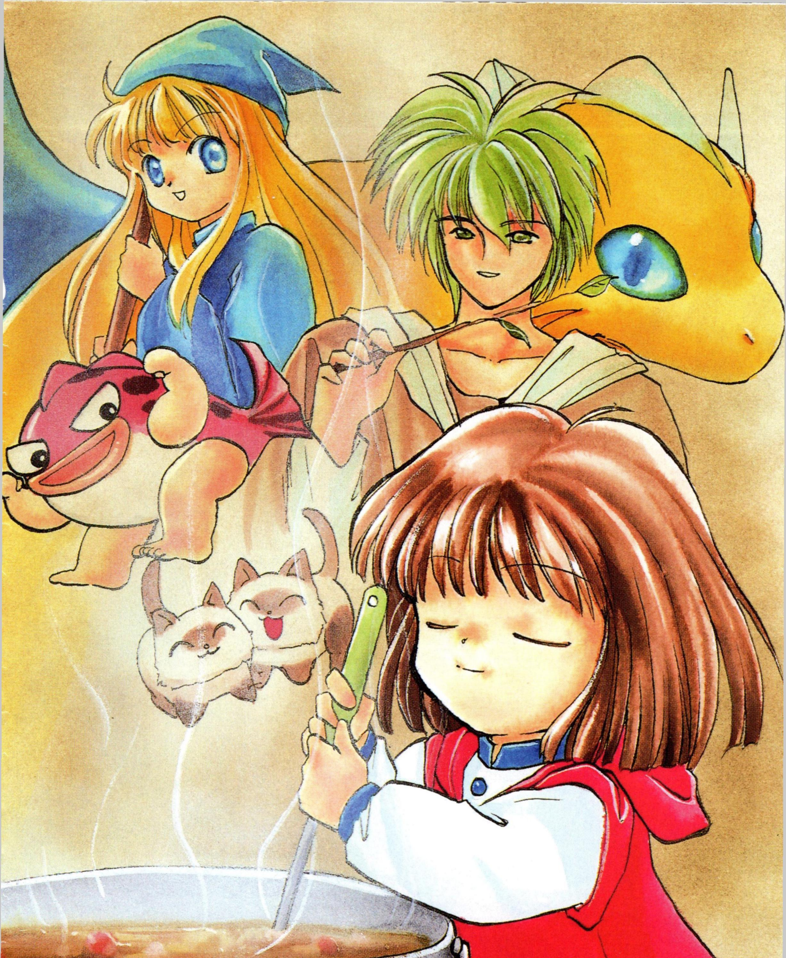
角川文庫

10096


おとうさんは、腰の剣を抜きながら、
いきなりダッシュしました。
そのまま、魔導師にタックル！
不意をつかれたガイコツ魔導師は、
アルルが「あっ！」と思うまもなく……。




「今度は外さないぞ！　ライトニング！！」
ピシャァ―――ンッ！！
呪文とともに、今度は指先からイナズマが！
「きゃあっ！」



アルルはカレーのお鍋をかき回しはじめました。
ぐるぐる……ぐるぐる……。
お鍋をかき回していると、いままで出会ったコトや、
いろんなヒトたちのコトが頭に浮かんできます。

# 新★魔導物語1

アルルとおとぎの国

山本 剛

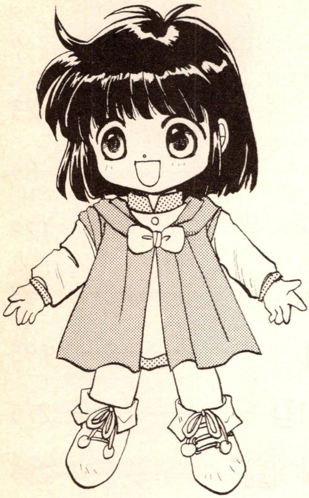
角川文庫 10096

# 目　次



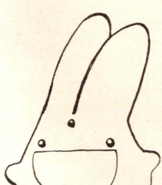
口絵・本文イラスト —— 壱

# 登場人物



## アルル・ナジャ

おたんじょうびを迎えたばっかりの、ピッチピチの4歳!
いつもは元気いっぱいだけど、最近は……。

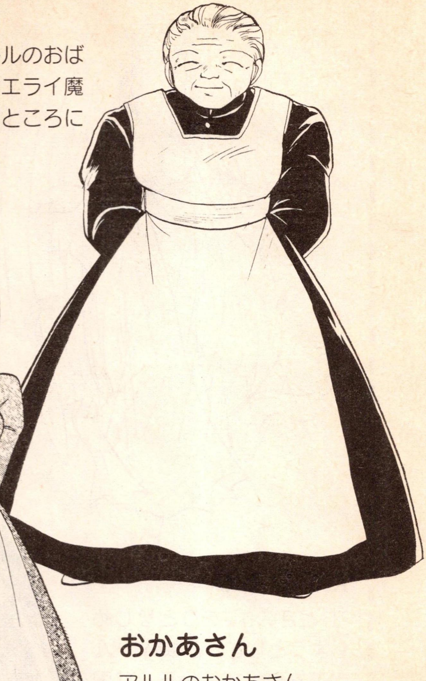


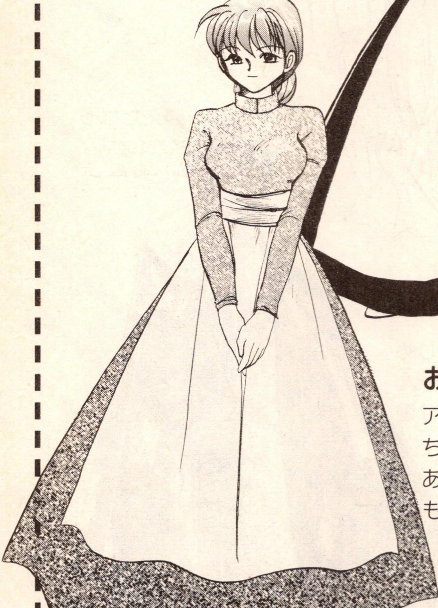
## ふしぎなどうぶつ

しょうたいふめいの、フシギなイキモノ。とにかくいろんなところに出てきては、アルルを助けて(?)くれます。

## おばあちゃん

とってもやさしい、アルルのおばあちゃん。昔はとってもエライ魔導師で、今でもいろんなところに知りあいがいます。





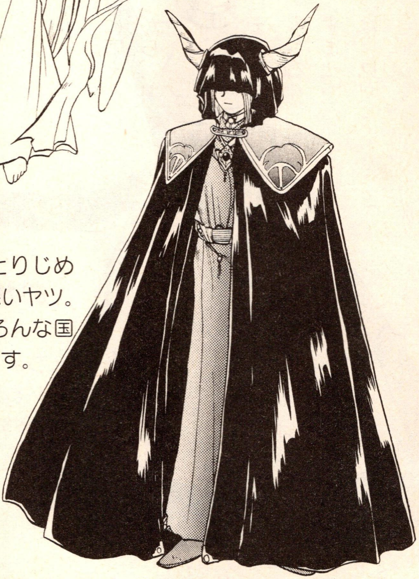
## おかあさん

アルルのおかあさん。
ちょっちロウルサイところがあるけれど、やっぱりとってもやさしいおかあさんです。



## てんしさま

〝おとぎの国〟でイチバンえらいヒト。〝おとぎの国〟が平和でいられるように、どこかで見守っています。



## だいまおう

〝おとぎの国〟をひとりじめしようとしている悪いヤツ。手下を使って、いろんな国を壊したりしています。

# ぷろろうぐ

こん、こん。

誰かが、玄関をノックしました。

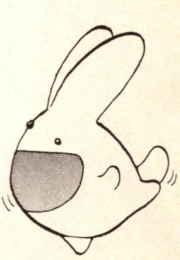
「はーい」

と、キッチンのほうから、ノックに応える声。おかあさんが、奥で洗いものをしているのです。やがて、エプロンで手をふきながら、おかあさんがパタパタと出てきました。

「誰かしら、こんな時間に……」

おかあさんが不思議がるのも、ムリはありません。もう、とっくにお陽サマは「おやすみなさい」して、夜もとっぷりふけてしまっているのです。どこのお家も、夕ゴハンやお風呂をすませて、そろそろ子供は寝る時間。もちろん、ここ、アルル・ナジャのお家も例外ではありません。パジャマへの着替えも、もうすませてあります。

こんな時間にお外を歩いているのは、見回りの兵隊さんとか、コウモリみたいに夜に起きる動物さんとか、コワイ魔物とか、どろぼうさんみたいな悪いヒトたちとか——。



どろぼうさんとかじゃありませんように……。

アルルは、ダイニングにいる自分の目の前をパタパタと横切るおかあさんを眼で追いながら、そう心の中でお祈りしました。まぁ、どろぼうさんとかだったら、ノックなんかしないと思うけど……。ヒトのお家に入ったりするときは、ちゃんとノックをしないといけないんだよ。将来、悪いヒトになっちゃうんだ。おとうさんがそういってたもんね。

「……………」

なぁんてコトを考えていたアルルは、ふとダウンな気持ちになって、テーブルのうえのカップを見つめました。おやすみ前のアイスミルクがカップになみなみとそそがれていて、そこからたちのぼるヒンヤリとした空気が、やさしくアルルの頰をなでます。このアイスミルクが、暑い夏の夜を涼しくサワヤカにしてくれるのです。

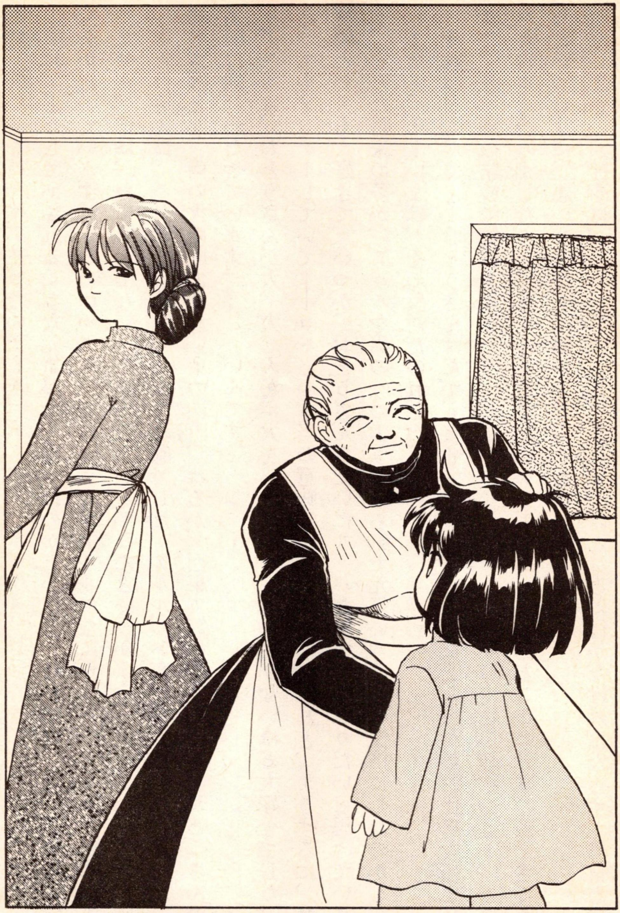
ちなみにカップには、おまんじゅうみたいな身体にウサギのような長い耳——のようなモノや、ちっちゃな手足がついた、黄色い〝ふしぎなどうぶつ〟の絵柄。お店で見たときに、なんでかよくわからないケド、ものすごく気に入ったので、おとうさんにおねだりして買ってもらったものです。カップをくるくる回すと、たくさんの絵柄がひとつになって、〝ふしぎなどうぶつ〟が楽しく踊っているように見えます。

まぁ、それはちょっとおいといて……。

「…………」

おとうさん――。
アルルがふいにダウンな気持ちになったのは、この言葉が頭に浮かんだからでした。
ワガママをなんでも聞いてくれる、優しいおとうさん……。
いろんなコトを知ってて、いろんなコトを教えてくれる、カッコイイおとうさん……。
でも、おとうさんは――。
「あら、どうしたんですか？　こんな遅くに」
玄関のほうから聞こえたおかあさんの声に、アルルは、ハッと我にかえりました。
誰だろう？　おかあさんの知ってるヒトみたい。おとうさんじゃぁ……ないよねぇ……。
「アルルは、まだ起きてるかい？」
と、今度は別の声。アルルのよく知っている声です。それが誰のものなのか、賢いアルルはすぐにわかりました。おとうさんの次に大好き――もちろん、おかあさんも大好きだけど、「甘いものはダメ」とか「子供は早く寝なさい」とかってウルサイから……――な、おばあちゃんです。
ダウンな気持ちをひとまずどこかに置いといて、アルルはおばあちゃんを出迎えようと、ぴょんとイスから飛び降りました。アルルはまだちっちゃいので、イスが高いのです。
ちょうどそこへ、おかあさんとおばあちゃんがダイニングにやってきました。
「おばあちゃん、こんばんわ」

ぺこり、とアルルはおじぎ。するとおばあちゃんは、ニッコリとやさしく微笑(ほほえ)んで、ちょっとかがんでアルルの頭をなでなでしました。
「はいはい。こんばんわ、アルル」
シワシワのお顔が、さらにクシャクシャになっています。だけど、とってもあったかい笑顔です。
「おとなしく、いいコにしてたかい？」
「おとなしい、といえば、おとなしいんですけどねぇ……」
おばあちゃんの後ろで、おかあさんがホッペに手をあてながら、ため息まじりにいいました。
「そうかい……」
おばあちゃんもため息まじりに、そして、さもワケありなようにいいます。
「…………」
そんなおかあさんとおばあちゃんの会話を、アルルは、ちょっとうつむいて聞いていました。おかあさんやおばあちゃんに、なんだか、とても悪いコトをしているような気持ちになったからです。
とはいえ、おかあさんたちが心配するのもムリはありません。
実をいうと、アルルは、こんなクラい性格(せいかく)ではないのです。本当はとっても元気いっぱいで、女のコだけど自分のコトを「ボク」といい、男のコみたいな——それどころか男のコにも負け



ない、強い心を持っているコなのでした。

では、どうしてあふれるような元気がなくなったのかというと、それには、おとうさんが深くかかわっています。……といっても、おとうさんがアルルになにかした、というワケではありません。逆に、なにもしてないから悪い、というかなんというか……。

おとうさんは、それはそれはリッパな魔導師でした。アルルのお家があるあたりどころか、北の雪国とか、南の火の山あたり、東の港町、はるか〝西果て〟の国までにも、おとうさんの名前は知れわたっています。

アルルは、おとうさんが大、大、大と、大をいっぱいつけても足りないほど大好きでした。とってもソンケーしていて——コトバの本当の意味はまだわからないけれど、ようするに、魔導師としても大好きで、いつか、おとうさんみたいにリッパな魔導師になりたいと思っています。そんな将来の夢が、アルルを男のコのような勝ち気で元気いっぱいの性格にしたのかもしれません。……いまは、その反対だけれど。

それはともかく——おとうさんはとても有名ですから、いろんなところからお仕事を頼まれます。魔導師の学校で魔法を教えたり、どこかのイセキ——ものすごく古い建物のコト、とアルルは本で読みました——で見つかったものをケンキューしたり、どこかのお国の騎士さんたちといっしょに、悪いヒトたちや魔物をこらしめにいったり……。

たいていのお仕事は、それをお願いしてきたヒトのところに行かなければならず、何日も帰

ってこないことがよくあります。……というか、正確には、お家にいない日のほうがほとんどです。

おとうさんのいない日はとってもさみしいけれど、アルルは強くて賢いコだったから、泣いたりなんかしません。……もっとちっちゃい頃は泣いてたケド。

なんといっても、

「アルル、お前は強いコだからな。私が帰って来るまで、おかあさんとお家を守ってくれ。頼んだぞ」

と、おとうさんからニンメイされたのが効いています。

本当は、男のコにいうようなセリフだけど、おとうさんは気にもしませんでした。もっと女のコらしく育ってほしいと思っていたおかあさんは、ちょっとあきれていたケド……。

それに、おとうさんは、いつも「この日までに帰ってくるよ」といって出かけていき、必ずその日までに帰ってきました。それどころか、どんなちいさな約束でもやぶったことは一度もありません。

おとうさんは必ず帰ってくるという安心の気持ち、そしておとうさんからのニンメイというはげみがあったからこそ、アルルはおとなしく——ゼンゼンそういうワケにはいかなかったケド——待っていられたのでした。帰ってきたら、なにをして遊ぼうかな？　新しい魔法を教えてもらうのもイイな。……なぁんてコトを考えただけで胸がワクワクドキドキしてきて、夜も

眠れないほどです。

だけどそれは、ずっと前までのハナシ……。

ふた月ほど前、いつものように、おとうさんはお仕事に出かけていきました。

「また魔物退治に行ってくる。相手はいつもよりずっと強いらしいが、まぁ、ひと月くらいで帰ってこれるだろう。……そういえば、その次の月はアルルの誕生日だな。帰ってきたら、しばらくは仕事を受けないようにするよ。誕生日になったら、おばあちゃんも呼んで、みんなでお祝いしような」

と、いい残して……。

それからひと月——。

おとうさんは、帰ってきませんでした。

もちろん、おとうさんは帰ってくる日の約束を、いままで一度もやぶったことはありません。約束の日から何日もたつにつれて、アルルの心配はドンドンふくらんでいきます。

そんなある日、一通の手紙が届きました。便せんに封をするロウにつけられた紋章の豪華さからみて、どこかの国の王様からのようです。

おとうさんのコトが書いてある！　そう直感したアルルは手紙の内容を聞こうとしましたが、

「おとうさん、お仕事が長くかかりそうだから、帰るのが遅れるって。そうならそうって、早くいってくれればいいのにねぇ」

と、おかあさんは笑いながら手紙をクシャクシャにして捨ててしまいました。

明らかにウソをついていて、そして、ムリして笑っています。アルルはとても頭のいいコだったから、それがスグにわかりました。おとうさんは——多分——もう帰ってこないんだ、というコトも……。

その日の晩、アルルは夢を見ました。

眼の前に、おとうさんが立っています。とても強い魔物と戦ったあとみたいで、そこらじゅうキズだらけで、服もボロボロです。

「おとうさん、帰ってきたんだね！」

とアルルは駆け寄ろうとしましたが、身体がゼンゼン動かず、声も出ません。

ひどくすまなそうな顔で、おとうさんは、

「すまない、アルル……。約束を守ってやれそうにない……」

それだけいい、くるっとアルルに背を向けました。いつのまにかその向こうでは、黒いローブを着てガイコツみたいな——というか、ガイコツそのものの顔をした魔導師が、ケタケタと笑っています。アイツが、今度のお仕事の相手のようです。魔導師のまわりには、おとうさんといっしょにそいつと戦っているらしい、どこかの国の騎士さんたち。

おとうさんも騎士さんもボロボロなのに、ガイコツ魔導師はキズひとつ負っていません。

アルルに背を向けたおとうさんは、そいつに向かって歩きはじめました。

「おとうさん！　行かないで！　行っちゃやだ！　帰ってきて！」
とてもイヤな予感がして、アルルは力いっぱい叫びますが、聞こえていないのか、おとうさんは振り向きもしません。
やがておとうさんは、腰の剣を抜きながら、いきなりダッシュしました。そのまま、魔導師にタックル！
不意をつかれたガイコツ魔導師は、おとうさんの捨て身の突撃をまともに受けて、後ろで口をあけていた深い深い谷底に、勢いあまったおとうさんもろとも、まっさかさまに落ちていきました。
アルルが「あっ！」と思うまもなく……。
「アルル……、アルル……！」
「……！」
おかあさんに肩をユサユサされて、アルルはハッと我にかえりました。見ると、おかあさんとおばあちゃんが、心配そうにアルルを見下ろしています。
そういえばアルルは、突然やってきたおばあちゃんに、こんばんわのアイサツをしたところなのでした。そして、アルルに元気がない、というハナシになりかけたところで、アルルは自分の考えに入り込んでしまったのです。
「あの日以来、どうも、ぼぉっとすることが多くって……。特に今日は……」

おかあさんが、おばあちゃんにいいました。原因がよくわかっているだけに、「まったくもう」というため息まじりの気持ちと、悲しい気持ちとがごっちゃになって、フクザツな顔をしています。確かに、女のコなら女のコらしく育ってほしい、とおかあさんはいつも思っていたけれど、元気のないアルルなんて、アルルではありません。それに、おとうさんがいないというのは、おかあさんにとっても悲しいコトです。

例の夢を見てからというもの、アルルは、まるでしぼんだ〝ぷよぷよ〟のように元気をなくしてしまいました。単に、それを見たから、というワケではありません。あとでわかったコトですが、なんと！　あのとき届いたお手紙には、アルルの見た夢とおんなじコトが書いてあったのです。

あのときのおとうさんのお仕事は、とても悪い死霊術師——ネクロマンサーをやっつけるコトでした。ところが、相手がムチャクチャに強くて、このままでは勝てないと思ったおとうさんは、自分の身をギセイにして、死霊術師もろとも谷底に落ちていったのです……。

もう、おとうさんは帰ってこないんだ——。

そう思った途端、アルルは、あふれるような元気がイッキに抜けていくのを感じました。考えるコトがどんどん悪いほうへ、悪いほうへと流れるようになってしまって、おかあさんが、

「大丈夫、おとうさんは強いから、すぐに帰ってくるわよ」

と元気づけようとしても、明るく「そうだね」と応える気にゼンゼンなりません。なにしろ、

おとうさんは下も見えないような谷底(たにそこ)に落ちてしまったのです。いくら一流の魔導師(まどうし)とはいえ、生きて――いえ、無事(ぶじ)でいられることができるでしょうか？

それは確(たし)かに、死んだって決まったワケじゃないし、そうなったなんて信じたくないし、おとうさんは必ず帰ってくるって信じたい……。

だけど――。

と、そんな気持ちが頭の中でぐるんぐるんして、アルルはすっかりふさぎこんでしまったのでした。ここひと月くらいは、街道(かいどう)を見渡(みわた)せる丘(おか)の上に一日中座(すわ)りこんで、神サマにお願いしながらおとうさんが帰ってくるのを待つ毎日(まいにち)です。

けれど、神サマはお願いをかなえてくれず、おとうさんが帰ってくることはゼンゼンありませんでした。

ひと月前も、一週間前も、おとといも、昨日(きのう)も、そして、今日(きょう)も。

今日こそは帰ってきて欲(ほ)しいと思っていたのに……。約束(やくそく)したのに……。

だって、今日は――。

「今日は、アルルにプレゼントを持ってきたんだよ」

トッゼン、おばあちゃんの声がして、アルルは、また自分が考えの中に入りこんでしまっていたコトに気がつきました。

「アルルのお誕生日(たんじょうび)だからね、今日は」

おばあちゃんがいいます。

そう、今日はアルルのお誕生日なのでした。ピッチピチの4歳。今度の春からは魔導幼稚園にはいって、魔導師になるための本格的なお勉強が始まります。

もう、おねえさんになるワケだから、こんなにクラくしてちゃいけないのはわかってる。いつもの元気なアルルに戻らないと——おかあさんのいうように——おとうさんは帰ってこないかもしれないし……。

いつまにか、また考えがダウンなほうに走り出しています。もともと賢いだけに、いったんそうなると、もう止まりません。

「お誕生日おめでとう、アルル」

ニッコリと微笑んで、おばあちゃんはいいました。アルルをなんとか元気づけてあげようという、優しい気持ちがいっぱいつまった笑顔とセリフです。ちなみに、夕ゴハンのとき、同じセリフと笑顔をおかあさんからももらいました。プレゼント代わりの、アルルの大好きなハンバーグカレーといっしょに。……やっぱり、おとうさんのいないゴハンはとってもさびしかったけれど。

「はい、アルル。これはおばあちゃんからのプレゼントだよ」

といいながらおばあちゃんがバッグの中から取り出したのは、一冊の本。とても古そうで、おとうさんの持っていた魔導書みたいに厚くて、なにやらムツカシイ魔導文字が表紙に書いて

あります。いくら賢いとはいえ、まだちっちゃいアルルには、なんて書いてあるのかサッパリわかりません。

「これはね、南の賢者様から借りてきた本で、おもしろいお話がたくさんたくさん書いてあるんだよ」

おばあちゃんはいいました。

南の賢者様といえば、とてもとても偉い――アルルは、おとうさんのほうが偉いと思っていたケド――魔導師です。おとうさんもおかあさんも魔導師だったから、もちろん賢者様のコトをよく知っていて、おばあちゃんなんかは賢者様と昔からのお友達なのでした。

おばあちゃんは、わざわざ南の賢者様のところに行って、この本を借りてきたのです。まるで病気にかかったみたいに元気のないアルルのために……。

「アルルがベッドに入ったら、これを読んできかせてあげるからね」

「ホント!? おばあちゃん、どうもありがとう」

「はいはい」

「もう寝る時間だから、ちょうどいいわね。アルル、お部屋に戻りなさい」

「うん」

おかあさんのいうコトを、いつになく素直にきいて、アルルはキッチンの横にある木の階段を――これまたいつになく軽やかに――登っていきました。アルルのお部屋は、お家の二階に

あるのです。

おばあちゃんがお誕生日のお祝いに来てくれたうれしさと、おばあちゃんが読んでくれるっていうご本の楽しみとがいっしょになって、アルルは、ほんのちょっぴり元気を取り戻しました。そんなアルルの後ろ姿を見ながら、おばあちゃんとおかあさんが、しめしあわせたように微笑んでいるとも知らずに……。

やがて、アルルがベッドに入ってワクワクしながら待っていると、おばあちゃんがやってきました。

ベッドの横にあるイスにこしかけ、膝のうえに本を開いて、

「むかしむかし……」

と、まるで、子守り歌か魔法の呪文のように、おばあちゃんはゆっくりと読みはじめます。

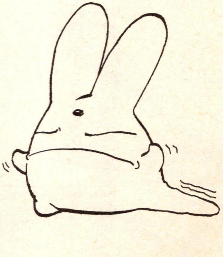
「あるところに、アルル・ナジャというちっちゃな女のコがおりました。そのコは、本当はとっても明るい元気なコでしたが、ある日、おとうさんがお仕事に行ったきり帰ってこなくなってからというもの、まるでどこかに置き忘れたかのように、すっかり元気をなくしてしまいました……」

あれ？　どうしてボクのコトが書いてあるの？

と思う間もなく、アルルはいつのまにか眼を閉じて、夢の中へと入りこんで行きました……。

# おはなの国

ひゅるるるるるるるるるるるるるる……。
アルルは、なぜか落っこちていました。
どうして……？　ボクはベッドにいて、おばあちゃんにご本を読んでもらってるんじゃなかったっけ……？
と思ってみても、落ちるアルルの身体(からだ)は止まりません。
ひゅるるるるるるるるるるるるるる……。
真っ白な光の中を、アルルは落ちつづけます。どこから落っこちたのか、そして、どこまで落ちるのか、まったくわかりません。
ひゅるるるるるるるるるるるるるる……。
頭が、まるで夢(ゆめ)を見てるみたいにぼぉっとしていて、アルルはなんとなく、身体を下――と いうか、落ちている方向にむけて大(だい)の字(じ)に広げ、落ちるがままにまかせることにしました。全身に吹(ふ)きつけてくる風がとっても気持ちよくて、なぜ？　とか、どうして？　って考えるなん



て、なんだかとてもちっちゃいコトのように思えます。

ひゅるるるるるるるるるる……。

風さんが、服――寝る前にパジャマに着替えたはずだけど、いつのまにかいつもの服を着ています――をパタパタとはためかせ、アルルの頬を優しくなでていきます。

あ〜、気持ちがイイなぁ。

でも、ひとりでひゅるひゅるしてるなんてツマンナイな……。そうだ！　今度、おとうさんとかに教えて、みんなで来ようっと。

なぁんてコトを考えていると……、

シュバァッ……!!

突然、アルルのまわりの真っ白な光が消え、眼の前――というか、下――に、地面が広がりました。

ひゅるるるるるるるるるる……。

だけど、落ちるスピードはゼンゼン変わりません。まだ、おとうさんに肩車してもらったときよりずっとずっと――鳥さんが飛んでるような高いところにアルルはいるけれど、このままだと、やがて地面にゲキトツしてしまうのは、誰にだってわかります。

ひゅるるるるるるるるるるるるる……。

それはともかく、アルルの下でいっぱいに広がる大地は、一面のお花ばたけ。赤や青や黄色のお花や、緑色のハッパや草がカラフルで、とってもキレイです。こんなステキな場所、アルルのお家のまわりにはありません。こういうとこで、おとうさんとか、お友だちとかと毎日遊べたらいいなぁ。

……って、そんなにノンビリしてるバアイじゃないよ!!

さっきまでぼぉ〜っとしてたアルルの頭が、だんだんハッキリしてきました。お花ばたけが見えたおかげで、「落ちる!」っていうのが手に取るように感じられたからです。

ひゅるるるるるるるるるるるるるるる……。

まるで急な雪山をソリですべるくらいにけっこうなスピードで、ぐんぐんと地面が迫ってきます。このまま落ちつづければ……。

ひゅるるるるるるるるるるるるるるるる……。

な、なんとかしなきゃ……!

と思ってみても、まわりには掴めそうなところなんてないし、空を飛ぶ魔法なんてまだおとうさんに教えてもらってないし……。

それに、アルルがそう思ったときにはもう遅く……、

どさっ！

アルルは、お花ばたけに頭からツッコミました。とたんに眼の前が真っ暗に！

死んだ!!

とアルルは直感しました。

ああ……、ボク死んじゃったんだ……。そりゃぁ、あんな高いところから、あんなスピードで落っこちたら誰だって……。そういえば、おとうさんもあのガイコツ魔導師といっしょに深い谷底へ……。ボク、おとうさんに会えるところに来たのかなぁ……。

考えることが、どんどんダウンなほうに流れていきます。

だけど……、

「……あれ？」

どうも、様子がヘンです。

アルルのちっちゃなお鼻に入りこんでくるのは、草や花々や土のにおい。手やおデコあたりに、それらを触っているような感触があります。

天国……ってワケでもなさそうだし、地獄でもなさそう。どう考えても、アルルがさっきまで見下ろしていたお花ばたけのカンジです。

ボク、生きてるの……？　あんなに高いところから落っこちたのに……？

そう心の中で首をかしげるのもツカの間、アルルは、だんだん息苦しくなってくるのを感じました。それもそのはず。なにしろアルルは、墜落（ついらく）してからというもの、土の中に顔をうずめるような格好（かっこう）で地面につっぷしていたからです。

と、とりあえず、顔をあげなきゃ……！　このままじゃ、チッソクしちゃうよ！

「ぷはぁっ!!」

ばさっ！

水泳の息つぎをするように、アルルは顔をあげました。その拍子（ひょうし）に、アルルのまわりの草花が、赤や青や黄色や緑のしぶきとなって飛び散り、ひらひらと宙（ちゅう）に舞（ま）います。

「………」

アルルはキョロキョロとあたりを見渡（みわた）しました。やっぱり、落っこちているときに見たものと同じカラフルな光景が、さっきは上からだったケド、今度は水平に広がっています。

あらためて見ると、いっぱいに広がるお花ばたけは、思わずため息が出そうになるくらいにキレイ。とてもカラフルなじゅうたんを、地面にしきつめたようなカンジです。

アルルのおなかくらいもあるワリと背の高い草花が、ポカポカとしたお陽（ひ）サマの光をいっぱいに受けてキラキラしています。そして、サワヤカで心地（ここち）いい風とともにみんながいっせいにザァッとゆれたり、お空を走る雲（くも）さんのカゲが、お花ばたけをサァッと横切っていったり……。

そんなお花ばたけの地平線の向こうに、まわりをぐるっと囲むようなお山がかすかに見えま

す。お山よりも近いところに森も広がっていたりして、ここは、ちょっとした〝お花と緑の国〟ってカンジです。

お花も、森も、雲さんも、お陽サマも、お空も、ボクも、みんなみんな生きてるんだ……！

アルルは思わず、お花ばたけの真ん中で、そんなコトを考えました。それほどまでに、ここは命のエネルギーにあふれているのです。

ここはまるで天国のような居心地だけど、そうじゃないみたい。やっぱりボクは、あんなに高いとこから落ちたのに、無事だったんだ……！　よかったぁ……。

アルルは、ホッと胸をなでおろしました。死んで天国に行けばおとうさんに会えたかもしれないけれど、4歳になったばかりでイキナリ死んじゃうのもちょっと……。

と安心した途端に、新しいモンダイがアルルの頭の中でむくむくと大きくなってきます。

「ここ、ドコ……？」

キョトキョトとあたりを見回しながら、アルルはつぶやきました。

天国みたいにキレイなお花ばたけはイイんだけれど、こんなところにアルルは一度も来たコトないし、聞いたコトもありません。

ここはドコ？　お家はドコ？　ボク、いったいどうやってここに来たの……？　と、次々とギモンが浮かんできます。だけど、答えはいっこうに出る様子がありません。

もしかして、ここってボクんちの近くなのかなぁ……？　実は、おばあちゃんとおかあさん

しか知らないヒミツのお花ばたけで、ビックリさせようと思って、ボクが寝てるあいだにそっと連れてきたとか……？

そう思い立って、アルルはおっきな声でおかあさんを呼ぶことにしました。

「おかあさぁ――――ん!!」

だけど、イジワルをしてるのか、それともここにはいないのか、おかあさんの返事はありません。

「おばあちゃぁ――――ん!!」

今度はもっとおっきな声で、おばあちゃんを呼んでみます。でもやっぱり、返答はナシ。それどころか、こういうところにいそうな動物さんたちが、アルルの声に驚いて顔を見せるような気配すらありません。

「………」

アルルは、なんだか心細くなってきました。まわりにあるのは、草花や木々ばかり。よくよく見たら、花々のあいだをヒラヒラと飛ぶチョウチョの姿もありません。

お花ばたけに、アルルはひとりぼっち……。

というか、まるで世界中の生き物がアルルを残していなくなっちゃったような、そんなカンジです。

やっぱりここは天国で、地面にゲキトツしてアルルは死んでしまったのでしょうか……？

「おとうさぁ――――んっ!!」

思わずアルルは、心の片隅ではムダだと考えつつ、力いっぱい声をはりあげておとうさんを呼びました。

「…………」

だけど――やっぱり――いくら待っても、おとうさんの返事どころか、おかあさんやおばあちゃんの声、小鳥さんたちのさえずりすら聞こえてきません。

ザザァッ……。

アルルのちっちゃな耳に入ってくるのは、風にゆれる草花の音だけ。「大丈夫、ひとりぼっちじゃないよ。ボクたちがいるから」と、アルルを元気づけてくれているように聞こえます。

ちょっと前のアルルだったら、この草花たちの声にはげまされて――もともとがあんまり悩まない性格だったけれども――、お家を探すために、とりあえず適当なところに向かって歩き始めたことでしょう。テキトーに歩いていれば、そのうち誰かと会えるよ、ってカンジで。

だけどいまは――おとうさんが帰ってこないと知ってからこっち、すぐダウンな方向にウジウジ考えこんでしまう、弱虫泣き虫アルルです。草花たちの声なんて、なぐさめにもなりません。だいたい、本当に草花がしゃべっているワケじゃないし、もし本当にしゃべったとしても、アルルのお家がドコかなんて知ってるかどうか……。

おかあさんもいない……。
おばあちゃんもいない……。
おとうさんも……。
みんなみんな、いなくなっちゃった……。
「…………」
とても心細くて、さみしくて、どうしていいのかまったくわかりません。お花ばたけの真ん中に座りこんだアルルの眼に、涙がどんどんたまっていきます。
「う……」
わぁ〜〜〜ん!!
と、声をあげて泣こうとした瞬間！

ガサガサッ……！

突然、アルルのすぐ右そばの草花が、キミョーにゆれました。
アルルはドキッとして泣き声を飲みこみ、涙のいっぱいたまった眼をそちらに向けます。
ガサガサッ……！
風さんが草花をゆらしてるにしては、とても不自然です。
ガサガサガサッ……！

なにか、動物が草花の向こうでゴソゴソしてるような、そんなカンジです。

「………」

完全に身体が凍りついてしまって、アルルはそこから眼をはなすことができません。自分のほかになんか生き物が出てきて――正確には出てきそうなところだケド――、ホッとする気持ちはちょっぴりあります。だけどそれ以前に、イキナリ出てきたのでビックリしたのと、コワイ魔物が出てきたりしたらどうしようという気持ちが先に立ってしまって、身体が動かないのです。

ライオンとかトラみたいなコワイ動物だったらどうしよう……。

食べられちゃったりしたらどうしよう……。

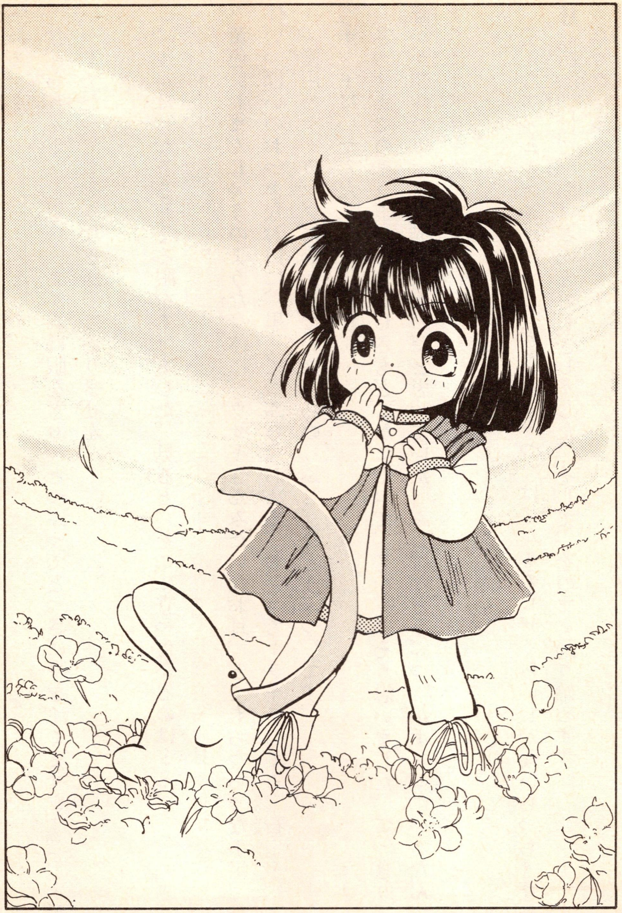
そんな考えが、アルルの頭の中でぐるんぐるんしています。まわりの草花はアルルよりも背が低いから、ホントにライオンとかがいるなら、スグにわかってしまうでしょう。だけどいまの弱虫泣き虫アルルには、そんなコトを考えるヒマもありません。

ガサガサガサッ……！

と、またひとしきりゆれたのち、

ぴょん！

黄色いナニかが、草花のあいだから飛び出しました。



「わぁっ！」
食べられる！　と思い、アルルは眼をぎゅっとつぶってとっさに身をすくませます。……が、いつまでたってもそうなる様子はありません。
「……？」
アルルは、おそるおそる眼をあけました。見ると、そこに立っているのは……、
「ぐ――――」
黄色いおまんじゅうのような身体に、ウサギさんみたいなお耳、とてもちっちゃな手足、身体いっぱいのおっきなお口に、黒くてつぶらなおめめ、おデコでキラキラしてる宝石……。アルル愛用のマグカップに描かれていた、あの〝ふしぎなどうぶつ〟です。
ホントにいたんだ……。
さっきまでのキョーフもさみしさもどこかにやって、アルルはそう思いました。てっきり、誰かが想像でカップに描いたものだと思っていた〝ふしぎなどうぶつ〟がホントにいるなんて、まさにオドロキ桃の木です。
「ぐ〜〜」
そんなアルルをよそに、〝ふしぎなどうぶつ〟はアルルのヒザくらいしかないちっちゃな身体を折り曲げて、ちょこんとおじぎしました。そして、そのまま踊り始めます。
「ぐっぐぐっぐぐ〜〜〜〜〜」

右にステップして、おっきな口から長い舌（した）をべろ〜〜〜ん。
「ぐっぐっぐっ」
今度は左にステップ。そして宙返（ちゅうがえ）り。さらに左にステップして、
「ぐっぐっぐっ」
おなかをつきだして、タイコみたいにポンポコポン。
なんだか、見てるほうまで楽しくなってくるような踊りです。
「…………」
アルルはいつのまにか、そんな、とっても楽しそうな〝ふしぎなどうぶつ〟の踊りに、じっと見入（みい）っていました。さっきまでのコワイ気持ちも、さみしい気持ちも、完全に消え去っています。
「ぐ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ」
〝ふしぎなどうぶつ〟は、アルルの背丈（せたけ）より高くジャンプして、コマみたいにくるくるくるくるくる……。
「わぁ〜〜〜★」
いつのまにか涙（なみだ）もひっこんでいて、アルルは思わず歓声（かんせい）をあげました。泣いたカラスがもう笑った、ってカンジ。
「ぐ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ぅ」

くるくるくる……、と〃ふしぎなどうぶつ〃は回転しながら落ちはじめ、

「ぐ！」

着地と同時にちっちゃな手足をちょこんと広げて――アルルの歓声に応えるように――フィニッシュ！

ぱちぱちぱち……★

気がついたら、アルルは拍手していました。なんだかよくわからないけれど、アルルをそうさせずにはいられない、フシギな力が〃ふしぎなどうぶつ〃の踊りにはあったのです。もう、ここはドコ？　とか、ひとりぼっちでさみしい……とかなんて、アルルの頭の中にはありません。〃ふしぎなどうぶつ〃のくるくるした踊りのコトでいっぱいです。

「ぐ」

黄色い〃ふしぎなどうぶつ〃は、またちょこんとおじぎしました。そして、くるりと背中を向けると、また草花の中にガサガサと入っていきます。

「あ……ま、待って……！」

アルルは、慌ててそのあとを追いかけました。〃ふしぎなどうぶつ〃についていけばお家に着けるかも、とか、またひとりぼっちになるのはイヤ、とかなんて考えはなく、とにかく追いかけてしまったのです。

ガサガサ……ガサガサ……。

　このお花ばたけの草花はけっこう背が高いから、それに隠れてしまっていて〝ふしぎなどうぶつ〟の姿は見えません。だけど、ガサガサと草花がゆれているので、ドコにいるのかはだいたいわかります。その様子はまるで、土の中をもぐもぐと進むモグラさんみたいです。

　アルルは無心で、ただひたすらに〝ふしぎなどうぶつ〟を追いつづけました。

　ガサガサ……ガサガサ……。

　アルルが追いかけているのを知っているのかいないのか、〝ふしぎなどうぶつ〟は、あっちへフラフラ、こっちへフラフラと歩きつづけます。まるで、よっぱらってフラフラのおじさんみたいです。

「…………」

　アルルの頭の中は、もう〝ふしぎなどうぶつ〟のコトしかありません。脇目もふらずに、ガサガサ目指して進みつづけます。ドコをどうやって歩いているのか、とか、ココはお花ばたけのどのへんなのか、とかを考えてるヒマなんてありません。

　だけど、こんなに必死になって、夢中になって追いかけてるのに、〝ふしぎなどうぶつ〟との差はいっこうに縮まらず、それどころか、どんどんと広がっていきます。

「ま、待ってよぉ……!」

　と、〝ふしぎなどうぶつ〟に声をかけようとした瞬間、

## どてっ！

「きゃっ！」

イキナリ、アルルはなにかにつまずいて転んでしまいました。〝ふしぎなどうぶつ〟を追いかけるのに夢中で、まわりの様子なんて気にしていなかったのだから、転んでしまうのはあたりまえです。

ちょっと前までの、元気のないアルルだったら、ここで「イタイよぉ」とかいってベソをかいていたことでしょう。だけど草花がクッションになってくれたおかげでゼンゼン痛くないし、〝ふしぎなどうぶつ〟を追いかけなきゃというのが頭から離れなかったので、アルルは泣きませんでした。

アルルはすっくと立ち上がり、服やヒザについた土をぱっぱと払ってから、〝ふしぎなどうぶつ〟の目印のガサガサを探しますが……、

「………」

やっぱりというかなんというか、〝ふしぎなどうぶつ〟を完全に見失ってしまいました。ジックリとあたりを見回しますが、ドコにもガサガサは見当たりません。

その代わり……、

ヒソヒソヒソ……ヒソヒソヒソヒソ……。

と、どこからか、声のようなものが聞こえてきました。

「……？」

アルルが耳をすませると、

ヒソヒソヒソ……ヒソヒソヒソ……。

やっぱり聞こえます。誰かが、ドコかで話をしているようです。

「……」

声のするところを探して、あたりをぐるっと見渡しました。

「……！」

やがて、お花ばたけの真ん中にぽつんと生えている、一本の木を発見。

ヒソヒソヒソ……ヒソヒソヒソ……。

どうやら声は、そっちのほうから聞こえてくるようです。

誰だろう……？　ナニを話してるんだろう……？　さっきの〝ふしぎなどうぶつ〟さんなのかなぁ……？

そう思って、アルルはそっちに向かって歩き始めました。ハナシをしてる人たちを驚かせないように、そぉっと、そぉっと……。

ヒソヒソヒソ……ヒソヒソヒソ……。

木にだいぶ近づいたけれど、誰がどんなコトを話してるのか、まだわかりません。もうちょ

っと近づかないとダメのようです。目の前の木に隠れれば、誰にも見つからないで向こう側をうかがえるかも……。木はそんなに大きくない――むしろ、小さいほうだケド、アルルが隠れられるくらいの横幅はありそうです。

アルルは、またそぉっと近づきました。そして、隠れようと木に触った途端……！

「誰ですか!?」

予想外の展開！　なんと、木がイキナリふりむいてしゃべったのです。

「ぅわぁっ！」

どてっ。

アルルは驚きのあまりにバランスを崩して、しりもちをついてしまいました。

「おっと失礼、可愛らしいおじょうちゃん」

木はまたしゃべります。

よくよく見ると、それは普通の木ではなく、木のモンスターでした。人間が木をすっぽりかぶって、上から頭を出したってカンジ。木の両脇に開けた穴から、木の枝をにぎった両手が出ています。

「さぁ、おにいさんの手につかまりなさい。人生、七転八起です」

ムツカシイことをいいつつ、自分のコトをおにいさんと呼ぶ木のモンスターは、右手――に

にぎった枝をアルルに向けて差し出します。

「………」

アルルはしりもちをついた格好のまま、モンスターの顔をじっと見つめました。

その顔は、普通の――よりはカッコイイ、人間のおにいさんのものです。サラサラした緑色の髪に、精霊や妖精さんのように澄んでキレイな眼。エリ首まわりや腕をおおっている――つまり〝木〟の下に着ている白いパーカが、ちょっちファッショナブルなカンジ。

どうやら、悪いヒト――というか、モンスターではないようです。

「どうしたんですの？」

ひょこっ。

と、木のモンスターさんの後ろから、また誰かが顔を出しました。瑞々しくウェーブのかかった長い長い――これまた――緑色の髪の、キレイなおねえさんです。

それにつづいて、

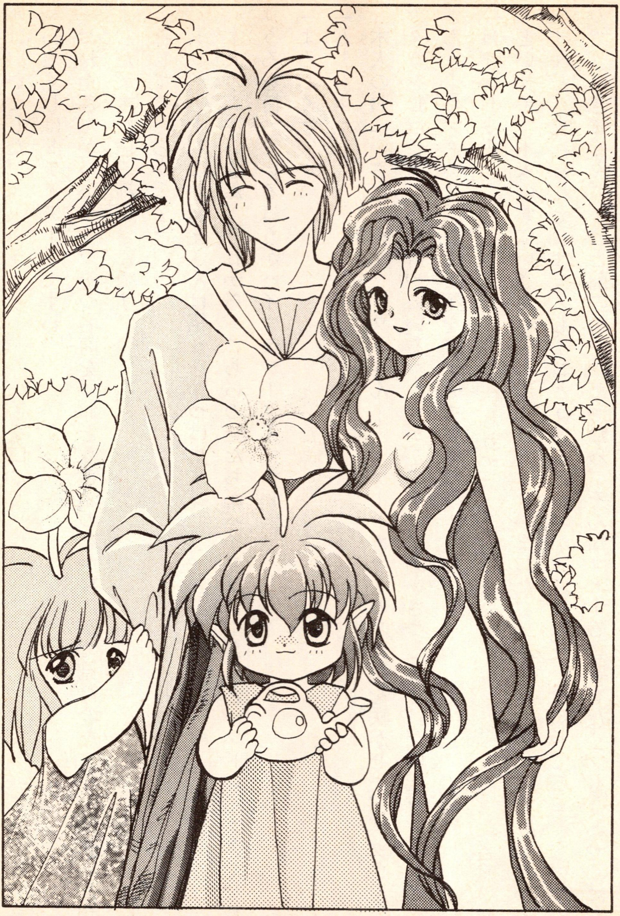
ひょこっ。

ひょこっ。

今度は頭に花をのっけた――というか、生やした、アルルくらいの女のコがふたり、顔を出します。

「あらまぁ」

おねえさんはアルルを見ると、上品に手を口にあてて驚きの声をあげました。
「ニンゲンの女のコですわね」
「どうやら、そのようです」
木のおにいさんが応えます。
「お珍しいですわね、こんなところにニンゲンがやってくるなんて」
いいながらおねえさんは、しりもちをついた格好のままのアルルの前にやってきました。よくよく見ると、おねえさんは服を着ていません。だけど長い長い髪が服のかわりになって、美しい身体をおおっています。
おねえさんはしゃがんで、ニッコリとした微笑みをアルルに向けました。
「あなた、お名前は?」
「え……?」
イキナリ名前を聞かれて、アルルはちょっとドギマギしました。見も知らないヒトから名前を聞かれて、なんだかハズカシくて、コワくて……。
でもスグに、いつもおとうさんからいわれていたコトを思いだしました。「誰かに名前を聞かれたら、ちゃんとハッキリ答えるんだよ」と。
「ア……アルル……」
ハッキリ、というワケにはいかなかったけれども、ほんのちょっぴりの勇気を使って、アル



ルはいいました。

「わたくしはドライアードですわ」

おねえさんがいいます。その名前を、おとうさんの本かなにかで見たのをアルルは思いだしました。木に宿る精霊さんです。

「そしてこちらが……」

ドライアードのおねえさんは紹介をつづけます。

「木人のおにいさん。それから、こちらのコたちがハイフラワーさんとマンドレイクさん。じょうろを持っているほうがハイフラワーさんですわ」

「よろしく」

「どーもぉ」

木人のおにいさんとハイフラワーさん――ショートカットの頭に花を咲かせて、ゾウさんのカタチをしたじょうろを持っているコ――が、アルルにあいさつします。だけどマンドレイクさん――ロングヘアーの上で花を咲かせているほう――は、

「はずかし……」

といって、木人のおにいさんの後ろに隠れてしまいました。アルルもできればそうしたかったけれど、隠れられそうなモノも、おとうさんとかおかあさんみたいな知ってるヒトもいないので、できません。ずっと前のアルルだったら、そんなコトする必要もなく、もうとっくにみ

んなとお友だちになってるところだケド……。

「こ、こんにちわ……」

アルルはまだちょっとドギマギしながら、立ち上がっておしりについた土をはらって、みんなにあいさつしました。なんとかそれができたのは、「ヒトからあいさつされたら、自分もあいさつを返さなきゃいけない」と、いつもおとうさんにいわれていたからです。みんな、おとうさんの本で見たコトがある――と思いだしたのも、ちょっと関係しているかもしれません。木人のおにいさんも、マンドレイクさんも、ハイフラワーさんも、ドライアードさんと同じ精霊、妖精系のモンスターです。まぁとにかく、悪いヒトたちじゃないというのは間違いありません。

「〝おはなの国〟へ、よーこそぉ！」

頭のうえのお花をパッと開いて、ハイフラワーさんがいいました。

「と、歓迎したいのはヤマヤマなんですけど……」

ドライアードのおねえさんが顔をちょっと曇らせながらいい、

「いま、この〝おはなの国〟は大変な状況にあるのです。絶体絶命、というヤツですな」

ムツカシイ言葉とともに、木人のおにいさんがつづけます。

「……？」

「ごらんなさい」

アルルが首をかしげていると、木人さんはアルルに背を向けていいました。

「……！」

おにいさんの向こうに広がっている光景は、まさに地獄！　花びらはバラバラに飛び散り、茎はメチャクチャに手折られ、草花の根などは思いっきりほじくりかえされています。まるでゾウさんの大群がとおったような、誰かがメチャクチャに耕そうとしたような、そんなカンジです。

「………」

あまりのモノスゴさに、アルルは声も出ません。

アルルが落っこちたところは一面に花が咲き乱れていました。だけどそれは、まだなんとか無事だったにすぎません。そして、あの〝ふしぎなどうぶつ〟を夢中で追いかけているうちにそこを離れ、ここまで来てしまったのでした。

お花ばたけのメチャクチャな状況は、はるか地平線のかなたまで――よくよく見たら、アルルたちのまわりにも――いっぱいに広がっています。

これでは、木人さんみたいな草花の精霊さんたちが困るのも、ムリはありません。草花がなくなってしまったら、〝おはなの国〟が〝おはなの国〟でなくなってしまいますから。

「………」

「これは、〝だいまおう〟のしわざですわ」

アルルが呆然とまわりを見つめていると、ドライアードさんがいいました。

「〝だいまおう〟……？」

「〝おとぎの国〟を支配しようとしてる、悪いヒトなの……」

マンドレイクさんが木人おにいさんの後ろで、はずかしそうにアルルの質問に応えます。

「ここは、〝おとぎの国〟のひとつなの……。〝だいまおう〟がモンスターを使って、ここを壊そうとしてるの……」

「〝だいまおう〟の手下は、いまは鳴りをひそめていますが、いずれここが不毛の地となるのは、火を見るより明らか……」

「つまり、いまはモンスターいないけど、また攻めて来たら、そのうち〝おはなの国〟が壊されてしまうというコトですわ」

おにいさんのムツカシイ言葉を、ドライアードさんがアルルにもわかるように説明。

「…………」

なるほど、とアルルは思いました。〝ふしぎなどうぶつ〟追いかけているときにアルルが聞いたヒソヒソ声は、みんなでどうしたらいいのかを話し合っていたものなのでしょう。

なんとかしてあげたいな……。

困ってるヒトを見過ごすワケにはいきません。これも、おとうさんやおかあさんからいつもいわれていたコトです。

だけど、どうやって助けたらいいのでしょう？　〝だいまおう〟の手下っていうくらいだから、アルルなんかが戦っても勝てそうにないし、それはコワイのでちょっとイヤかも……。それ以前に、ここはいったいアルルのお家からどれくらい離れているのかとか、どうやってお家に帰ったらいいのかとかがまだゼンゼンわかっていません。
元気いっぱいの頃のアルルだったら、自分のコトはまずおいといて、迷わず木人さんたちをなんとかしてあげようとすることでしょう。場合によっては、〝だいまおう〟の手下のモンスターに、たったひとりで立ち向かったかもしれません。
だけどいまは、元気のない気弱なアルル。みんなを助けてあげたいけれど、自分もお家に帰りたいし……と、考えが頭の中でぐるんぐるんしてしまって、なかなか結論がだせません。
「コレコレ……」
アルルが悩んでいると、ハイフラワーさんがなにか取りだしました。
布で大事そうにくるんである、アルルの頭くらいの大きさもあるサボテンです。
「なに、コレ……？」
「コレはね、〝つめたいサボテン〟っていうんですぅ」
アルルがそれに手を近づけただけで、なるほど、ハイフラワーさんのいうとおり、ヒンヤリとします。
「あっちの森にコレを持っていければ、そこにいる切り株のおじいちゃんがモンスターをやっ

つけられるクスリを作ってくれるんだケド……」

いいながらハイフラワーさんの指差した先、メチャクチャなお花ばたけの向こうに、たしかに森が見えます。だけどかなり遠くて、走ったとしても相当な時間がかかりそうです。

「しかし、それを手下に発見されずに行うのは、至難の業」

「ようするに、ムツカシイってコトですわ」

おにいさんのセリフに、おねえさんのさりげない説明。

「見つかったら、絶対に〝つめたいサボテン〟は取り上げられてしまうでしょうし」

ドライアードのおねえさんは、ため息まじりにいいます。

「いったい、どうしたらよいのでしょう……」

みんなみんな困っています。もちろん、アルルも困っています。なんとかしてみんなを助けてあげたいし、ボクはお家に帰りたいし……。

「む！　窮すれば通ず。もしくは、必要は発明の母！」

木人のおにいさんはイキナリ、またムツカシイ言葉をいいました。そして、アルルをじっと見降ろします。

「アルルさん……といいましたか、ちょっと、おにいさんのお願いをきいてもらえませんでしょうか？」

「え……？」

「どうなさるんですの？」

ドライアードさんが聞きました。

「アルルさんに、オトリになっていただくのです」

「ええっ!?」

衝撃的なおにいさんのセリフに、みんなが――もちろんアルルも――いっせいに驚きの声をあげました。それにかまわず、おにいさんはつづけます。

「そして、モンスターがアルルさんに気を取られているスキに、おにいさんたちは〝つめたいサボテン〟を切り株の老人にお届けする、と」

「ちょっとカワイソーだと思うの……。こんなちっちゃなコをオトリにするなんて……」

消え入りそうなマンドレイクさんの意見に、アルルはうんうんと心の中でうなずきました。正直いって、オトリなんてコワイことはイヤです。

「ですが……」

おにいさんは、噛んで含めるように、みんなに向かっていいます。

「〝だいまおう〟の手下は、おにいさんたちの顔を知っています。もし、そんなおにいさんたちの誰かがオトリになったとしても、すぐにバレてしまいましょう。相手もそれほど愚かではありませんし。逆に、アルルさんだけがここに立っていたとしたら、どうでしょうか？ 単に、

ニンゲンの子供がなにも知らずにここに迷い込んできただけだと思いこむことでしょう」
「それはそうでしょうけど……」
ドライアードさんが口をはさむのを、木人のおにいさんは手——に持った枝で黙るようにジェスチャーして、
「確かに人面獣心な作戦ではありますが、もはや目的のために手段を選んでいる場合ではありません」
といいました。言葉はあいかわらずムツカシイけれど、木人のおにいさんもアルルに悪いと思っているのは間違いなさそうです。
まぁ、みんないいヒトみたいだし、木人さんも〝おはなの国〟をなんとかして守りたいからこそ、ボクをオトリにするとかっていってるんだよね。それを考えると、なんとかチカラになってあげたいなぁって思う。だけど、オトリになるのはちょっと……。モンスターにあっさりやられちゃったら、お家に帰れないよ。それに〝だいまおう〟っていうくらいだから、その手下だってかなり強いはずだよ。そう、おとうさんが自分の命とひきかえに倒した、あのガイコツ魔導師みたいに……。
と、アルルがまたダウンな考えに入りこんでいると、
「というワケで、頼みましたよ。アルルさん」
ポン。

イキナリ、木人さんはアルルの肩をたたいていいました。ホントは木の枝を持ってるから、ポン、じゃなくてカサッっていう音だケド。

「え……?」

見ると、木人さんだけじゃなく、ドライアードさん、ハイフラワーさん、マンドレイクさん、みんなが「お願い」っていう眼をしています。アルルが考えこんでいるウチに、アルルをオトリにするという作戦がまとまってしまったようです。

「大丈夫、切り株の老人に〝つめたいサボテン〟を渡したら、スグにおにいさんたちはキミを助けに行きますから。大船に乗ったつもりでいてください」

木人のおにいさんがいいました。

「お……お願いなの……」

はずかしそうに、だけど、なんとかその気持ちを乗り越えて、マンドレイクさんもいいます。

こんなに頼りにされてしまったら、断るワケにはいきません。もしそんなコトをしたのがバレたら、おとうさん——生きていたらだけど——やおかあさんから大目玉をくらってしまいます。それ以前に、困っているヒトを見過ごすような悪いコは、おとうさんみたいな一流の魔導師どころか、リッパな大人にもなれません。

「う、うん……」

アルルはうなずきました。ちょっと、いや、だいぶコワイけど、やるしかありません。

「では、おにいさんたちは時間がありません。善は急げです。早速、〝つめたいサボテン〟を老人のところに届けてきます。あとはよろしく」

と木人さんがいうが早いか、みんな、スタコラサッサと切り株のおじいさんがいるという森に向かってダッシュしました。

「あ……。ちょ、ちょっと……」

ちょっと待って、とアルルがいおうとしたときにはもう遅く、おにいさんたちの姿はコメツブみたいに小さくなっていました。モノスゴイ速さです。もはや、アルルが力いっぱいおっきな声を出しても届かないでしょう。

ぽつん……。

アルルは、メチャクチャにされたお花ばたけに、ひとり取り残されてしまいました。

「……………」

あたりを見回しても、なにもありません。さっきの〝ふしぎなどうぶつ〟は出てきそうにないし、ドライアードのおねえさんたちの姿も見えません。あんなに速かったのだから、もう森に着いたでしょうか……？

「……………」

いたたまれなくなって、アルルはその場に腰をおろしましたが、ナニかが出てくる気配はないようです。心細いけれど、木人さんたちがいることはわかっているので、落っこちたばかり

のときほどではありません。

「………」

さんさんとしたお陽サマが、アルルや、茎を折られたり花びらを飛ばされたりした草花を元気に照らしています。なんだか、見てて心が痛くなってくるような、そんなアンバランスな光景です。

「………」

それから、どれくらい時間がたったでしょうか……？

いつまでたっても〝だいまおう〟の手下が出てくるような様子はないし、ドライアードさんたちが戻ってくるカンジもありません。

みんな、ボクを置き去りにして逃げちゃったのかなぁ……。それはヤだなぁ……。でも、そんなコトするようなイジワルなヒトたちには見えなかったケド……。いやいや、そうやってヒトを疑っちゃイケナイんだよ。海みたいな広い心を持ってないと、一流の魔導師にもなれないっておとうさんいってたもんね。

それにしても、ココはいったいドコなんだろう……。いや、〝おとぎの国〟のなかの〝おはなの国〟だっていうのはわかってるんだケド……。ボク、お家に帰れるのかなぁ……。モンスターにイッパツでヤられちゃったら、どうしよう……。おとうさんどころかボクまでいなくなっちゃったら、おかあさん――おばあちゃんも、悲しむだろうなぁ……。おかあさんたちが悲

しむコトはしたくないなぁ……。ボクだって悲しいし、それに……。
なぁんて、またアルルがひとりで考えこんでいると、

ぬっ。

トツゼン影(かげ)がさして、アルルの周(まわ)りが暗くなりました。まるで、アルルの真上に雲(くも)がきたようです。でもそれにしては、影はそのまま動きません。
「……?」
不思議(ふしぎ)に思ってアルルが顔をあげると……、
「なんだオメ?」
カカシさんが眼(め)の前に!
「うわぁっ!」
イキナリのことにアルルは驚(おどろ)き、勢(いきお)いあまって後ろに転(ころ)がってしまいました。
「そったただ驚くこたねーべさ」
麻袋(あさぶくろ)で作ったような顔で、カカシさんはいいます。
「ご、ごめんなさい……」
アルルは立ち上がり、土を払(はら)いながらあやまりました。
「うンうン、なかなかスナオだスな。オラはスケアクロウいうだス。オメさんは?」

「ア、アルル……」

「そっかそっか、イイ名前してるだスな」

スケアクロウさんは、まさにカカシといったカンジ。しゃべるたびに、顔の縫い目のような口がモゴモゴします。その上にはボタンを縫いつけたような黒い眼、さらにその上はちょっとボロボロのムギワラ帽子。それから木の棒にワラを巻きつけたような身体に、カスリの着物。もちろん足は一本です。それよりもなによりもアルルの眼につくのは、軍手をはめた右手ににぎられた、死神かなんかが持ってるような、おっきな鎌。鋭く研がれていて、コワイかんじがします。だけど、それとは裏腹に、スケアクロウさんの口調は気のいいおじさんってカンジ。

「ンで？　オメさん、あんでこっただトコにいるだス？」

「よく、わかんない」

このヒトが〝だいまおう〟の手下なのかな？　と心の中で首をかしげつつ、アルルは答えました。

「わがんねってこたねーべさ。……ははぁ、もしがすっと、オメさんニンゲンだスな？」

「うん……」

「そっかそっか、知らねぇまに〝おとぎの国〟に迷いこんだだスな？　まァとにがく、こっからさっさと離れで早よ帰りなっせ。ココはあぶねぇだス」

「ど、どうして……？」

「オラ、ココの花をみんな刈(か)らねばなんねぇだスよ。思っきり鎌(かま)ブンまわすがら、あぶねぇんだス。オラの鎌は斬(き)れるとすんげぇ痛ぇだスよ」

やっぱり！　このスケアクロウさんが〝だいまおう〟の手下(てした)なんだ！　そうアルルはカクシンしました。そうとわかったら、絶対に草花を刈らせるワケにはいきません。

「ホレホレ、さっさと帰るだス。んでながったら、ココを動くんでねぇだス。ココはもう刈った後だスからな」

「ちょ、ちょっと待って！」

スケアクロウさんが行こうとするのを、アルルは着物をつかんで引き止めました。

「あんだス？　仕事のジャマしねぇでけろ」

「で、でも……」

「いいてぇことがあんなら、ハッキリいうだス。ねんならオラ行くだスよ」

「お、お花ばたけを荒(あ)らさないで……！」

イキナリあの鎌でスッパリ斬られたらどうしようと思いつつ、アルルは、なんとか勇気を出していいました。

するると、

「あ〰〰〰〰〰〰に〰〰〰〰〰〰？」

ジロッ！　ってカンジ――表情がないから、そんな雰囲気で、スケアクロウさんはアルルをニラみました。こうなると、さすがに〝だいまおう〟の手下ってカンジです。

「あんでオメさんがそっただことというだス？　ニンゲンには関係のねぇことだス。口出ししねでけろ」

「で、で、で、でも……」

スケアクロウさんの迫力的なコワイ雰囲気に、アルルはすくみ上がってしまって、まともに言葉を出せません。

「ははぁ〰〰〰〰ん……？」

スケアクロウさんのコワイ迫力がどんどん増してきて、お陽サマの光を受ける鎌が、さらにそれを大きくさせています。

「もしがすっとオメさん、木人になんかいわれただスな？」

「し、し、知らないよ……！」

ブンブンブンとアルルは懸命に首を振ります。

「木人のおにいさんも、ドライアードのおねえさんも、ハイフラワーさんも、マンドレイクさんも知らないし、ボクがオトリになれなんていわれてないよ！」

なんというコトでしょう！　アルルは気が動転するあまり、ホントのことを口走ってしまったのです！

「あ……!!」

「やっぱス」

ずいっ！

スケアクロウさんは、まさしくモンスターといった凶悪な雰囲気の――無表情だけによけいコワイ顔を、アルルに近づけました。

「スナオにいうだス。木人たちはドコだスか？」

「………」

いくらなんでも、そんな大事なコトをしゃべるワケにはいきません。それに、もうハクリョクに押されて口走ることもしません。アルルは、もうゼッタイに口を開かないぞ！　と心に誓いました。

「いわないと、オメさんから先にオラの鎌でスッパリだスよ」

「う……」

鎌でスッパリはとってもイヤ！　だけど、切り株のおじいさんのコトまでしゃべるワケにはいきません。せっかくの作戦が台無しです。

でも、しゃべらないと、いずれは鎌（かま）でスッパリ……!!

「さァさァさァ！　とっととしゃべってラクになるだスよ」

ずずいっ、とスケアクロウさんの顔がさらに近づきます。

「…………」

アルルは、生まれてはじめて、命の危険というものを感じました。イタズラをしておかあさんに大目玉（おおめだま）を食らったときとは、また違（ちが）うキョーフ感です。

「オメさん、ンなに鎌のエジキになりてぇだスか？」

「ううっ……」

ひざがガクガクして、もう泣いちゃいそう。もう立っているのがやっとです。たとえずっと前までの元気いっぱいアルルでも、こんな状況（じょうきょう）ではきっと同じ気持ちでしょう。

「最後に、もっぺんだけ聞くだス。木人たちはドコだスか？」

ギラリ！　と鎌を鋭（するど）く光らせながら、スケアクロウさんはいいます。

「…………」

木人のおにいさんたちのコトはしゃべるワケにいかないし、鎌でスッパリやられるのはイヤだし、このまんまじゃいずれそうなっちゃうし……。

そうならないですむ方法が、ただひとつ……!!

「は～～～～～い、時間切れだス。オメさんにゃウラミはねぇだスが、死んでもらうだスぁ!!」

ガバァッ！

とスケアクロウさんがおっきな鎌を振り上げた瞬間！

「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

アルルは思いっきり叫び声をあげて、イキナリ走りだしました。

「あっ！　待てコノぉ！」

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

スケアクロウさんの声を無視して、アルルはただひたすらに走る走る！　さっきの〝ふしぎなどうぶつ〟を追いかけているときと同じく、ドコをどう走ってるかなんて気にしてる余裕はありません。さっきとは、余裕の種類がゼンゼン違うケド。

「こら〜〜〜〜〜〜〜〜っ！　待つだス〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」

ちらっと後ろを振り向くと、スケアクロウさんが鎌をふりまわし、一本足で器用にケンケンしながらアルルを追いかけてきているのが見えます。モノスゴイ形相——のような雰囲気を身体じゅうから発していて、そしてふりまわした鎌が地面をかするたびに、すでにそれのエジキになってしまっている草花が、ばぁっと舞い上がります。

「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

そんなスケアクロウさんの姿を見たアルルは、さらにスピードを上げました。

といっても、アルルはまだちっちゃい女のコ。どれくらい長いあいだ走ったのかわからないけれど、そろそろ体力のゲンカイです。

でも、ここで足を止めたら……、

「待だねと、オラの必殺〝大ガマブーメラン〟でスッパリだス〜〜っ！　待ってもスッパリだスがぁっ！」

スケアクロウさんの、あの鋭い鎌のエジキになってしまいます。それだけはイヤなので、アルルは力をふりしぼって走り続けました。

「はぁ、はぁ、はぁ……っ！」

もう息は完全に荒らくなっていて、叫び声も出せません。

も、もうダメ……。走れないよ……。おかあさん、おばあちゃん、ゴメンなさい。ボクはおとうさんがいる――かもしれない――ところに行きます……。

となにもかもあきらめて、スピードを落としかけたところ……！

「アルルちゃん、ジャンプですぅ！」

どこからか、聞いたような声が耳に飛びこんできました。それにしたがって、アルルはとっさに思いきりジャ――ンプ!!

「えいっ！」

ぴょ――――ん！

それと同時に、
ずぼっ！
「ぉわぁっ！　あんだぁっ!?」
というスケアクロウさんの声。着地して後ろを見ると、スケアクロウさんは、おっきな穴にはまってもがいていました。
「いまですぅ！」
またさっきの声がしたかと思うと、
ぽこっ。
ぽこっ。
土の中からハイフラワーさんとマンドレイクさんが、まるでお花が芽を出すように、はい出てきました。ふたりとも、手にスコップを持っています。

「それ――――っ！」

ババババババババババババババババッ……！
ハイフラワーさんの掛け声とともに、ふたりはスコップを使って穴の中に土を入れ始めまし

た。ものすごいスピードで、どんどん穴が埋まっていきます。
「あにすっだオメら!? そりゃねーべさ！ やみろっての！」
スケアクロウさんが叫ぶのもかまわずに、ハイフラワーさんとマンドレイクさんは穴を埋め続けます。
ほどなくして、穴は完全に埋まってしまいました。
「これでよし、っと」
とハイフラワーさんは、埋めたところをスコップでポンポン。
「ア、アルルちゃん……」
スケアクロウさんの落っこちた穴が埋まっていくのをじっと見つめていたアルルに、マンドレイクさんがおずおずと話しかけます。
「早くここから離れて、切り株のおじいちゃんのところに行くの……。早くしないと、スケアクロウが出てきちゃうの……」
「う、うん……」
「じゃあ行くですぅ。木人のおにいさんたちも待ってるし」
「ちょ、ちょっと待って」
歩きだそうとするハイフラワーさんたちを、アルルは引き止めました。
「なぁに？」

「どうもありがとう」
ぺこり。
ハイフラワーさんとマンドレイクさんに向かって、アルルはおじぎ。もちろん、助けてもらったお礼です。ヒトになにかしてもらったら、ちゃんとお礼をしなければいけません。いつものように、おとうさんに教えてもらったコトです。
約束どおり、マンドレイクさんとハイフラワーさんは、切り株のおじいさんに〝つめたいサボテン〟を渡したあと、アルルを助けにきてくれたのです。おそらくは、魔法かなにかを使って、アルルが走る方向に落とし穴を掘って待ち構えていたのでしょう。
ここでお礼をいわないコは、悪いコです。
「お礼をいわなきゃいけないのは、こっちですぅ。オトリになってもらっちゃって」
ハイフラワーさんは、頭のお花をぱっと咲かせて、そしてニッコリ笑っていいました。マンドレイクさんも微笑んでいます。
アルルも、ニッコリと微笑み、
「じゃあ、おにいさんたちのトコに行こう」
と、いいました。なんだか、弱虫泣き虫アルルから、ほんのちょっぴり、いつもの元気なアルルに戻ったってカンジです。
やがて、アルルとハイフラワーさんとマンドレイクさんの三人は、切り株のおじいさんがい

るという森に到着。

「うわぁ〜〜〜っ……！」

森に入った途端、アルルは思わず歓声をあげました。それほどまでに、森の中はキレイ、いや、美しいところでした。アルルが最初に落ちた場所に広がっていた、あのお花ばたけよりも。けっこう森は深くて、上を向いてもお空はほんの少ししか見えません。だけど、木々のあいだから差しこむお陽サマの光が、線となって森のあちこちにふりそそいでいます。まるで、神サマが造った光のカーテンのようです。

「すぅぅっ……」

と息をすうと、アルルのちっちゃなお鼻に飛びこんでくるのは、みずみずしい緑のかおり。

もちろん、ここはまだスケアクロウさんに荒らされていません。

生き生きとした緑のにおいと光のカーテンの中をてくてくと――ちょっち急ぎ足で――進むと、やがて、ワリとおっきな切り株のそばにいる、木人のおにいさんとドライアードのおねえさんを発見。

「やあ、来ましたね」

「御苦労サマですわ」

アルルたちがかけていくと、おにいさんたちはニッコリ笑っていいました。

「スケアクロウを落とし穴に埋めちゃったですぅ」

「ア、アルルちゃんのおかげなの……」
ハイフラワーさんとマンドレイクさんが、口々に成果を報告します。すると……、
「ふむ……、これでひと安心じゃな」
突然、切り株がしゃべりました。
アルルは一瞬ドキッとしたけれど、落ち着いてよくよく見てみると、それが普通の切り株じゃないってコトはすぐにわかりました。
ちょうどお鼻みたいに伸びた枝のうえに、真っ白くてフサフサしたまゆげ、その下のもっとフサフサのおヒゲ。若草色のローブをまとい、そこからのぞく枯れ枝みたいな手に木でできたスプーンを握って、火にかけたグッグッのお鍋をゆっくりとかき回しています。
どうやら、このヒトが木人さんたちのいっていた、切り株のおじいさんのようです。木の皮のシワが、まさしくおじいさんってカンジ。
「こんにちわ」
「ホッホッ、なかなかに礼儀正しいコじゃな。アルルちゃん……といったかの？　こんにちわ。わしはこの森で薬草師をしておる、切り株の老人じゃ」
アルルがあいさつすると、おじいさんはニッコリ笑って——というか、そんなカンジにまゆげとおヒゲを動かしていいました。まるで、アルルのおばあちゃんのような、優しくてあったかい笑顔です。

「ほんに珍しいことじゃのう、ニンゲンがこの〝おとぎの国〟にやってくるとは……」

「………」

左手でおヒゲをなで、右手でお鍋をかきまぜながらいうおじいさんのセリフを、アルルはちょっとうつむいて聞いていました。なぜかというと、さっきの大騒ぎでちょっと忘れていた自分の立場を、また思いだしたからです。

ココは〝おとぎの国〟――のひとつである〝おはなの国〟。コワイこともあったけれど、木人のおにいさん、ドライアードのおねえさん、マンドレイクさん、ハイフラワーさん、切り株のおじいさん、みんなみんな優しくて、とってもイイところです。でもアルルは、どうやってココに来たのか、そしてどうやってお家に帰るのか、ゼンゼンわかっていません。いくらココが楽しいところでも、お家に帰れないのはちょっと……。おかあさんが心配するだろうし、おとうさんの――もしかしての――帰りを待つこともできないし……。

「ふむ……。その様子じゃと、おまえさん、難儀しとるようじゃの」

「え……？」

どうしてそれを、とばかりにアルルは顔を上げました。切り株のおじいさんは、じっとアルルのことを見つめ――フサフサのまゆげで視線は見えないケド、そうしているというのがわかります――ながら、いいます。

「おおかた、自分では知らぬ間にココに迷いこんでしまったのじゃろう。〝おとぎの国〟は、

普通のニンゲンには入れんからの」
「……………」
「ココでの暮しも、慣れればそう悪くないとは思うんじゃが……。アルルちゃん、お家に帰りたいかい？」
「う、うん……」
アルルは、正直にこっくりとうなずきました。確かに、おじいさんもおにいさんたちも、みんなみんなイイひとばかりだケド……。
「切り株のおじいちゃん、アルルちゃんをお家に帰してあげてなの……」
「アルルちゃんは、わたしたちを手伝ってくれたですぅ。今度は、わたしたちがアルルちゃんを助けてあげなきゃ」
マンドレイクさんとハイフラワーさんが、口々にいいました。
「そういわれてものぉ……、わしはタダの薬草師じゃ。いやしかし、〝てんしさま〟なら……」
「〝てんしさま〟……？」
「〝おとぎの国〟で、いっちばんエライひとですぅ」
アルルの問いに、ハイフラワーさんが答えます。
「ふむ、〝てんしさま〟にお頼みすれば、きっとなんとかしてくれるじゃろう」
「ところでご老人、例のクスリのほうは……？」

と、木人(もくじん)おにいさんの割りこみ。

「もうそろそろじゃ。そう、あわてなさるな」

「急(せ)いては事(こと)をし損(そん)じる、というワケですな？　しかし、急(いそ)がねば事(こと)が間(ま)に合わぬともいいますし……」

　おにいさんのムッカシイ言葉を聞きながら、切(き)り株(かぶ)のおじいさんは、お鍋(なべ)の中のスープのようなものをまたかきまぜます。そしてスプーンでちょっとすくい、クンクンとにおいをかぐと、

「ふむ、できたようじゃ」

　といいました。

「これをハイフラワーのじょうろに入れて、スケアクロウにかけるのじゃ。本当は、熱いお湯があればもっとよいのじゃが……」

「すると、どうなるんですの？」

　ドライアードのおねえさんが質問。

「クスリをかけた後にお湯をかければ、効(き)きめがより強く、より速く、さらに、より長く効くようになるのじゃ」

「…………」

　アルルは、心の中でどうしようか迷(まよ)いながら、みんなの会話を聞いていました。なんでかっていうと、アルルのおとうさんは魔導師(まどうし)で、おかあさんも、おばあちゃんもそうです。つまり、

自分でいうのもナンだけど、アルルは魔導師のサラブレッドでエリートなんです。だからもちろん、もう魔法も使えます。熱いお湯をかける〝ホット〟や、冷たい水をかける〝コールド〟だけで、モンスターを倒すとかっていうレベルではないケド。でもいまはそれでじゅうぶん。おじいさんが欲しいなって思ってるものを、アルルは持っているのですから。

そのことをみんなにいおうかどうしようか、アルルはちょっと迷っているのです。以前の元気アルルなら、きっと迷わなかったでしょうケド、まだ残っているひっこみ思案なココロが、アルルを迷わせているのです。

でも、みんなイイひとたちばかり。ちゃんと約束を守ってくれたし、アルルをお家に帰そうと、いろいろ考えてくれたり教えてくれたりもしました。アルルもオトリになったりしたケド、まだほかに役に立てるコトがあるのなら……。

「あの……」

アルルは、ほんのちょっぴりの勇気をふるって、いいました。

「ボク、ホットの呪文でお湯が出せるよ」

するとみんな、パッと明るい顔になってアルルのほうを見ます。

「おお、それは好都合じゃ。では早速、クスリをハイフラワーのじょうろに……」

と、おじいさんがいいかけた瞬間……！

「ソナトコにいただか、オメらぁ！」

アルルたちの前に、ドロだらけのスケアクロウさんが出現！　ようやく、落とし穴からはい出てきたのです。

「オラもう怒っただ！　オラの鎌でオメらみんな血祭りだスぁ!!」

ガバァッ！

スケアクロウさんは手にした鎌をおおきくふりかぶりました。

「わぁ――――っ!!」

あわててアルルたちは逃げ出します。方向はてんでバラバラで、木人のおにいさんなら「クモの子を散らすように」といったことでしょう。

もちろん、あまり突然にスケアクロウさんが出てきたので、おじいさんのクスリをハイフラワーさんのじょうろに入れるヒマなんてありませんでした。これでは、スケアクロウさんをやっつけることができません。なんとかしてクスリをかけないと……！

「もう逃がさねどオメらぁっ!!」

ものすごいケンマクで、スケアクロウさんはアルルたちを追いかけるべく、歩きだそうとしました。その途端、

ガッシャア――ンッ!!

「熱―――――――――――――――――っ!!」

なんたる偶然！　スケアクロウさんは火にかけっぱなしのお鍋につんのめり、そのままモロにお鍋の上に倒れこんでしまいました。

「熱ゃちゃちゃちゃちゃちゃちゃ……！　あんだスぅ!?」

スケアクロウさんは、地面の上に転がってジタバタジタバタ。コトコトとカレーのようにじっくり煮こんだお鍋の上に倒れこんだのですから、熱いのはあたりまえです。その下には枯れ枝をくべたたき火もあったし……。ちょっと、気の毒ではあります。

「ホッホッ、自分からクスリをかぶるとは、なんと律儀なお方じゃ」

ジタバタするスケアクロウさんを遠巻きに見ながら、切り株のおじいさんがいいました。確かに、おじいさんたちのほうとしては、ハイフラワーさんのじょうろにクスリを入れる手間がはぶけてしまったのです。

「好機逸すべからず、です！」

と、木人のおにいさん。

「アルルさん、いまです！　呪文を！」

「あ……。う、うん」

アルルはうなずき、まだジタバタしてるスケアクロウさんに心の中でゴメンなさいしながら、

「ホット！」

ひとさし指をスケアクロウさんに向けて、アルルがはじめておぼえた呪文を唱えました。もちろん、モンスターに使うのなんてはじめてです。

バシャァッ！

呪文とともに空から降ってきた熱っついお湯が、スケアクロウさんに命中！

「ぅ熱っつ――――――っ!! そりゃね――べさぁっ！」

スケアクロウさんはさらにジタバタ。呪文の練習をしていたとき、失敗して自分にかけたコトがあったので、ホットの熱さはアルルも痛いほどよく知っています。熱いだろうなぁ。でも、スケアクロウさんみたいなモンスターも、火傷ってするのかしら……？

なんて思いながらジタバタするスケアクロウさんを見ていると……、

ぷぅ～～～～～～ん……。

なんだか、甘酸っぱいにおいをアルルは感じました。ハチミツに漬けこんだグレープフルーツのような、お砂糖とミルクをかけたストロベリーのような、そんなかおりです。

「……？」

クンクン。



どこからにおってくるんだろう、と思って鼻をきかせてみると……、どうやら、スケアクロウさんからのようです。これが、おじいさんのクスリの効果なのでしょうか……？

「くっくるぅ‼」

突然（とつぜん）、まわりから聞こえるヘンな声。見ると……、

「わぁっ！」

その光景のあまりのものすごさに、アルルは思わず声をあげてしまいました。

なんと！　森の木という木に、たくさんの鳥さんがアルルたちを取り囲むように止まっているのです。クチバシが身体（からだ）とおんなじくらいおっきな、ヘンなカタチの鳥さんたちが、じぃっとスケアクロウさんを見つめています。ひぃ、ふぅ、みぃ、といちいち数えてたら、キリがありません。

「ホッホッ、おいでなすったようじゃな」

おヒゲをさすりさすりしながら、切り株（きかぶ）のおじいさんはいいました。どうやら、この鳥さんたちを集めるのが、あのクスリの効果のようです。

「それにしてもずいぶん集まったのぉ。アルルちゃんのおかげじゃな」

「かっこぅ！」

バササッ……！

鳥さんたちの1羽が、まるでガマンしきれなくなったように羽ばたきました。そしてスケアクロウさんに近づくと、

「こんこんこ――ん！」

「わっ！　あにすっだ！　やみろって！」

超(ちょう)おっきなクチバシで、スケアクロウさんをつんつんつん。

ザア――――ッ!!

それをキッカケに、残りの鳥さんたちが、まるで大雨のような羽根の音をたて、スケアクロウに向かっていっせいに飛びかかりました。

「くっくる――っ!!」

「わ――――っ!!」

スケアクロウさんが叫(さけ)ぶのもかまわず、鳥さんたちは手や足、着物、頭、帽子(ぼうし)、とそこらじゅうをおっきなクチバシでくわえ、そして……、

「くゎっこ――っ！」

バサバサバサッ……!!

またいっせいに羽ばたいて、飛びさっていきます。

木々のあいだを抜けていく鳥さんたちの姿(すがた)はあっというまに見えなくなり、

「たぁしけてけれぇ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ……！」

つかまってしまったスケアクロウさんの声と、鳥さんたちの羽ばたく音だけが、しばらく森の中に残りました……。

「ふむ……」

アルルたちは、しばらくぼぉっと鳥さんたちの飛んでいったほうを見つめていましたが、やがて、木人のおにいさんが口を開きました。

「これにて一件落着、というところですね」

「うまいこと、ビッグペッカーが集まってくれて助かったわい。正直いって、あんなに来るとは思わなかったがのぉ」

と、切り株のおじいさん。あのクチバシのおっきな鳥さんは、ビッグペッカーという名前のようです。

「アルルちゃんのおかげなの……。アルルちゃんがいなかったら、うまくいってなかったと思うの……」

「そうですぅ」

頭のお花を、これまででいちばんキレイに咲かせて、マンドレイクさんとハイフラワーさんがいいました。

それにつづいてドライアードさんも、

「今度はわたくしたちが、アルルさんになにかしてさしあげねばなりませんわ。なにか、お手伝いできるようなコトがあればいいのですケド……」
　といいます。
「………」
　アルルは、ちょっち顔を赤くしてうつむきました。みんなにホメられて、なんだか恥ずかしいような、くすぐったいような、そんな気分です。
「しかし、おにいさんたちはアルルさんのお家を知りませんし、〝てんしさま〟のところにご案内してさしあげたいが、ココを離れるわけには……」
「また〝だいまおう〟の手下が、この〝おはなの国〟にやってくるかもしれんしのぉ」
　木人のおにいさんと切り株のおじいさんがいいます。
　アルルにとっては、もうその気持ちだけでじゅうぶんだよ、ってカンジです。いままでの弱虫泣き虫でひっこみ思案のアルルだったら、そう思っただけで終わっていたでしょう。
　ところが……、
「大丈夫、ボクひとりで〝てんしさま〟のところにいくよ。みんなの気持ちだけで、ボクはオッケーだから」
　そう、アルルは口に出していいました。木人のおにいさん、ドライアードのおねえさん、マンドレイクさん、ハイフラワーさん、そして切り株のおじいさん……、みんなの優しくてあっ

たかい気持ちが、アルルに、元気をほんのちょっぴり取り戻させてくれたのです。
「おじいさん、だから教えて。〝てんしさま〟はドコにいるの?」
「そうかそうか……。アルルちゃんはほんにいいコじゃのぉ」
くしゃくしゃっ。
いいながら、おじいさんはアルルの頭をナデナデしました。おじいさんの手は本物の木の枝みたいに——っていうか本物なんだケド——ゴツゴツしているけれど、アルルのおばあちゃんの手のようにあったかくて、やわらかいカンジがします。
「〝てんしさま〟は、太陽のほうにずっと歩けば会えるはずじゃ。こっちのほうじゃな」
おじいさんは、森の奥のほうを指差しました。アルルが来た、メチャクチャになったお花ばたけのほうとは反対です。よく見ると、おじいさんが指差した方向に、ずっと長い道がのびています。
「じゃが、この道をどこまで行けば会えるのかは、残念ながらわしらにもわからん。ただ、〝てんしさま〟に会いたいと願う、強く、負けない心を持ってさえいれば、きっと会えるはずじゃ」
「…………」
強く、負けない心……。いまのアルルには、まだちょっと足りないものです。でも、なんとかして〝てんしさま〟に会わなければ、アルルはお家に帰れません。

「道中、また〝だいまおう〟の手の者に会うかもしれん。じゃが、決して負けちゃあいかんぞ。負けそうになったときは、わしたちといっしょにスケアクロウをやっつけたときのコトを思いだすのじゃ」

「わたくし、アルルさんが必ず〝てんしさま〟にお会いできるように、ここでお祈りしていますわ」

ドライアードのおねえさんがいいました。

「あたしもですぅ」

「わ、わたしもなの……」

「もちろん、おにいさんもですよ」

ハイフラワーさんも、マンドレイクさんも、木人さんもいいます。その、みんなの言葉で、アルルはまたちょっぴり勇気が出てきました。

「みんな、ありがとう。ボク、がんばるよ」

「そうだ、アルルちゃんや、コレを持っておいき」

といいながら、おじいさんが懐から取りだしたのは、それはそれはリッパなカタチをしたニンジン。カレーに入れたヤツいがいは、アルルはちょっとニガテな食べ物です。

「これは……?」

「これは〝負けないニンジン〟といってな、なに、アルルちゃんがなにものにも負けないよう

にというおまじないじゃ。あとで役に立つこともあるじゃろう」

「いま食べなきゃイケナイの……？」

「その必要はないが、カレーにでも入れたらウマイじゃろうな」

「ふ～ん……」

とりあえず、アルルは〝負けないニンジン〟を受け取りました。握ると、なんだか身体の中から元気がわいてくるようなカンジがします。これなら、なんとかなるかも……！　そんな気がしてきました。

「ありがとう、おじいちゃん。……じゃあ、いってきます」

「よかったら、またいらしてくださいね」

「楽しみにして待ってるの……」

「そのときまでに、〝おはなの国〟をもとどおりにしておくですぅ」

「今度は、おにいさんたちといっしょに遊びましょう」

「うん！」

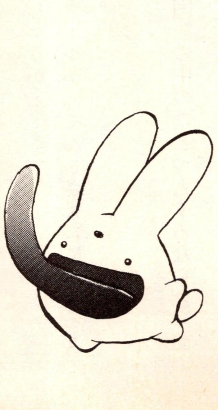
〝おはなの国〟のみんなに見送られて、アルルは歩き始めました。

アルルにとって、生まれてはじめての、長い旅の始まりです。どのくらい長くかかるかわからないし、どんなコトが起きるかわからなくて、ちょっち——いや、かなり心配だけど、みんなの優しい心と〝負けないニンジン〟があれば、なんとかなりそうな気がします。

おかあさん、おばあちゃん、ボクはいまからお家に帰ります……。そのときまでに、おとうさんも帰ってきてるとウレシイな……。

# まほうの国

てってっく、てってってっく……。
〃おはなの国〃のヒトたちと別れてから、アルルはまっすぐに伸(の)びた道をひたすら歩きつづけました。まっすぐ、といっても右に左にカーブしたりはしてるケド。
切(き)り株(かぶ)のおじいさんによれば、この道をずぅっといけば、〃おとぎの国〃でいちばんエライ〃てんしさま〃のいるところに着けるはずです。そして、〃てんしさま〃に会ったら、「お家(うち)に帰してください」ってお願いする、と……。
てってっく、てってってっく……。
アルルが歩く姿を、お陽(ひ)サマがじっと見降(みお)ろしています。なんだか、お陽サマまでがアルルに「がんばれ！」っていってくれてるみたいで、ひとりの旅もさみしくありません。それどころか、歩く足もスキップしてるみたいに軽いってカンジです。
木人(もくじん)のおにいさんたちの応援(おうえん)のコトバもあるし、切り株のおじいさんに〃負けないニンジン〃っていうおまじないアイテムももらったし。ブジにお家に帰れたら、カレーに入ってない



ニンジンも食べられるようにがんばろうっと……。と、〝負けないニンジン〟を握りしめながら、アルルは思いました。

てっくてっく、てっくてっく……。

もうとっくに、〝おはなの国〟の森は抜けてしまっています。いまアルルの眼の前に広がっているのは、頭の上でアルルを見降ろしているお陽サマと、それに向かって伸びている道。アルルのお家のほうを通っている街道と違って、ちょっとデコボコしています。それをはさむように並んでいるのは、ちょっち深めの林の木々たち。まるで計算して植えたようにきっちりと立っていて、ちょっとした並木路ってカンジです。

てっくてっく、てっくてっく……。

そんな並木林の道を、アルルはお陽サマの方角目指して歩き続けます。〝てんしさま〟に会えるコトを信じて、ただひたすらに、ひたすらに……。

てっくてっく、てっくてっく……。

〝おはなの国〟を出発してから、もうどれくらい歩いたでしょうか……？

お陽サマは、まだまだ傾く様子を見せません。まるで、アルルが〝てんしさま〟に会えるまで、ずっと道しるべになってくれているようなカンジです。

てっくてっく、てっくてっく……。

それはイイんだケド……。〝おはなの国〟が〝おとぎの国〟の中のひとつとするならば、お

そらく、ほかにもいろんな国があるはずです。もうどれだけ進んだかわからないくらい歩いたのに、ほかの国かなにかが見えてくる気配すら感じません。ずぅっと並木林がつづいているだけです。だんだん、まるで同じところをグルグルまわっているような気になってきます。

てっくてっく、てっくてっく……。

てく、てく……、てく、てく……。

急に、アルルの歩くリズムが遅くなりました。

このまま、〝てんしさま〟に会えなかったら、どうしよう……。

そんな考えが、アルルの頭の中にふつふつとわきあがってきたからです。

ずぅっと、この道を歩くだけだったら、どうしよう……。1日たっても、1週間たっても、1年たっても……。ボクがおっきくなって、おねえさんになって、オトナになって、おばあちゃんになっても……。死ぬまでこのままだったら、どうしよう……。

まるで、雪玉が雪の斜面を転がり落ちるように、ダウンな考えがアルルの頭の中でどんどんどんどんふくらんでいきます。

てく、てく……、てく、てく……。

お家に帰れなかったら、どうしよう……。おかあさんやおばあちゃんのところに帰れなかったら、どうしよう……。〝おとぎの国〟の、ほかのヒトにも会えなかったら、どうしよう……。

切り株（きかぶ）のおじいさんたちのところに、戻（もど）ろうかなぁ……。

そのおじいさんから、〝おはなの国〟を出るときに「負けるな」っていわれたばかりなのに、もうくじけそうです。

てく、てく……、てく、てく、てく……。

早くお家（うち）に帰りたいよ……。早く〝てんしさま〟に会ってお家に帰してもらいたいよ……。

なんて、ブルーな気持ちで歩いていると……、

ポロッ。

「あ……」

切り株（きかぶ）のおじいさんにもらった〝負けないニンジン〟が、アルルの手からすべり落ちてしまいました。頭の中でぐるんぐるんしてる考えに夢中（むちゅう）になるあまり、〝負けないニンジン〟を握（にぎ）る手を思わずゆるめてしまったのです。

コロコロコロ……。

アルルの手から飛びだしたニンジンは、そのまま前のほうに転（ころ）がっていきます。

「ま、待って……！」

あわててアルルはニンジンを追いかけました。

コロコロコロコロコロコロコロコロコロ……。

まるで坂をくだっているみたいに、ニンジンは転がりつづけます。けっこう速くて、なかな

かアルルは追いつけず、ちっとも止まる様子を見せません。
それを、アルルは夢中で追いかけます。〝おはなの国〟で〝ふしぎなどうぶつ〟を追いかけた、あのときのように。
なにしろ〝負けないニンジン〟は、切り株のおじいさんにせっかくもらった、大事な大事なおまじないです。コレを持っていたからこそ、ココまで歩きつづけられたというもの。いまここでそれをなくしてしまってはタイヘンです。アルルの心はカンゼンにくじけてしまい、その場にすわりこんでシクシクと泣きつづけるだけになってしまうでしょう。
コロコロコロコロコロコロコロコロコロコロコロコロ……ピタッ。
ようやく、ニンジンは止まりました。アルルはかがみこんで、〝負けないニンジン〟をひろいあげます。
「…………」
アルルは、ようやくつかまえたリッパなニンジンを、じっと見つめました。なんだか、ニンジンが心を持っているような気がしたからです。
もしかして、この〝負けないニンジン〟は、スグくじけそうになってしまうアルルを、キライになってしまったのでしょうか……？　だから、コロコロと逃げ出してしまったのでしょうか……？　それとも、「ひとりじゃないよ、ボクがいるよ。だから負けないで」って応援してくれているのでしょうか……？

ぎゅっ……。

〝負けないニンジン〟を、アルルは両手でお祈（いの）りするように握りました。すると、なんだかとてもあったかいカンジが、ニンジンから手をつたって、アルルの中に入りこんでくるような気がしてきます。まるで、アルルの中に眠（ねむ）っている、元気で強い〝負けない心〟を呼びさますかのように……。

少なくとも〝負けないニンジン〟は、アルルをキライになったワケではないようです。

「………」

てくてく……、てくてく……。

アルルはしっかり前を向いて、ふたたび歩き始めました。もう、迷（まよ）ったり、くじけそうになったりなんかしません。ココで負けちゃったら、〝てんしさま〟にも会えないだろうし、お家（うち）にも帰れませんからね。

ふと、アルルはおとうさんから魔法（まほう）を教えてもらったときのコトバを思いだしました。

「魔導師（まどうし）に最（もっと）も必要なものは、強靭（きょうじん）な意志力（いしりょく）だ」

ちょっちムツカシくて、そのコトバのホントの意味はまだわかりません。だけど、切（き）り株（かぶ）のおじいさんとおんなじコトをいっているような気がします。

もう、ボクは負けない——！

だから、早くお家に帰って、おかあさんを安心させてあげなきゃ……！

てくてく……、てくてく……。

さっきよりもシッカリした足取りで、アルルは道を歩きつづけました。並木林の光景はゼンゼン変わらないけれど、もう、気になりません。

てくてく、てくてく……。

と〝負けないニンジン〟をぎゅっと握りしめてしばらく歩いていると、やがて……、

「……?」

前のほうに、おっきな壁のようなものが見えてきました。まるで、アルルに通せんぼするかのように、道いっぱい――どころか、左右の林の中まで広がっています。

てくてく、てくてく……。

アルルは、まっすぐ歩きつづけました。でないと、〝てんしさま〟のところに行けませんからね。眼の前のおっきなモノがなんなのかわかんないので、ちょっちコワイけれど……。

てくてく、てくてく……。

だんだん、眼の前のモノがなんなのか、ハッキリしてきました。

それは、おっきなおっきな門でした。お城の入口とかにあるようなヤツです。いや、それよりもっともっと背が高くて、ガンジョーなカンジ。どんなにチカラの強いヒトやモンスターでも、開けられそうにありません。

その門の左右には、林の奥の奥までずっとつづいている壁。これもまたガンジョーそうです。

しかも――門もそうだけど――あんまり背が高いので、林のうえから壁がはみだしています。その高さは、アルルのお家よりもずっとずっと上です。

どこかのお国か、お城の入口なのでしょうか……？

今度は、どんなヒトたちがいるのかな……？　木人のおにいさんとかドライアードのおねえさんとかみたいに、やさしいヒトたちだといいな……。

なぁんて考えながら進むと、やがて、門の前に立っているヒトが見えてきました。アルルよりもずっとずっとオトナのおにいさんです。木人のおにいさんみたいなカッコイイ顔に、銀色に光る装甲魔導スーツ。……というコトは、このおにいさんは魔導師のようです。

装甲魔導スーツは、リッパな魔導師のあかし。騎士さんとかが着ているヨロイとおんなじくらい強くて、ヨロイよりも軽い、とってもグッドなアイテムです。

もちろん、おとうさんも着ていたし、おかあさんもおとうさんとケッコンする前は持っていました。魔導幼稚園に入ったら、子供用の装甲魔導スーツがもらえるらしいので、アルルはちょっと楽しみだったりします。早くおとうさんみたいにリッパな魔導師になって、おとうさんみたいにリッパな装甲魔導スーツが着られるようになりたいな……。

「待たれよ」

アルルが眼の前に来ると、ウィザードのおにいさんは右手を前に出して、「止まれ」のジェスチャーをしました。

「こんにちわ」
　とアルルはあいさつ。
「ここから先に行きたいのなら、まわり道をしたまえ」
　だけどウィザードのおにいさんは、アルルのあいさつを無視していいました。ちょっと、カンジのよくないヒトです。
「どうして？」
　アルルはたずねました。
「この〝まほうの国〟を治めるカミュさまの許可なく、ここを通過することはまかりならん」
　ようするに、ココは〝まほうの国〟で、カミュっていうエライひとがいて、そのヒトが「いいよ」っていってくれないと通れないってコトです。
「でも、ボク……」
　といいかけて、アルルはハッと気づきました。
　このウィザードのおにいさん――カミュっていうヒトも、もしかしたら、〝だいまおう〟の手下かもしれない……！　そこへ「ボク、〝てんしさま〟のトコロに行かなきゃダメなの」なぁんていったら、スケアクロウさんみたいにイキナリ襲いかかってくるかも……。
「でも、がどうしたのだ？」
　ウィザードさんがいいます。

「ボク、どうしても先に行かなきゃイケナイの」
なんとか〞てんしさま〞というコトバを出さずに、アルルはいいました。
「ならば、先ほども申したとおり、まわり道をするがよかろう」
「どうやって？」
「カンタンだ」
いいながら、ウィザードさんは林の中にずぅっとつづいている壁を指差します。
「この壁にそって、ずっと歩いていけばいい。いずれこの国の反対側に出られるだろう」
「いずれ、って……どれくらい？」
「この〞まほうの国〞は大きいからな……、2年か3年も歩けばなんとかなるだろう」
「ええっ!?」
アルルは驚きました。
2年か3年なんて、お家に帰るのに、そんなに長い時間をかけるワケにはいきません。それだけ、おかあさんは――そしてアルルもひとりぼっちでいなければいけなくなってしまうし、だいたい、この春から魔導幼稚園だというのに……。
〞おはなの国〞を出発して、なんとかなるかなと思って歩いていたら、またとんでもないモンダイにぶつかってしまいました。
「そんなの……イヤぁ……」

　またしても、アルルの心はくじけそう。どんどん涙があふれてきて、いまにも眼からこぼれそうになってきます。
　お家に帰りたいよ……。おかあさん、おばあちゃん——ホントはおとうさんにも——に会いたいよ……。魔導幼稚園に行きたいよ……。
「どうしてもココを通りたければ、〝精霊球〟を探してくるがよい」
　アルルを気の毒に思ったのか、ウィザードのおにいさんは助け舟をだすようにいいました。コトバづかいがあんまりやさしいカンジではないけれど。
「せいれいきゅう……？」
　眼が涙でいっぱいのアルルを、ウィザードさんはじっと見降ろしながらいいます。
「カミュさまはそれをご所望だ。見事〝精霊球〟を持ってくることができれば、この国を通過する許可を与えられるだろう」
「それ、ドコにあるの……？」
「知っていたら、わたし自身が探しに行っている」
　つまり、ウィザードさんも知らないというコト。
「〝精霊球〟を探してくるか、まわり道をするか、引き返すか、みっつにひとつだ」
　しっしっ、というカンジで、魔導師のおにいさんはいいました。
「用がなくば、早々に立ち去られよ」

「うん……」

アルルはスナオにまわれ右をして、もと来た道をトボトボと引き返しはじめました。ホントは、あともどりなんてしたくないんだケド……。

といっても、お家に帰るのをすっかりあきらめてしまったというワケではありません。ちょっちナイスなアイデアを思いついたからです。それは、

〝おはなの国〟に戻って、切り株のおじいさんに聞く——。

です。

切り株のおじいさんなら、〝精霊球〟とかいうモノのありかも知ってるかもしれません。そうでなければ、〝まほうの国〟をぐるっとまわるより早いまわり道の方法とか……。なんてったって切り株のおじいさんは、〝てんしさま〟のコトとか、いろんなコトを知ってるみたいですからね。

まぁ、あともどりするぶんだけ時間はかかるケド、くじけちゃって泣いてるよりはよっぽどマシです。もちろん、アルルがそうならなかったのは、おじいさんにもらった〝負けないニンジン〟のおかげです。

てくてく、てくてく……。

今度は〝まほうの国〟を背にして、アルルは歩きました。

するとやがて……、

「……あれ？」

道のわきに建っている、屋台ふうのちっちゃなお店やさんを発見。

「……？」

アルルは首をかしげました。

確か、最初に通ったときにはなかったはず……。いつのまにできたのでしょうか……？

そのお店のカンバンに書いてあるのは、おウマさんの「う」、ラクダさんの「ら」、ナスビの「な」、仔イヌの「い」。

うらない……？

お店なのに「売らない」……？　じゃなくて、どうやら占いのお店のようです。

そして、そのお店の中でお客さんを待っているのは、キレイ——というよりはカワイイ感じのおねえさん。

金色の長くてキラキラした髪のうえに青いサンカク帽子をかぶり、それとおんなじ色のローブを着ています。それから、壁にたてかけたホウキ。

さっきのウィザードさんとは、またちがったタイプの魔導師——魔女さんです。

「おいっす」

ウィッチさんはアルルの姿に気がつくと、右手をシュタッとあげてあいさつしてきました。

「こんにちわ」

とアルルが返事をすると、ウィッチさんはひとさし指をチッチッチッ。

「ん～、イイお返事だけど、ちょっと違うネ。やっぱりあたしのマネしてくんなきゃ。……というワケで……、おいっす！」

「お、おいっす……」

アルルは、ちょっちモジモジしながらあいさつしました。

「ダメダメ、元気が足りないヨ。もういちど、おいっす!!」

「お……おい～～～っす!!」

「は～い、よくできました」

アルルがチカラいっぱい「おいっす」すると、ウィッチのおねえさんはニッコリ。

「キミ、お名前は？」

「アルル……、アルル・ナジャ」

「さっするトコロ、アルルちゃん、キミはいまとっても困っているネ？」

「え……？」

どうして知ってるの？　ってカンジで、アルルはおねえさんを見つめました。

「あたしは占い師。なんでもお見通しなんだもんネ」

ウィッチさんはエッヘンと胸をはります。

「まぁ、それはともかく……。おおかた、〝まほうの国〟の門番に〝精霊球〟を持って来いとかっていわれたんじゃないイ？　あそこのウィザードはおカタイからねぇ……」

「おねえさん、〝精霊球〟のコト知ってるの？」

「まあネ。教えて欲しい……？」

　コクコクコク……。

　ウィッチさんの問いに、アルルはいっしょうけんめいうなずきます。

「どうして？」

「え……？」

　イキナリたずねられて、アルルはドキッとしました。

「…………」

〝てんしさま〟のコトを話しても大丈夫かな……？　実は、ウィッチさんのほうが〝だいまおう〟の手下で、イキナリおそいかかってきたりして……。

　とアルルが迷っていると……、

「じゃあ、教えてあーげなイ」

　ぷいっ。

　ウィッチのおねえさんはそっぽを向いてしまいました。

「ええっ……!?」

それは超イヤです。〝精霊球〟のありかを教えてもらって、それから〝まほうの国〟を越えないと、〝てんしさま〟にあえませんし、ひいてはお家に帰れません。

「じゃあ、教えてヨ」

「ボク……、〝てんしさま〟のトコロに行かなきゃイケナイの」

アルルは、勇気を出してホントのコトをいいました。

「どうして〝てんしさま〟のところに？」

「ボク、知らないうちに〝おとぎの国〟に来ちゃって、そんで、お家に帰りたくて……」

「お家に帰らなくたってイイじゃない。ココはとっても楽しいヨ。みんなやさしいヒトたちばかりだしネ。……まぁ、いまは〝だいまおう〟とかいう悪いヤツがウロウロしてるケド」

どうやら、ウィッチさんは〝だいまおう〟の手下ではないようです。アルルはちょっとホッとしました。でも、お家に帰らなくてイイっていうのはちょっと……。

「でも……」

アルルはいいます。

「でも……？」

「ボクんち、いまおとうさんがいなくて……。そんで、ボクまでいなくなっちゃうと、おかあさんがひとりぼっちになっちゃうし……」

「なるホドなるホド」

「それに、ボク、おとうさんが帰ってくるまで待ってたいし……」

「そっか……」

ウィッチさんは、しんみりとうなずきました。そして、ニッコリと笑って顔をあげ、

「わかった。そういうコトなら教えてあげてもいいヨ」

といいました。

「ホント!?」

「うん。……まぁもとからわかってたケド、キミは悪いコじゃないみたいだしネ」

「ありがとう」

アルルがお礼をいうと、おねえさんはアルルの後ろを指差しました。

「キミの後ろにある林、ずっと奥に行くと精霊の森っていうのがあって、そこの真ん中に〝精霊球〟があるヨ。……ただ、ひとつだけ気をつけて」

「え……?」

「〝精霊球〟を守ってるスプリガンは、約束に超キビシイからネ。約束を守らない悪いコは、イッパツで食べられちゃうヨ」

「ええっ……!?」

「そんなに怖がらなくてもダイジョブだよ。約束さえキチンと守ればいいんだから。……それから、これを持ってくといいヨ」

そういいながらおねえさんが取りだしたのは、アルルにはちょっち大きめのリュックサック。よく見ると、背中のトコロにあの〝ふしぎなどうぶつ〟の絵が描いてあります。

それを受け取ると、アルルはさっそく〝負けないニンジン〟を入れて、背負いました。

「ありがとう、おねえさん」

「うんうん、気をつけてネ」

アルルがおじぎをすると、ウィッチさんはニコニコと手をふります。

「スプリガンと約束したら、ゼッタイに守らなきゃダメだよ〜っ」

というコトバを背に受けて、アルルは林の中へと入っていきました。

奥へ奥へと進んでいくと、なるほど、ウィッチさんのいったとおり、森になっているようです。その証拠に、木々がだんだんだんだんだんと深くなっていきます。

やがて、切り株のおじいさんに出会った〝おはなの国〟の森よりも深くなりました。もう、お空のかけらも見えません。そのおかげで、まるで夕方か夜のように暗くなっています。ホントに陽が暮れてたりして……、ってちょっち心配になってくるくらいです。

だけど、不思議とコワイ感じはしません。それどころか、木人のおにいさんやドライアードのおねえさんたちといっしょにいるときのような、ほんわかしたあったかさを感じます。名前のとおり、森にたくさんの精霊さんがいるからでしょうか……?

キラッ……！

「……！」

トッゼン、前のほうでなにかが光りました。

その光めざして、アルルはガサガサと進みます。すると、光はだんだん強くなってきて、やがて……、

「わぁ……」

アルルはちょっとした広場に出ました。まるで、精霊さんたちが集まってお祭りをするような場所ってカンジです。ココでマンドレイクさんとかハイフラワーさんとかが踊っている姿を想像すると、なんだか、アルルまでウキウキしてくるような気がします。

上を向くと、ぽっかりと穴があいたように広場のあたりだけ木がなくて、お陽サマがサンサンと輝くお空が見えます。まだお陽サマはしずんでないので、アルルはちょっと安心。

そんな森の広場の真ん中には、お陽サマに負けないくらい輝いているものがあります。よく見ると、それは石の台に置かれたキレイな玉。アルルのゲンコツよりもひとまわりかふたまわりは大きいようです。

これが、ウィッチさんやウィザードさんのいっていた〝精霊球〟でしょうか……？

アルルは、その玉の乗った台に近づきました。

近くで見ると、ますます〝精霊球〟だってカンジがします。なんでかっていうと、その玉の光が、〝おはなの国〟のヒトたちといっしょにいたときに感じたものや、ココまで来る途中に森から感じたあったかさと、おんなじモノを感じるからです。

「………」

キョロキョロ。

アルルはまわりを見回しました。だけど、誰も出てきたり、こっちを見ている様子はありません。

コレ、持っていっていいのかな……？

そうアルルはちょっと思ったけれど、さすがにそうするワケにはいきません。ヒトのモノを勝手に持っていったら、それはタダのドロボウです。それに、これがホントに〝精霊球〟かどうかを確かめないと、タイヘンなことになってしまいます。

ウィッチおねえさんのハナシでは、この精霊の森にはスプリガンっていうヒトがいるはずなんだケド……。

「………」

と、アルルが玉の前でキョロキョロしていると……、

もわっ……！

アルルの前——玉の向こうで、なにかケムリのようなモノがイキナリわきだしました。そし

てそのまま、ケムリのようなモノはしゅるしゅるとウズをまいて……、

「んがぁお！」

筋肉ムキムキのモンスターに！

「ぅわぁっ！」

そのあまりのハクリョクに、アルルは思わず後ずさりました。

ジロッ。

そんなアルルを、モンスターは見降ろします。眼がまんまるでクリクリしてるので、ちょっちカワイイかも……。

でも、カラダ全体を見ちゃうと、正直いってカワイイっていうのはちょっと……ってカンジ。

青くテカテカした身体に、ムキムキの筋肉、とんがった耳に、サメの背ビレのようなおデコの角、それから、キチンと磨かれた真っ白な歯。ちなみに両腕のチカラこぶには、ドラゴンのマークが描かれています。

これだけそろっているのに、このモンスターには腰から下がありません。そこから先がケムリのようなモノでゆらゆらしていて、まるでユーレイのようにふわふわと浮かんでいます。

「んおまええ、精霊の森のモノではないなぁ？」

奇妙な響きを持った声で、モンスターはいいました。誰もいない聖堂の中で、おっきな声を

だしたってカンジです。
「こ……、こんにちわ……」
モンスターのハクリョクに負けそうになりながらも、アルルはあいさつをわすれません。
「こぉのスプリガンさまの守護する〝精霊球〟にぃ、んいったいなんの用だぁ？」
「え、えと……あの……」
ドギマギしながらも、アルルは正直にゼンブ話しました。知らないあいだにこの〝おとぎの国〟に来ちゃったコト、〝てんしさま〟に会ってお家に帰してもらおうと旅を始めたコト、だけど、〝まほうの国〟のウィザードさんが先に行かせてくれないコト、〝精霊球〟を探してこいといわれたコト……などなど。
「ふ～むぅ……」
アルルのハナシを聞き終わったスプリガンさんは、丸太のようなふっとい腕を組んで考えこみます。しばらくすると、パッと顔をあげ、
「んよぉしわかったぁ、ひとつ約束をしようぅ」
といいました。
来た――。
アルルは思いました。ウィッチおねえさんのハナシでは、約束を守らないとスプリガンさんに食べられてしまうとのコト。いったい、どんな約束をいわれるのでしょうか……？　カンタ

ンに守れるものだといいんだケド……。

「この〝精霊球〟をぉ、しばらくお前に貸してやろうぅ。これは大事な森の守り神だからなぁ、くれてやるコトはできんのだぁ」

石台のうえの〝精霊球〟を手に取って、スプリガンさんはいいます。

「ただしぃ、貸すだけだぞぉ。必ず返しにこぉいぃ。いいなぁ？」

「………」

アルルは、ちょっと迷いました。借りた〝精霊球〟をちゃんと返せるかどうか、自信がなかったからです。なにしろ、カミュっていう〝まほうの国〟のエライひとのトコロに持っていかなきゃイケナイわけだし……。

「返事はぁ!?」

「あ……、う、うん……」

ずいっ！　と迫るスプリガンさんのハクリョクにおされて、アルルは思わず返事してしまいました。

「んよぉし、約束だぁ。〝精霊球〟を受け取れぇ」

いいながら、ぽいっとスプリガンさんは〝精霊球〟を放り投げます。アルルはあわててそれをキャッチ。

「ん約束したからなぁ。ちゃぁんと返しにこないとぉ、んお前を食べてしまうぞぉ！」

「ちょ、ちょっと待って……！」

ドロン！

アルルが止めるのも聞かずに、スプリガンさんはケムリとなって消えてしまいました。

ぽつん……。

とアルルは、また森の広場にひとり。

「………」

じっ、と手にした〝精霊球〟をアルルは見つめました。こうなってしまった以上、なんとしてもカミュさんていうヒトにいって、〝精霊球〟を渡したらスグに返してもらわなければなりません。でないと、アルルはスプリガンさんに食べられてしまいます。

大丈夫かなぁ……。カミュさんていうヒト、スナオに返してくれるかなぁ……。それでスプリガンさんに食べられちゃうのなんてイヤだよ……。

なぁんて考えながら、アルルは〝精霊球〟をリュックの中に入れ、もと来た道を引き返しました。

ほどなくして、ふたたび〝まほうの国〟の入口に到着。途中、ウィッチさんのお店がいつのまにかなくなっていたのに気がついたけれど、いまのアルルにはそれを気にしてる余裕なんてありません。おそらく、もう店じまいしてしまったのでしょう。

カミュさんに会ったら、なんていって〝精霊球〟をスグ返してもらおう……。

アルルの頭の中は、いまそのコトでいっぱいです。なんだか、イタズラして大事な花ビンかなんかを割っちゃって、おかあさんにどうやってイイワケしようかを考えてるのと、おんなじカンジ。

「また参られたのか」

おっきなおっきな門の前に来ると、門番のウィザードさんがいいました。

「〝精霊球〟を手に入れて来たのかね？」

「うん。ほら、コレ……」

アルルはお陽サマのように光る〝精霊球〟をリュックから取り出し、ウィザードのおにいさんに見せます。

「ふ〜む……。確かにこれは、あの伝説の〝精霊球〟……。よかろう、待つがよい」

そうおにいさんはいうと、アルルに背を向けました。そしておっきな門に右手をあてて、意識をシューチューさせます。

「ブツブツブツ……」

おにいさんが小声で呪文を唱えると、

シュォォォォォォォォォッ……！

手を中心に光の線が門を走り、やがてそれは魔法陣になりました。

さすがは〝まほうの国〞。門をあけるカギが、魔法になっているようです。

「これでカミュさまへの道はひらかれた。行くがよい」

ウィザードさんは、ふたたびアルルのほうを向いていいました。

「え……？　で、でも……」

門に描かれた、アルルの身長とおんなじくらいの大きさの魔法陣が、七色の光をおびてキラキラしています。だけど、かんじんの門がひらいていません。

「案ずることはない」

ウィザードのおにいさんはいいます。

「ここは〝まほうの国〞。ここではすべての事柄が魔法で解決される。魔法陣に触れよ。さすれば、カミュさまのところに行けよう」

へぇ～、スッゴイなぁ～、とアルルは心の中でカンドーしました。ますます、さっすが〝まほうの国〞ってカンジです。

「さあ、行かれるがよい」

「さあどうぞ」ってカンジで、おにいさんは魔法陣をさします。

「………」

アルルは、ちょっちおっかなびっくりに魔法陣のほうに手をのばしました。そして、指先が魔法陣に触れた瞬間……！

ビシュン……ッ!!

モノスゴイ力で思いっきり放り投げられたようなカンカクが、アルルに襲いかかりました。

そのスグあとに、

ビシュン……ッ!!

と、またおんなじカンカクがやってきて、さっきとはゼンゼン別の光景がアルルの前に広がります。

「………」

そこは、お城の中でした。「えっけんのま」というヤツです。ちょっと前、アルルはおとうさんにどこかのお城——名前はなんだかムツカシかったので、忘れてしまいました——に連れていってもらったコトがあるので、よく知っています。

左右の壁にたてかけられた、とってもリッパなヨロイや剣、盾、豪華な刺しゅうの旗、金色のロウソク台。〝まほうの国〟らしく、魔法のまきものや十字架、ツボやビンなんかも飾られています。もちろん、どれもこれも買ったら高そうなモノばかりです。

そして、アルルのいるトコロからまっすぐのびている、真っ赤なじゅうたん。お城に来たヒ

トは、みんなこのじゅうたんを通って王様に「えっけん」するのです。アルルが前に行ったお城では、やさしいおじいさんの王様に、アメ玉をもらったコトがあります。

このお城も、おんなじようなカタチです。真っ赤なじゅうたんの向こうは、階段のように段々になっていて、そのイチバン上には、金銀宝石をちりばめた、とてもリッパなイス——「ぎょくざ」っていう名前だったと思う——があります。ちょっと違うのは、そのイスのまわりに騎士さんみたいなヒトたちがいないコト。

「ようこそ、〝まほうの国〟へ」

イスに座っている人影が、アルルに向かっていいました。

よくよく見ると、アルルとあんまり変わらない年頃の男のコです。アルルよりは1歳か2歳は上かなってカンジ。

「ボクは、この〝まほうの国〟を治めるカミュ。キミの名前は?」

「アルル」

「アルルくん、そんなに遠くては話しにくいよ。もっとこっちにおいで」

「う、うん……」

いわれるまま、アルルはカミュさんの玉座に近づきました。

カミュさんは、そんなアルルをキリリとした眼でじっと見ています。短めの黒髪に、青い子供用の装甲魔導スーツとマント。アルルよりちょっと上くらいの年なのに、もうリッパな魔導

師の格好と雰囲気をもっています。ちょっと、うらやましくて、あこがれちゃいます。
「さあ、アルルくん」
玉座の段々の下までアルルが来ると、それを見降ろすカミュさんがいいました。
「〝精霊球〟をボクに見せてくれ」
「うん……」
アルルは、リュックから〝精霊球〟を取り出して、カミュさんに見せます。あんまり気がすすまないケド……。まだ、どうやってスグ返してもらうのか、いいアイデアがないし……。
「おお！　確かにそれは〝精霊球〟……！」
アルルの気持ちをよそに、カミュさんはいいます。
「これさえあれば、もっと強い魔力が得られるんだ……！　アルルくん、ご苦労サマ。それをボクに渡して、キミの役目はおわりだ。門番のウィザードにいって、反対側に出られるようにしておくよ」
「で、でも……」
「でも……なにかな？」
「コレ、スグに返さなきゃイケナイの……。精霊の森のスプリガンさんと約束したから……」
結局、アルルは正直にゼンブ話すコトにしました。ヘタにウソをつくとロクなコトにならないし、ロクなオトナにならないっておとうさんとおかあさんもいってたし……。

「なるほど、〝精霊球〟はスプリガンが持っていたのか」
「うん」
「もし、キミがその約束をやぶったら、どうなるんだ？」
「ぼ、ボク……、スプリガンさんに食べられちゃう……」
「ふ〜む……」
カミュさんは腕を組んで考えこみました。なんだか、アルルよりずいぶんオトナのヒトのように見えます。
「よし、わかった！」
しばらく考えたのち、カミュさんはパッと顔をあげていいます。
「スプリガンとの約束の件は、ボクがなんとかしよう」
「ホント!?」
「うん。実は、ボクが〝精霊球〟を探してたのは、ボクの持ってる〝魔導球〟と合体させたかったからなのだ」
「まどうきゅう……？」
「コレさ」
といってカミュさんが取り出したのは、まるで夜のように深い深い紺色に輝く玉。なるほど、お陽サマのような〝精霊球〟とは反対の色で、大きさはおんなじくらいです。

「この〝魔導球〟と、いまキミの持ってる〝精霊球〟を合体させた者は、とてつもない魔導力が得られるという伝説があるのだ」

カミュさんはいいます。

「キミが〝精霊球〟を渡してくれれば、ボクはいまよりもっともっと強力な魔導師になれる。その力を使って、スプリガンをやっつけてあげよう」

「ええっ⁉」

あまりにも衝撃的なカミュさんのセリフに、アルルはとびあがるほどに驚きました。

スプリガンさんをやっつけちゃうなんて、あまりにもとんでもない作戦！　いくら約束が守れそうにないからって、約束した相手をやっつけちゃうのは、守る守らない以前のモンダイです。そんなのは、ドロボウさんよりもっともっと悪いヒトのやるコトです。

いくらなんでも、アルルはそんな作戦に賛成できません。そんなコトをするくらいなら、このままスプリガンさんに返しにいったほうがよっぽどマシです。

そうなると、〝まほうの国〟を通り抜けることができなくなって、ずっとずっと遠回りをしなきゃいけなくなります。でも、しかたがありません。お家に帰るのがモノスゴク遅くなっても、ゼンブ話せば、きっとおかあさんもわかってくれます。逆に、スプリガンさんをやっつけるほうが、おかあさんは怒るでしょう。

「どうした？　イイ作戦だろう？　だから〝精霊球〟をボクに渡すんだ」
「イヤ！」
〝おとぎの国〟に来る前の弱虫泣き虫アルルだったら、もしかすると、イヤっていえずにカミュさんに〝精霊球〟を渡しちゃっていたかもしれません。だけどいまは、切り株のおじいさんたちやウィッチさん、〝負けないニンジン〟のおかげで、ホントの元気なアルルにもどりつつあります。イヤなコトは、はっきり「イヤ！」っていえるくらいに。
「なぜだ？　〝まほうの国〟を通過できるし、約束を守る相手もいなくなるんだぞ。キミにとっても悪い条件じゃないはずだ」
「それは……そうだケド……」
だけど、そういうモンダイではありません。カミュさんの考えは、スプリガンさんのコトをゼンゼン考えていない、ただのワガママです。
「じゃあ、こうしよう」
カミュさんはいいます。
「ココは〝まほうの国〟。門番のウィザードから聞いたかもしれないが、ココではすべて魔法で解決する。例えば、なにかを決めなきゃならないときもな」
「え……？」
なんだか、イヤな予感がします。

「つまり、いまからボクとキミが魔法で戦い、勝ったほうが〝精霊球〟を手に入れる。……というのはどうだ？」
「ええっ!?」
やっぱり！
「イヤなのか？　まさか、魔法が使えないというワケではないだろう？　ボクの眼に狂いがなければ、キミは魔導師としての修業をつんでいるハズだ」
「そ、そうだケド……」
といっても、アルルはまだホットやコールドしか使えません。一方のカミュさんは、格好からみて、ホットなんかより上のファイヤーやアイスストーム、ライトニングくらいは楽勝で使えるでしょう。もしかすると、それよりもっともっと強力な魔法が使えるかも……！
アルルにとって、あまりにも不利な戦いです。
「戦うのがイヤなら、スナオに〝精霊球〟を渡したまえ」
「そ、それも……イヤ！」
「なら、話は終わりだ！」
カミュさんは、すっくと立ち上がりました。そして、右手のひらをアルルに向け、
「いくぞ！　ファイヤーっ!!」
イキナリ呪文！

ボッ！

カミュさんの手のひらから火の玉が飛び出し、アルルに襲いかかります！

ゴォォォォォォォォォォォッ!!

「ひゃぁっ！」

アルルはあわてて身をかがめ、それをよけます。目標を見失った火の玉は、ぐにゃりとカーブし、

ドッゴォンッ！

壁ぎわにたてかけてあった黄金のヨロイをコナゴナにしてしまいました。

「ちっ、外したか」

「…………」

舌打ちするカミュさんをよそに、アルルは火の玉が壊したモノのあとをマジマジと見つめました。

モノスゴイ破壊力です。普通のファイヤーよりもずっとずっと上かもしれません。

もちろん、アルルの使えるホットやコールドには、あんな力はありません。もっとも、ホットやコールドはナニかを壊すための呪文じゃないんだケド。

「今度は外さないぞ！」

アルルにひとさし指を向けて、カミュさんがいいます。

「ライトニング!!」

ピシャア―――――ンッ!!

呪文とともに、今度は指先からイナズマが！

「きゃあっ！」

とっさにアルルはよこっとび！

ドゴォンッ！

ライトニングのイナズマは、アルルがさっきまで立っていた場所に大命中。その爆風にあおられて、アルルはコロコロと床を転がりました。

ようやく立ち直ってライトニングが当たったトコロを見ると、じゅうたんと石づくりの床がおおきくエグれています。さっきのファイヤーに負けないイリョクです。

「うぬぅ〜……、チョコマカと逃げやがってぇ〜……っ！」

ギリギリとカミュさんはハガミしました。

とはいうものの、アルルとしては、逃げなきゃ命がアブナイ。あんなファイヤーやライトニングなんか、1回あたっただけで死んでしまいます。逆にアルルの呪文は、あたったとしてもダメージを与えられるかどうか……。〝おはなの国〟のときは、初めにおじいさんのクスリが

かかっていたからナントカなったようなものの……。
アルルのほうが完全に不利——というより、アルルの負けがハッキリしている戦いです。カミュさんはだんだんマジになってきてるし、ヘタをすると、死んでしまうかもしれません。
でも、アルルの心の中は、ひどく落ち着いていました。ココで負けて、もし死んじゃったとしても、悔いはありません。スプリガンさんとの約束をやぶるより、それよりもっとヒキョーなコトをするより、アッサリ死んじゃったほうがマシってものです。
そうなると、お家に帰れなくなっちゃうなぁ……。それはちょっとイヤだなぁ……。おかあさんをひとりぼっちにさせちゃうし……。おかあさん、ゴメンなさい……。そうだ、もしココで死んじゃったら、もしかしたらおとうさんに会えるかも……。
なぁんてアルルが考えていると……、
ヴゥゥゥゥゥゥゥゥゥ……ン！
トツゼン〝精霊球〟が、アルルの手の中でまぶしく輝き始めました。
「な、ナニ……!?」
驚くアルルの身体の中に、手をつたってなんだかあったかいカンカクが入りこんできます。まるで、〝負けないニンジン〟が転がっていったときみたく、〝精霊球〟がアルルにナニか語りかけているカンジです。
「大丈夫。ボクがいるかぎり、キミは負けないよ。〝負けないニンジン〟くんもついてるコト

だし。さあ、呪文を唱えてごらん。キミの、約束を守りたいっていう正しい心をのせて……」
そんな声が、心の中にひびきわたります。
「なにをやっている⁉　〝精霊球〟はボクのモノだ‼」
玉座のうえでアルルを見降ろしているカミュさんが、おっきな声でいいました。
「こうなったら、まず動けないようにしてやる‼　アイス……！」

「コールド‼」

カミュさんが唱えるより速く、アルルはイチかバチかの呪文！
ボクは、ココで負けちゃイケナイんだ！　約束を守ろうとしないコなんかに、ボクはゼッタイに負けないぞ！　そして、スプリガンさんとの約束を守るんだ！　それから〝てんしさま〟に会って、おかあさんのいるお家に帰るんだ……‼
そんな気持ちをたっぷりこめて、アルルは手のひらをカミュさんに向けます。
すると……、
カァァァァァァァ……ッ‼
さっきよりも激しく〝精霊球〟は光りだし、そして……、
ヒュゴォォォォォォォォォォォォ……ッ‼
アルルの手のひらから飛び出したのは、コールドの冷たい水ではなく、とてつもない勢いの

氷の嵐！
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ!!」
完全に不意をつかれたカミュさんは、その氷の嵐をまともにくらってしまいました。
「み、みごとだぁ……っ！」
パァァァ……ッ！
叫び声とともに、カミュさんの身体は真っ白に輝き始めます。その光はどんどんどんどんおっきくなっていき、玉座、謁見の間、そして、
「……!!」
アルルの身体、さらにはアルルの意識まで包みこんでいき……。
「……はっ！」
と気がつくと、アルルは外に立っていました。
「あれ……？」
よくよく見ると、そこは、アルルがずっと歩いていた並木林の道です。真っ青なお空には、お陽サマがキラキラしていて、左右には林があります。
「？？？」
ひょっとして、今までのは夢だったのでしょうか……？

ふと見ると、アルルの足下にナニかが転がっています。
それは、あの〝精霊球〟と〝魔導球〟でした。そして、まるまるとしたタマネギがひとつ。
というコトは、どうやらカミュさんとの戦いは、夢ではないようです。でも、後ろを向いても、前のほうに眼をこらしても、〝まほうの国〟はカゲもカタチもありません。
「おい〜っす！」
アルルが考えこんでいると、上のほうからトッゼンの声。
見ると、ホウキに乗ったウィッチのおねえさんが、クルクルと旋回しながら降りてくるところでした。
やがて、ウィッチさんは着地するなり、
「キミは、ごうか〜く！」
といいました。
「ほえ……？」
なんだかよくわかんなくて、アルルは眼をパチクリ。
「実はネ、キミをテストしてたんだ。キミがどんなコかなぁってネ」
ニッコリと笑って、ウィッチおねえさんはいいます。
「だから、〝まほうの国〟もカミュも、みぃんな〝てんしさま〟の造ったマボロシだったたってワケ。〝精霊球〟と〝魔導球〟はホンモノだけどネ。オーケー？」

「は、はぁ……」

まだ、アルルには状況がハアクできていません。

「悪いコには、〝てんしさま〟にお会いする資格なんてないからネ。でも安心して、キミは合格だから。約束を必死で守ろうとしたし、それをくじけさせようとしたカミュに勝ったんだもの。だから、このまま旅をつづけていれば、きっと〝てんしさま〟に会えるヨ」

「ほ、ホント!?」

「ホントホント。だけど、いつ、ドコで〝てんしさま〟に会えるのかは、サスガのあたしでもわかんないんだケド。これから先、いろんなツライことがあるかもしんないケド、絶対に負けちゃダメだよ。〝てんしさま〟に会いたいっていうキモチが大切なんだからネ」

「うん」

「というワケで、合格のキミにプレゼント! 〝精霊球〟を右手に、〝魔導球〟を左手に持ってごらん」

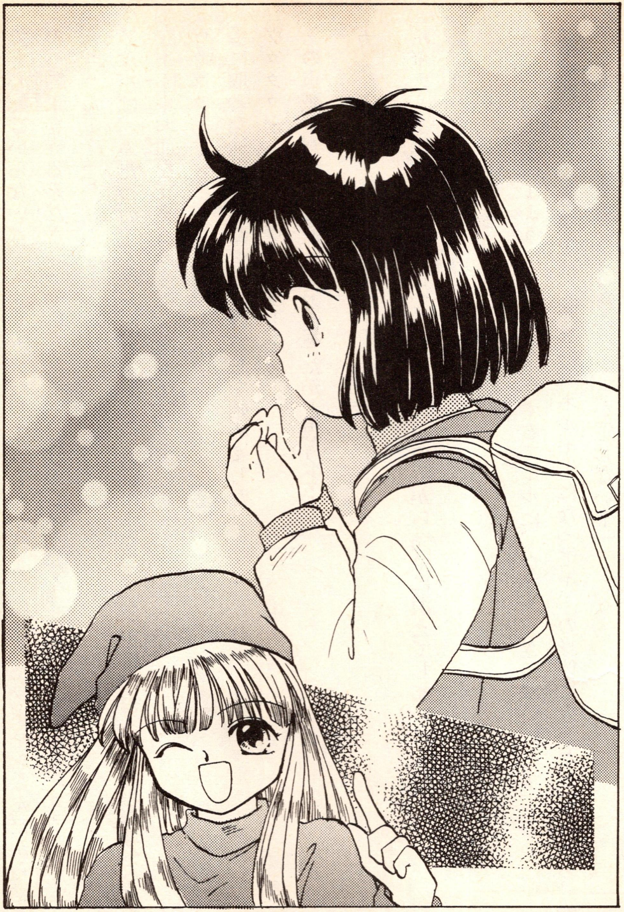
「え……? で、でも……」

「でも……?」

「〝精霊球〟は、スプリガンさんに返さなきゃ……」

「アルルちゃんって、ホンットにいいコなんだネ」

ウィッチさんは、しみじみといいました。



「でも心配はいらないヨ。スプリガンだって〝てんしさま〟の造ったマボロシなんだから。キミの、約束を守るんだ！　っていうキモチだけでじゅうぶん。だから、大丈夫だヨ」

「う、うん……」

アルルは、ふたつの玉を手に取りました。右手――スプーンを持つほうに〝精霊球〟、そして左手――お皿を支えるほうに〝魔導球〟です。

ヴゥゥゥ……ン！　ヴゥゥゥ……ン！

手に取った途端、ふたつの玉は点滅を始めました。

ヴゥゥゥ……ン！　ヴゥゥゥ……ン！

その点滅がだんだん速くなってきたかと思うと……、

カッ……!!

イキナリまばゆい光を発して、玉はアルルの手から完全に消えてしまいました。

「あ、あれれ……？」

「だいじょぶだいじょぶ。心配しないで」

ふたつの玉を探すようにキョロキョロするアルルに、ウィッチさんはいいます。

「〝精霊球〟と〝魔導球〟は、魔導のエネルギーになってキミの身体に入っただけだから。胸に手をあてて、落ち着いてごらん。ナニか感じない？」

「…………」

アルルはいわれたとおりにしてみました。確かに、なんだか身体がポッポポッポしてるような気がします。マラソンかなにかをした後ってカンジ。あふれるような魔導のエネルギーがアルルの身体じゅうをかけめぐっているように感じます。

「これで、キミの魔導力がだいぶパワーアップしたはずだヨ。ホットとコールドだけじゃなく、ファイヤーやアイスストーム、ライトニングが使えるくらいにネ」

「ホント!?」

「うん。このパワーアップした魔力と呪文があれば、〝だいまおう〟の手下くらいならなんとかなるはずだヨ」

そしてウィッチさんは、タマネギを拾って、アルルに手渡しました。

「それから、コレ」

「これは……?」

「これは〝魔力のタマネギ〟っていって、キミがパワーアップした魔導力を使いこなせるようにっていうおまじない。あとでなんかの役に立つかもしれないから、大事にリュックの中に入れておいたほうがいいヨ」

「うん、ありがとう」

〝負けないニンジン〟の入ったリュックに〝魔力のタマネギ〟を入れて、アルルはぺこりとお

じぎ。

「いえいえ、どういたしまして」

ウィッチさんも負けずにおじぎ。

「じゃあ、あたしは行くから。がんばって〝てんしさま〟に会ってネ」

「うん！」

いつのまにか、アルルの「うん」に「！」のマークがついています。だんだんホントの元気を取り戻しつつある証拠です。おとうさんのコトを忘れちゃった、というワケではないけれど、アルルの心の中で、ナニかが変わりはじめていました。

「バイバ〜〜〜イ！」

とホウキに乗ってひゅるると飛びさるウィッチさんを、アルルは見えなくなるまで手を振って見送りました。装甲魔導スーツをさっそうと着た魔導師もイイけれど、ああやってホウキに乗って飛ぶのもイイなぁ、と思いつつ……。

でもそのためには、まずお家に帰らなくちゃいけません。魔法のお勉強はそれからです。

がんばらなくっちゃ！

という新たな決意をちっちゃな胸におさめて、アルルはまたお陽サマに向かって歩きはじめました……。

# おかねの国

アルルは、いまのお空のようなハレヤカな心で、並木林の道を歩きつづけました。

あんまりウキウキするもんで、

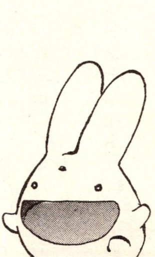
るんるんる〜〜〜ん★

ってスキップしちゃいたいくらいです。なんてったって、つらいコトもあったケド、いいコトもたっくさんありましたからね。

木人のおにいさんたちとお友だちになったし、〝負けないニンジン〟だけじゃなくて〝魔力のタマネギ〟なぁんていうオマジナイももらっちゃった。

魔導力がパワーアップしたっていうのもウレシイ！　ファイヤー、アイスストーム、ライトニングといえば、魔導師ならだれでも使えるキホンの呪文、ホットやコールドみたいな子供用のヤツとは違います。もともと、アルルはそれらを使えるだけのジツリョクはじゅうぶんにあったんだケド、「アルルにはまだ早い」っておとうさんが教えてくれなかったのです。

あこがれの攻撃呪文……！　これさえあれば、たとえ〝だいまおう〟の手下がやってきても、



負けない気がします。

それなんかより、もっともっとウレシイのは、〝てんしさま〟のテストに合格したってコト。

このテストのおかげで、〝てんしさま〟がいるってコトがわかりました。それに「合格したキミは必ず〝てんしさま〟に会えるよ」っていうウィッチさんのコトバは、おっきなおっきなはげみです。もう、〝おはなの国〟を出たときみたいに、「会えなかったらどうしよう」なんて迷ったり、くじけそうになったりしません。

てっくてっく、てっくてっく……。

と軽（かろ）やかにステップをふみながら進んでいくと、だんだん並木林（なみきばやし）の木々がまばらになってくるのがわかりました。ずっとずっと前のほうでは、草原かなにかがひらけているようなカンジがチラホラと見えます。

並木林が終わって、さて、今度はどんな風景がアルルの前に広がるのでしょうか？　どんなお国があるのでしょうか？　ってカンジです。

もしかすると、ずっと林の道を抜（ぬ）けられなかったのは、ボクが「どうしよう」とかいってくじけそうだったからなのかなぁ……。もう、ボクはそんなコトしないもんね。だから林の道も終わるのかもしれないね。

自信とはオソロシイもので、いまのアルルには自分やまわりのコトをそんなふうにブンセキする余裕（よゆう）まであります。

余裕といえば、いまの季節は夏のはず。アルルのお誕生日は夏真っ盛りの日ですからね。それなのに——いままで気がつかなかったケド、この〝おとぎの国〟はゼンゼン暑くありません。それどころか、春のようにポカポカとしてキモチいいカンジです。そんな陽気も、アルルをウキウキ気分にさせる理由のひとつなのかもしれません。

てっくてっく、てっくてっく……。

まぁとにかく、そんなハレヤカな気分で、アルルは歩きつづけます。

ほどなくして並木のような林がとぎれ、草原がまわりに広がりました。まるで、若草色のじゅうたんのようです。風が吹くと草がザザァッといっせいになびいて、ちょっとナイスなカンジ。そんなじゅうたんのところどころに、木々がチョコチョコとはえています。

アルルのお家の近くにソックリの風景です。でも、お家の近くなんだ、っていうカンジはありません。季節感がゼンゼン違うし、よくわかんないケド「ああ、お家の近くなんだなぁ」みたいな、ホッとするというか、安心するというか、そんなカンカクもないからです。

でもまぁ、見なれた風景だから、違うイミで安心はします。このままお家に着けるといいな、なぁんて、ちょっちキタイしてみたりして……。

てっくてっく、てっくてっく……。

草原の真ん中にピッとのびる道を歩きつづけると、やがて、前のほうに建物かなんかのカゲが見えてきました。アルルがてくてくと進むたびに、またひとつ、またひとつとそのカゲが増

えていきます。

「……？」

街かなにかがあるのでしょうか……？

ちょっと小走りでさらに進むと、その予想は大当り！

「わぁ……★」

そこは、ちっちゃな街でした。ちっちゃいといっても、アルルのお家のある村よりはリッパだけれど。

ようやく、ヒトがたくさんいそうな場所が見つかったってカンジです。切り株のおじいさんとかがいる〝おはなの国〟みたいなところのほうが、〝おとぎの国〟らしいといえば、らしいんだケドね。やっぱりこういうトコだと、なんとなく安心します。

街並みは、まるでサンドイッチのように、アルルの通る道をはさむカンジで広がっています。そして、道にそってずらりと並んだたっくさんのお店。普通のお店だけでなく、ウィッチさんのお店みたいな屋台や、敷物をしいただけっていうお店もあります。街、っていうよりは市場ってカンジです。

お店はというと、八百屋さん、お魚屋さん、お肉屋さん、パン屋さんとかだけでなく、魔法のアイテム屋さんや、ウィッチさんみたいな占い屋さん、本屋さんやレストランみたいなモノなどなど、たっくさんのカンバンが出ています。アルルはまだちっちゃいので、ちゃんと字を

読めないケド、カンバンにわかりやすい絵が描かれているのでバッチリです。

　いっぱいお店があるんだなぁ……。

と街並みをキョロキョロしながら、アルルは平らにならされた道をてくてくと歩きました。

アルルのお家の近くにある街でも、これほどたくさんのお店はありません。

だけど……、

「……?」

ナニかがヘンです。

この街には、ナニかが足りません。

なんだろう……?

首をかしげながら、アルルは街中を進みました。

別にヒトがゼンゼンいないというワケではないし、お店やさんがゼンブしまってるというワケでもありません。

だけど、どうも街中の様子がヘンです。

「………」

アルルは、お家の近くの街を思い出してみました。

街っていうと、やっぱ、お魚屋さんとか八百屋さんとかが「いらっしゃい、今日はコレが安いよ!」とかいって怒鳴ってて、それを買いに来るお客さんとかでいっぱいで、ざわざわして

て……。

ざわざわ……？

「……！」

そうだ、コレだ！　とアルルは思い当りました。

この街には、「街!!」っていうカンジのざわざわ感がないのです。お魚屋さんも八百屋さんも静かだし、お客さんもあんまりいるワケじゃあないし。

なんか、街中の元気がない、ってカンジです。〝おとぎの国〟に来る前のアルルみたいに。

どうしたんだろ……？　もしかして〝だいまおう〟の手下が、またなんか悪いコトをしてるのかな……？

そう思って街中をぐるっと見回しますが、そんな様子は感じられません。別に、〝おはなの国〟みたいにメチャクチャにされてるってワケじゃないし。

でも、街のヒトたちも、街中の雰囲気も、ゼンゼン元気がない……。なんだか、こっちまで元気をなくしちゃいそうです。

「………」

早く街から出よっと……。

アルルは、歩くスピードをちょっと上げます。その途端、

ぐぐぅ〰〰〰〰ぅ……。

イキナリ、お腹が鳴りだしました。〝ふしぎなどうぶつ〟の鳴き声ではありません。

そういえば、〝おとぎの国〟に来てからというもの、なんにも食べていません。ココに来る前、おばあちゃんにご本を読んでもらう前に、夕ゴハンを食べたきりです。

それからどのくらい時間がたったのかわからないけれど、スケアクロウさんと追いかけっこもしたし、カミュさんとも魔法で戦ったし……。そりゃぁ、お腹もすくというモノ。

グッドタイミングなコトに、ココはお店やさんがたくさんある街。見回すと……、あったあった！　パンの絵がカンバンに描かれているお店が。もちろんパン屋さんです。これでホントは八百屋さんとかだったりしたら、泣いちゃうかも……。

それはともかく、あとのモンダイは、アルルがお金を持ってるかどうか……。

「………」

アルルは、ポッケの中を探してみました。すると、

「……！」

ポッケの奥の奥に、金貨を1枚発見！　超ラッキ――!!

よくよく考えたら、この金貨は、ずっとずっと前におばあちゃんからもらったおこづかいでした。アルルが生まれてはじめてもらったおこづかいなので、大事に大事に、使わないでおいたのです。

それをいまココで使っちゃうのは、ちょっちモッタイナイような気がするケド、しかたあり

ません。逆にいえば、大事にしておいたからこそ、こういうトコロで役に立つのです。

おばあちゃん、ありがとう……！

心の中でおばあちゃんにお礼をいいながら、アルルは近くのパン屋さんに入りました。

「くださいな」

「なにかのぉ……？　おじょうちゃん……」

とアルルに応えたのは、カエルのモンスター〝のほほ〟。やっぱり、ゼンゼン元気がありません。それどころか、病気のヒトみたいにゲッソリしてしまっていて、わきに置いたおっきなマリにチカラなくもたれかかっています。

「パンが欲しいのかのぉ……？」

「う、うん」

「残念ながら、パンはないんじゃ……。お金がなくて、材料が仕入れられなくてのぉ……」

「どうして？」

「それは……、リッチープアーのせいじゃ……」

「リッチープアー？」

「〝だいまおう〟の手下じゃ……。そいつが、トツゼンこの街にやってきて、街中のお金をゼンブ取られてしまってのぉ……」

やっぱり！　ココにも〝だいまおう〟の手下がやってきていたのです。街中に元気がないの

は、そのせいでしょう。

「ココは〝おかねの国〟。お金がないと、なぁんにもできんのじゃ……」

のほほさんはいいました。

「そっか……」

パンが——というか、売るモノがないのなら、しかたがありません。アルルはのほほさんのパン屋さんを出ました。

ほかのお店に行ってみても、みんな答えは同じです。お魚屋さんも、八百屋さんも、お肉屋さんも、ほかのトコロも、ドコもお金がなくて売るモノがありません。ちなみに、八百屋のおじさんが「くさったダイコンのシッポならある」といってたケド、そんなモノを食べたらお腹をこわしてしまいます。

「………」

アルルは、道の真ん中で考えこみました。

リッチープアーさんっていう〝だいまおう〟の手下モンスターのせいで、この〝おかねの国〟のヒトたちはみんな元気がナイ。

なんとかしてあげたいなぁ……。

アルルは思いました。別に、なんとかしなきゃイケナイってワケじゃないし、そうしないと先に進めないってワケじゃないんだケド、このまま黙って先に行くのは、なんだか悪い気がし

ます。

「…………」

どうしよう……？　とたずねるように、アルルはお陽サマを見上げました。だけど、そのお陽サマは、ニコニコとあったかく微笑むだけ。

そういえば、ボクには〝まほうの国〟でパワーアップした魔法があるんだっけ。それを使ってリッチープアーさんをやっつけちゃおうか……！

と思った瞬間……！

「い〜いニオイがするなぁ」

トツゼン、アルルの後ろから声がしました。それとともに、

ドロドロドロ……。

ってカンジのいや〜なカンカクが、後ろからジワジワやってきます。怒ったときのスケアクロウさんと、おんなじカンジです。

「…………」

アルルは、ちょっち恐る恐るふりかえりました。

そこにいたのは、ツギハギだらけの黒いローブを着て、ユーレイみたいにふわふわしてるガイコツ顔のモンスター！

「……!!」

その顔を見た途端、アルルの頭の中をあの悪夢がかけめぐりました。
おとうさんや騎士さんの攻撃を受けても、ケロっとしてケタケタ笑ってた、あのガイコツ魔導師……！　おとうさんが自分の命を捨てて一緒に谷底に落ちた、あの死霊術師……！
生きてた……!?　そんなハズはないよ！　だってだって、おとうさんが命をかけて戦ったんだもの……!!
「お前、金を持ってるな？」
そんなアルルをよそに、モンスターはいいました。
確かに、あのガイコツ魔導師とは別人のようです。あの悪夢で感じた「絶対に死ぬ！」みたいなハクリョクはないし、着てる黒いローブも違います。あのガイコツ魔導師は宝石やらナニやらをいっぱいつけてたケド、こっちのモンスターはツギハギだらけ。それ以前に、ガイコツ魔導師には、ちゃんと足がありました。それのユーレイってワケでもなさそうだし……。
「〝おかねの国〟の金はゼンブ、このオレ様、リッチープアーのものだ。ちゃんと〝だいまおう〟さまのお許しをもらってある」
リッチープアーさんはつづけていいます。しゃべってるあいだに、イキナリ攻撃すれば、勝てるかもしれない……！
「………」
だけどアルルは、身体が凍りついて動くコトができません。ヘビににらまれたカエルってカ

ンジです。

たとえ別人だとわかっていても、あの死霊術師の顔とリッチープアーさんの顔とが、どうしてもダブってしまうのです。おとうさんが命をすててまで戦わなければならなかった、あの強いガイコツ魔導師に……。

「お前がこの国にいる以上、お前の持ってる金もオレ様のモノ。というワケで……金よこせぇいっ!!」

がばぁっ！

ツギハギだらけのローブをひろげて、リッチープアーさんがイキナリ襲いかかってきました。

「……!!」

その姿が、またガイコツ魔導師とダブります。

「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

アルルは、思わず逃げ出しました。

「待ぁてぇいっ！」

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

もうすっかりガイコツ魔導師に追いかけられているような気になって、アルルは必死に逃げます。まわりを気にしたり、後ろをふりかえる余裕なんか、ゼンゼンありません。

走って、
走って、
ただひたすらに走って、
もうダメ、これ以上は走れないよ、ってトコロでようやくストップ。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
肩で息をしながら、アルルはチラッと後ろを見ました。追いかけるのをあきらめたらしく、リッチープアーさんの姿はありません。そして、その向こうに広がるのは〝おかねの国〟の街並み。
アルルはどうやら、街の反対側に出てしまったようです。つまり、このまま〝おかねの国〟を背にして進めば、〝てんしさま〟のところに行けるってコト。
だけど……、
「………」
アルルは迷いました。このまままっすぐ進んじゃうか、その前にリッチープアーさんをやっつけて〝おかねの国〟を元にもどすか……。
まっすぐ進むのはとってもカンタン。だけど、困ってるヒトたちを見過ごすコトなんてできません。
とはいうものの、リッチープアーさんとマトモに戦えるかどうか……。またあのガイコツ魔

導師とダブって、動けなくなってしまうのがオチでしょう。
どうしよう……。
と悩んでいると、
ぺったぺった、ぺったぺった……。
奇妙な足音が聞こえてきました。
見ると、誰かが街のほうからやってきます。リッチープアーさんではないようだケド……。
ぺったぺった、ぺったぺった……。
ダルマさんみたいなまあるい身体に、「寝てるの?」って聞きたくなるようなほっそい眼、〝ふしぎなどうぶつ〟みたいなおっきな口、おデコの角にトカゲみたいなシッポ……。
そんな姿のヒトが、自分の身体とおんなじくらいのリュックをしょって歩いてきます。
ぺったぺった、ぺったぺった……。
「やあ」
アルルの前まで来ると、そのヒトは右手をシュタッとあげてあいさつしました。
「こ、こんにちわ」
いちおう、アルルもあいさつ。
「このヘンじゃ見ない顔だね。キミの名前は?」
「アルル」

「ボクは〝ももも〟。キミもこの街を出るトコロなのー？」
「え……？」
「違うのー？」
「っていうか……」
アルルは、どうしようか迷ってるトコロです。
「キミも、早くこの街から出たほうがいいよー。街の外にいるぶんなら、リッチープアーはやってこないからなのー」
「…………」
「ボクも、もうこの街じゃ商売できないから、別のトコロに行って店をひらくつもりなのー」
「…………」
「あ〜あ……。1枚だけでいいから、金貨があればなー……」
と、ため息まじりにももさんはいいます。
「どうして？」
アルルはたずねました。
「この街の真ん中の広場に、〝おかねの国〟の守り神、ゴールドドラゴンの像があるのー。その像に、金貨を捧げると、ゴールドドラゴンが復活するという伝説があるのー。知らないー？」

「う、うん」

リッチープアーさんから逃げるときに、その像があるという広場をとおったかもしれないケド、そのときのアルルには、それを見る余裕なんてありませんでした。

「でも、街中のお金はリッチープアーにゼンブ取られちゃったのー。街の外から持ってきても、スグお金のニオイをかぎつけて襲ってくるしー」

ふぅ、ってカンジで、ももさんはすくめるように両手をあげます。

「だからもう、リッチープアーをなんとかする方法なんてないのー……。夢も希望もありゃしないってカンジー。……じゃあ、ボクはもう行くよー。キミも、早く離れたほうがいいのー」

それだけいうと、ももさんはまた、ぺったぺった、ぺったぺった、と歩き始めました。やがて、その姿が見えなくなってしまいます。

「………」

ももさんが完全に消えてから、アルルは、ポッケから金貨を取り出して見つめました。

これをゴールドドラゴンの像に捧げれば、リッチープアーさんをやっつけられるかも……！

しかも、この方法なら、アルルがリッチープアーさんと戦わなくてすむし、あのガイコツ魔導師といくらダブっても平気です。

でも、これを捧げちゃうと、もうアルルは一文無しになってしまいます。ナニかを買って食べるってコトができません。これから先〝てんしさま〟に会うまでに、どれくらいかかるかわ

からないのに、お金をなくしちゃっても大丈夫(だいじょうぶ)でしょうか……？　いまも結構(けっこう)お腹(なか)がへってるワケだし……。

それに——よく考えたら、誰(だれ)かに「リッチープアーをなんとかして」って頼(たの)まれたワケじゃあありません。〝おはなの国〟で木人(もくじん)のおにいさんに「オトリになってくれ」っていわれたときとは違(ちが)います。別に、アルルのお金をゴールドドラゴンの像に捧げなきゃイケナイってワケじゃあないのです。

「…………」

ずっと前の元気アルルなら、きっと迷(まよ)わなかったことでしょう。〝おかねの国〟に来る前の、ちょっち元気アルルでも、スグに金貨を捧げに行ったかもしれません。

いまのアルルは、弱虫泣き虫にちょっと戻(もど)ってしまっています。リッチープアーさんのガイコツ顔が、あの死霊術師(ネクロマンサー)とダブったおかげで、おとうさんの悪夢(あくむ)がよみがえってしまったからです。

「…………」

アルルは、また金貨を見つめました。

キラリ——ン……★

お陽(ひ)サマの光を受けて、金貨が輝(かがや)きます。まるで、ウインクするように。

「…………」

もし、この金貨をゴールドドラゴンに捧げないで先に進んだとしたら、ずうっと悔いが残るに違いありません。ブジお家に帰れても、ずっとスッキリしない日々をすごすコトになるでしょう。このコトを話したら、おとうさんやおかあさんに怒られてしまうかも……。

そういえば、おとうさんが前にいってました。

「たとえ頼まれなくても、ヒトにやさしくするのは、とってもいいコトだ。そのうち、自分へのいいコトとなって返ってくるだろう」

って……。

「………」

ぎゅっ……。

アルルは、ちっちゃな手で、大事な金貨を握りしめました。これを手にして、やることはタダひとつ……！

みんなが困ってるなら、ボクがなんとかしてあげなきゃ……！　なんとかできるモノを持ってるのは、ボクしかいないんだから……！

そんなキモチを勇気にかえて、アルルはまた〝おかねの国〟へと向かいました。

でも、リッチープアーさんにスグ見つかっちゃうのはイヤなので、あっちへコソコソ、こっちにコソコソしながら歩きます。建物のカゲに隠れてみたり、お客さんのフリをしてテキトーなお店やさんに入ってみたり……。なんだか、ドロボウさんになったような気分です。

　そういえば、ずっと前まではお友だちとかくれんぼして、いちにちじゅう遊んでたっけ。おとうさんが帰ってこなくなってから、お友だちと遊ばなくなっちゃったなぁ……。

　なぁんてしみじみ思いながら、アルルはゴールドドラゴンの像があるという、街の広場へとコソコソ向かいました。ラッキーなことに、リッチープアーさんがやってくる様子は、いまのところないようです。

　やがて、なにやら銅像のようなモノが見えてきました。建物のカゲに隠れて見てみると、とてもおっきなドラゴンの像です。名前のとおり金色に輝いていて、これまたおっきな金庫を抱えています。なるほど、〝おかねの国〟の守り神らしい銅像です。

　よぉくカンサツすると、ドラゴンの頭のてっぺんに、細長い穴があいているのがわかります。まるで、おっきなおっきな貯金箱です。

　あそこに金貨を入れればいいのかな……？　ではサッソク……。

　と思った瞬間……！

「また来たな？」

　ドロドロドロ……。

　というカンカクとともに、アルルの後ろから声。

　まさか！　と思ってふりむくと……、やっぱり！　そこにはリッチープアーさんがふわふわ

していました。
「オレ様に金をよこす気になったんだな？」
「ち、ちがうよ……！」
リッチープアーさんの顔が、またガイコツ魔導師とダブって、ちょっちくじけそうになったケド、なんとか勇気をふりしぼってアルルはいいました。
「あのドラゴンさんにあげるんだもん！」
「ナニィッ!?　オレ様に金をよこさないってぇのか!?」
「そ、そうだよ……！」
「だったら、チカラずくで奪うまでよぉっ！　オレ様の〝貧乏ヒマなし忙しく3回攻撃〟をくらえっ!!」

ガバァッ！

と、リッチープアーさんが襲いかかります！
「わぁぁぁぁぁぁぁっ！」
アルルはさっきとおなじように、思いっきりダッシュしました。といっても、タダ単に逃げるワケではありません。逃げつつゴールドドラゴンの像に向かうという、高度な作戦です。
「待ぁてぇいっ!!　今度は逃がさねぇぞぉっ！」

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
　走って走って、やがて像の前に到着。ゴールドドラゴンの像はとってもおっきくて、二階建ての建物くらいはあります。だけど、それに驚いてるヒマはありません。
「金よこせぇぃっ！」
　リッチープアーさんがとびかかってきた瞬間！
「えいっ！」
　アルルは思いっきりジャンプ！　そのまま像にしがみつきます。
　襲いかかる目標を失ったリッチープアーさんは、

　ガンッ!!

「あいとわっ！」
　ゴールドドラゴンの像に頭を思いきりぶつけてしまいました。
「痛てててて……」
　リッチープアーさんが痛がってるあいだに、アルルは像をよじのぼりました。
「よいしょ、よいしょ……」
　お家の近くの木にのぼって遊んでたのが、とっても役に立っています。おとうさんが帰ってこなくなってから、ゼンゼン木にのぼってないケド……。

とにかく、あっという間にドラゴンの頭までのぼってしまいました。

「コラ――――っ!!　おりてこ――――いっ！」

下でリッチープアーさんが怒鳴っています。どうやら、ふわふわ浮かんでるワリには、リッチープアーさんはココまで飛んでくることができないようです。

そんなリッチープアーさんをムシして、アルルは像のてっぺんの穴に、金貨を入れました。

チャリ――――ン……！

乾いた音をたてて、金貨は像の中に入っていきます。

その途端……、

ぶるっ……。

まるで生き物のように、像がふるえました。

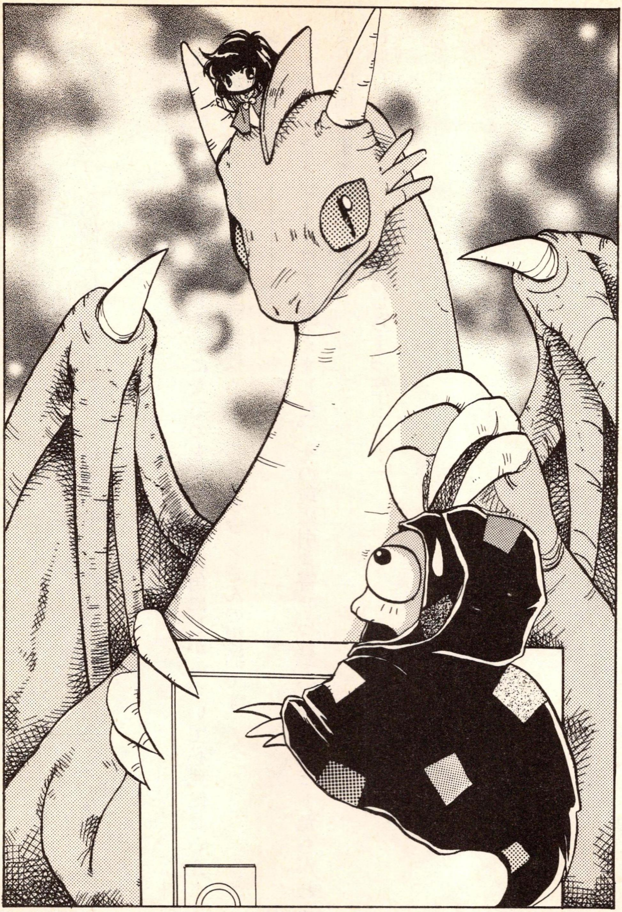
ドクン……ドクン……ドクン……。

心臓が動いてるような音が聞こえてきて、だんだん像がホントに生きてるようなカンジになってきます。

そして……、

カッ……!!

両眼が光ったかと思うと、



「キシャ――――――ッ!!」
ゴールドドラゴンの像が身体をおおきくのけぞらせて、街中にひびき渡るようなおたけびをあげました。
「うわぁっ!!」
あまりの勢いに振り落とされそうになるのを、アルルは角にしがみついて必死にこらえます。
とにかく、〝おかねの国〟の守り神、ゴールドドラゴンさんの復活です。
「シャギャ――――ッ!!」
ゴールドドラゴンさんはまた吼えました。その声に引き寄せられて、街中のヒトたちがわらわらと広場に集まってきます。
「し、しまった……! 復活しちまった……!」
ギロッ!
あとずさるリッチープアーさんを、ゴールドドラゴンさんはニラみつけました。
そして、
「リッチープアーよ……」
まるで地震のようにひびく声で、ゴールドドラゴンさんがいいます。

「お前のその悪行、この場でしかと見させてもらったぞ」
どうやらゴールドドラゴンさんは、この街でどんなコトが起きているのかを、もうゼンブ知っているようです。さすがは守り神ってカンジ。
「へっ、オレ様とドッコイのケチモンスターがナニいってやがる！」
リッチープアーさんが、ゴールドドラゴンさんの足もとでいいます。
そういえば……。
とアルルは思いました。おとうさんの図鑑によれば、確かゴールドドラゴンさんは、金庫に貯めこんだ財宝を守るあまり、みんなドロボウに見えてしまうというモンスターだったはず。
「あまいな」
チッチッチッ。
ゴールドドラゴンさんはひとさし指をふります。
「わたしは、この〝おかねの国〟の守り神。わたしがここにいるだけで、民は稼いだ財産をわたしに捧げてくれる。そして、民の財産は、それぞれが自身のチカラで守っている。だから、わたしがケチになる必要などないのだ」
「ぬぬぅ……っ！」
「もちろん、民たちのチカラで財を守りきれぬとき、わたしは目覚める。いまがそのときだ。リッチープアーよ、そんなに金が欲しいならくれてやる。……受け取れっ!!」

ガシャンッ！

いうがはやいか、ゴールドドラゴンさんは金庫のドアを思いっきりあけました。

「くらえ！　〝ゴールデン大津波〟!!」

ザザァ――――――――――ッ!!

金庫から飛び出した、モノスゴイ数の金貨が、まさに津波となってリッチープアーさんに襲いかかります！

「おわ――――――っ!!」

ひとつひとつの金貨はとっても軽いケド、それがたくさん集まったらとっても重くなるコトくらい、アルルも知っています。

金貨の津波に巻きこまれたリッチープアーさんは、やがて、金貨のあまりの重さにたえかねて、おしつぶされてしまいました。

「重すぎて、首がまわんねぇ……」

ばたんきゅ～、ってカンジです。

「やった！」

リッチープアーさんをやっつけたぞ！

アルルはゴールドドラゴンさんの頭のうえでとびあがりました。

「わ————っ!!」

と、街のヒトたちも大歓声をあげます。

「民たちよ！」

ゴールドドラゴンさんが、みんなに向かっていいました。

「このいまいましきリッチープアーを街の外に追い出すのだ！　そして、わたしの金を使って品を仕入れ、街を元どおりに復興させよ！」

「お————っ!!」

掛け声とどうじに、ヒトたちはバラバラと散っていきました。あっちへいったり、こっちへいったり……。やがて、いろんな品物が運ばれてくるようになりました。

街が元気を取り戻したってカンジです。そのざわざわ感は、アルルのお家の近くにある街よりも、ずっとずっと上です。ゴールドドラゴンさんの上にいても、うるさいって感じるくらい。

「わたしを復活せし者よ、確か、名前はアルルといったな？」

トッゼン、ゴールドドラゴンさんはアルルに向かっていいました。

「う、うん」

「もうリッチープアーに襲われる気づかいはない。降りてもよいぞ」

アルルがするすると降りると、ゴールドドラゴンさんがじっと見降ろします。

「お前の行(おこな)いはずっと見ていたぞ、アルルよ。お前は、自分の身をかえりみず、大事(だいじ)な金貨(きんか)をわたしに捧(ささ)げてくれた。つまり、この街(まち)を救(すく)ったのはお前だ。礼をいうぞ」
「ど、どういたしまして」
「お前のやさしい行いは、後世まで語(かた)り継(つ)がれるだろう。お前も、その心を忘れるでないぞ」
「うん」
とうなずいた途端(とたん)、

ぐぐぅ〜〜ぅ……。

またアルルのお腹(なか)が鳴りました。
「なんだ、空腹(くうふく)なのか？」
「う、うん……」
ちょっち顔を赤くして、アルルはうなずきます。
「おじょうちゃん、コレを食べるんじゃ」
といってホッカホカの焼きたてパンを差し出したのは、カエルののほほさん。
「え……、でも……」
「なぁに、金はいらんて。わしらの街を救ってくれたんだからのぉ」
「その通りだ。アルルよ、食べるがよい」

「うん！　いただきま〜す」
ぱくっ。
アルルはホッカホカのパンをひとくち食べました。すると、ふんわりしたパンの味が、じんわりと口の中にひろがります。とってもやさしい味です。やっぱり、金貨をゴールドドラゴンさんに捧げてよかった、とアルルは思いました。
「アルルよ、コレを受け取るがよい。わたしからの礼だ」
パンを食べ終わったアルルに、ゴールドドラゴンがさしだしたモノは、
「ぱおー」
ちっちゃなちっちゃなゾウさん。アルルの手のひらに乗っちゃうくらいです。
「わぁ、カワイイ★」
「これは〝テノリゾウ〟といって、きっとなにかの役に立つだろう。それから、コレも持っていくがよい」
と今度は、まるまるゴツゴツの、ふかしたらおいしそうなジャガイモを、アルルに手渡しました。
「これは……？」
「これは〝親切さのジャガイモ〟という。お前の、自分をかえりみぬやさしさをたたえるものだ。いずれ、役に立つかもしれん」

「ありがとう！」

「お前がドコにいくかは知らぬが、ナニか大事な旅をしていると見た。道中の安全を、〝おかねの国〟全員で祈っておるぞ」

「気をつけてのぉ」

ゴールドドラゴンさんにつづいて、のほほさんもいいます。

「じゃあ、さようなら！」

〝親切さのジャガイモ〟をリュックに入れ、テノリゾウさんを頭にのっけて、アルルはゴールドドラゴンさんたちに別れをつげました。そして、スッキリしたやさしいキモチで、いつもの道を歩き始めます。

もし、金貨をゴールドドラゴンさんに捧げなかったら、こんなにスッキリしたキモチにはならなかったでしょう。やっぱり、おとうさんは正しかった！

もういなくなっちゃったケド、リッチープアーさんの顔を見ても、もう怖がったりすることはないでしょう。もし、あのガイコツ魔導師が生きてるとしたら、おとうさんにもそのチャンスがあるかもしれないってコトに気がついたからです。

まぁとにかく、お腹いっぱいにもなったところで、アルルは〝てんしさま〟への旅をふたたび始めたのでした……。

# かがみの国

ズボッ!!

「わぁっ!」

トツゼン、地面が抜(ぬ)けました。

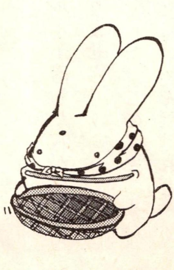
〃おかねの国〃を出発して、しばらく歩いていたら、イキナリです。〃おはなの国〃で落(お)とし穴(あな)に落っこちたスケアクロウさんのように、アルルの身体(からだ)は地面にポッカリとあいた穴の中に沈(しず)んでいきます。

そのまま、深い深い地面の下にまっさかさま!

「わぁ〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰っ!!」

ひゅるるるるるるるるる……!

あまりにトツゼンだったので、アルルはどうすることもできません。朝、遊びに行こうと思って玄関(げんかん)を出たら、イキナリ石ころにけつまずいたってカンジ。



いや、穴に落ちる前にナントカできたかも……。

アルルは——落ちながら——思いました。

穴に落ちる前、アルルは新しくできたお友だち——テノリゾウさんを両手に乗っけて、おしゃべりしながら歩いていたのです。それさえしていなければ、落ちたと気がついたときにナニかにつかまるとか、なんらかのコトができたかもしれません。

ボクがよそ見してたから、〝てんしさま〟が怒ったのかなぁ……。

これまでの旅で、アルルは魔法がパワーアップしたり、〝負けないニンジン〟や〝魔力のタマネギ〟、〝親切さのジャガイモ〟をもらったり、テノリゾウさんとお友だちになったり、いろんないいコトがありました。それに気をよくしていたのは事実です。さらにお調子にのって、よそ見おしゃべりをしながら歩いているアルルに、〝てんしさま〟はバツをくだしたのでしょうか……？

ひゅるるるるるるるるる……！

とにかく、アルルは落ちつづけます。

それにしても、いつまで、どこまで落ちるのでしょうか？　もうアルルが落ちた穴が見えなくなってだいぶたつのに、ドコかに着地するような気配はゼンゼンありません。

ふと、アルルは〝おはなの国〟に落っこちたときのコトを思い出しました。このまま、また別の世界に出てしまうのでしょうか……？　アルルのお家の近くだったらいいんだけれど……。

でも、ゼンゼン別の世界に落ちたからといって、もうアルルは泣いたりなんかしません。いろんなヒトたちからもらった、心強いいろんなモノがあるし、テノリゾウさんっていうお友だちだっています。だから、ゼンゼンさみしくありません。アルルのお家（うち）に帰れるように、ドリョクするだけです。

ボク、ゼッタイに負けないもん……！

この〝おとぎの国〟の旅で、アルルの心の中はだいぶ変わりました。というより、弱虫泣き虫アルルから、元気アルルに戻（もど）った、というほうが正確です。泣いたり、落ちこんだり、くじけたりしてちゃダメ。そんな心に負けちゃダメなんだ、というコトがわかってきました。おかあさんのいうとおり、いつまでもクヨクヨしてるようじゃ、おとうさんも帰ってこないかもしれないし……。

ひゅるるるるるるるるる……！

まだまだアルルは落ちつづけます。

ドコまで落ちるんだろ……？

と思っていると、トッゼン、下のほうが明るくなりました。アルルとテノリゾウさんの身体（からだ）はその光に包みこまれ……、

どてっ！

アルルは、光る床にしりもちをついて着地。その頭の上に、

ごんっ！

「ぱおっ！」

「アイタ！」

テノリゾウさんが落っこちました。ちょっちイタイ……。

「いたぁ～……」

ズキズキする頭をさすりながら、アルルはごっつんこしたショックで眼をまわしているテノリゾウさんをだっこしました。

そして、あたりを見回すと……、

「ええっ……!?」

アルルはビックリ仰天！

上を見ても、下を見ても、左を見ても、右を見ても、アルル、アルル、アルル、アルルだらけ！　もちろん、アルルにだっこされてるテノリゾウさんも、そこらじゅうにいます。

「ど、どういうコト……!?」

驚きながらアルルはキョロキョロしますが、やがて、あるコトに気がつきました。

アルルがキョロキョロすると、そこらじゅうのアルルもキョロキョロします。アルルが右手を動かすと、そこらじゅうのアルルは左手を動かします。アルルが下を向くと、下のアルルと眼があいます。

コンコン。

床を軽く叩いてみて、ようやくアルルだらけのナゾがとけました。床も、天井も、壁も、みぃんなカガミでできているのです。しかも床と天井と左右の壁で、合計4つのカガミ、というワケではありません。サンカクやシカクや、いろんなかたちのカガミが複雑に組みあわさっているので、アルルがいっぱいに見えるのです。まさにカガミの国ってカンジ。

「………」

アルルは、自分が落ちてきた穴のほうを見上げました。そこだけがポッカリと黒くて、ずっとずっと果てしない闇がつづいています。

いくら木のぼりが得意のアルルでも、サスガにこれはのぼれそうにありません。ドコまで行けばもとの地上に戻れるか、ゼンゼンわからないし……。ナニか別の方法を探して、地上に出るほかありません。

とにもかくにも、アルルは歩き始めるコトにしました。じっとしていてもはじまりませんからね。

とはいうものの……。

ごんっ！

「アイタ！」

ごんっ！

「いったぁい！」

ごんっ！

「う！」

カガミの世界を歩くのは、結構タイヘンです。「ココは通れるな」と思って進んでみたら、実はカガミだったり、「ココはカガミだ、とみせかけて……」と思ったら、やっぱりカガミだったり……。そこらじゅうのカガミに衝突しまくって、おデコとおハナが真っ赤です。

だけど、アチコチ歩きまわったおかげで、いろんなコトがわかりました。

どうやら、このカガミの世界、アリさんとかモグラさんのお家みたいになっているようです。カガミでできたお部屋とお部屋が、カガミでできた洞窟でつながってるってカンジ。

ココも、〝おとぎの国〟のひとつなのでしょうか……？　でも、ヒトっこひとりいません。これはヘンです。またココにも〝だいまおう〟の手下がいるのでしょうか？　それとも、あんまり歩きにくいもんだから、「こんな国いらない！」とかいって、ミンナでお引っ越ししちゃってたりして……。

ごんっ！

ごんっ！

と、アチコチぶつけながら、アルルはさらに進みます。するとやがて……、

「うわぁ～……」

ひときわおっきな部屋に出ました。そのあまりのスバラシサに、アルルは思わず声をあげてしまいました。

教会の聖堂くらいの広さで、いろんなカタチのカガミが複雑に重なりあって、キラキラしています。なんだか、ダイヤモンドかなにかの中にいるような気分です。すっごく幻想的で、とってもキレイ……。

「………」

アングリと口をあけたままホールの中を見まわすと、真ん中に、これまたおっきなカガミを発見。オトナのヒトを余裕で越えるおおきさです。

アルルが近づいてそのカガミをのぞきこむと、向こう側のアルルとバッチリ眼があいます。もちろんカガミの向こう側も、宝石の内側のような、アルルだらけの世界です。

「………」

じっ。

とカガミの中のアルルを見つめると、向こう側のアルルもこっちの世界のアルルを見つめます。

なんだか、とってもヘンな気分……。ボクがふたりいるみたい……。あっちにもこっちにも、たっくさんのボクがいて、カガミの向こうのボクを見つめてる……。

そういえば、カガミの向こう側って、どうなってるのかなぁ……？　やっぱり、もうひとりのボクがいて、ボクとおんなじように遊んだり、眠ったりしてるのなかぁ……。

「…………」

だんだん、実はあっちがホンモノで、こっちにいる自分がカガミの中のニセモノのような気にもなってきます。

なんだかよくわかんないケド、眼をそらそうと思っても身体がいうコトをききません。まるで、催眠術かナニかにかかってしまったようです。

「……？」

じぃっとカガミにしばらく見入っていたアルルは、ふと、奇妙なコトに気がつきました。

カガミの中のアルルは、こっちがわのアルルと、服も髪も顔も、まったくおんなじです。だけど、頭のうえに乗っけたはずのテノリゾウさんの姿がありません。〝負けないニンジン〟とかを入れたリュックサックも。

あれれ？

アルルは頭のうえに手をやって、テノリゾウさんがいるかどうかを探りました。

ぐにぐに。

「ぱおー」
やっぱりいます。だけど、カガミの向こうのアルルには、テノリゾウさんがいない。背中のほうも探ってみたら、やっぱりこっちの自分はリュックをしょっています。
「どうして……？」
と思った途端、
ニヤリ。
カガミの向こうのアルルが、イキナリ笑いました。こっち側のアルルはゼンゼン笑ってなんかいないのに……！
「ええっ⁉」
こっち側のアルルが驚いてるあいだに、向こう側のアルルは左手をのばしました。
にゅっ。
まるで水の中から手を出すように、向こう側のアルルの手がこっち側にあらわれます。その手は、こっち側のアルルの右手をつかんで、そのまま……、
グイッ！
「わぁっ！」
モノスゴイ力でもって、こっち側のアルルはカガミのほうに引き寄せられました。それと同

時に、向こうがわのアルルがこっちにせまってきます。

「……っ!!」

ぶつかる!

と思ったのもツカの間……、

「……!?」

トツゼン、アルルのまわりが真っ暗になってしまいました!

あわててふりかえると、ホールにあったカガミとおんなじくらいの、光の穴がポッカリあいています。

アルルはそこから、この暗闇を抜けようとしましたが、どうやっても穴から先に進むことができません。まるで、ブ厚いガラスかなにかがハメられているかのようです。

その向こうには、もうひとりのアルルが立っていました。そっちのアルルの後ろは、こっちみたいな真っ暗闇ではなく、キラキラしたカガミの世界。

ニヤリ。

そっち側のアルルがまた笑いました。こっちのアルルがいちどもしたコトのない、とっても悪いカンジの笑みです。

よく見ると、そっちのアルルの手の中で、テノリゾウさんがジタバタしています。イヤがって、手の中から逃げようとしているようです。リュックサックも、いつのまにか、こっちから

あっちに移ってしまっています。

ボク、カガミの中のボクと入れかわっちゃったの……？

アルルは思いました。だけど、それがわかったからといって、アルルにはどうするコトもできません。

くるっ。

イキナリ、向こう側のアルルが背中を向けました。そのまま、ジタバタするテノリゾウさんをつかんだまま、スタスタと去っていってしまいます。

「ああっ！　待って！　おいてかないで!!　ココから出してよぉ!!」

こっち側のアルルがチカラいっぱい叫びますが、ムシしてるのか、聞こえてないのか、向こう側のアルルは振り向きもせずに歩きつづけました。てくてくと歩くリズムにあわせて、リュックの〝ふしぎなどうぶつ〟マークがゆれます。

やがて、向こう側のアルルは、カガミの世界の中に消えていってしまいました……。

ポツン……。

かくしてアルルは、まるで牢屋のような暗闇の中にひとりぼっち。

もう完全にひとりです。テノリゾウさんもいませんし、〝負けないニンジン〟とか、いろんなヒトたちからもらった大事なアイテムも、リュックごとありません。みんなみんな、あっち側のアルルに取られてしまいました。

それにしても、あのもうひとりのアルルは、いったいナンなのでしょう……？　モンスターかナニかが化けているのでしょうか……？　どうして、ひとりでに動き出して、ホンモノのアルルと入れかわってしまったのでしょうか……？

ホンモノ……？

もしかすると、実は、あっち側のアルルがホンモノで、いま暗闇の中にいるほうがニセモノなのかもしれません。カガミの中にとじこめられていたホンモノのアルルが、もとに戻ろうとして、ニセモノと入れかわったのかもしれません。

そんなハズないもん！

ブンブンブンと首をふって、アルルはそんな考えを捨てました。

自分のほうがゼッタイにホンモノだ！　という確信が、こっち側のアルルにはあります。元気でよいコのアルルは、あんな、口のはじをぐにゃっと曲げて「ニヤリ」なんて笑ったりしません。あれは、とっても悪いコの笑いかたです。

だけど、いくらそういったカクシンがあるといっても、もうどうするコトもできません。

じっと待ってみても、向こう側のカガミの世界には誰も通る様子がないし、どんなに叩いても、おっきな声を出しても、穴から外に出ることができません。

テノリゾウさんも、〝負けないニンジン〟も、〝魔力のタマネギ〟も〝親切さのジャガイモ〟も、みんな向こう側のアルルに取られちゃったし……。

「……！」
ふと、アルルは思いたちました。
テノリゾウさんとかは取られちゃったケド、〝まほうの国〟でパワーアップした魔力はどうなのでしょうか？　やっぱり、向こう側のアルルに取られてしまったのでしょうか？　もしかしたら、魔力はカタチのみえないモノだから、取られてないかも……。
もしそうなら、パワーアップした魔法でこの窓——のようなモノを壊して、もとの世界に戻れるかもしれない……！
サッソク、アルルはそれをやってみるコトにしました。とにかく、やれるだけのコトはやってみないと……。
アルルは、ちょっと後ろにさがって、暗闇にポッカリあいた窓に手のひらを向けました。
「ファイヤー！」
ゴォッ！
呪文と同時に、手のひらから火の玉が発射！　だけど……、
バァンッ！
窓に当たった火の玉は、あえなくちりぢりになってしまいました。もとの世界への窓は、もちろんキズひとつついていません。

そうだといって、1回くらいであきらめちゃいけません。

「アイストーム！」

ビュォォォォォォッ！

今度は、あのカミュさんも倒した、氷の嵐！

バァンッ！

だけどやっぱり、氷の嵐は窓に当たってもヒビを入れることもできずに、しゅぅぅと消えてしまいました。

「ライトニング！」

ピシャア――――ンッ！

まだまだぁっ！　とばかりに、今度はイナズマの呪文！

パキィンッ！

イナズマはばっちり大当りだけど、やっぱり窓はこわれません。

やっぱりダメか……、と思った瞬間！

「……!?」

ゴォッ！

アルルの放ったイナズマが、こっちに向かって飛んできます！

「ひゃぁっ！」

あわててその場にしゃがみこんで、アルルはそれをよけました。行き場を失ったイナズマは、果てしない暗闇のかなたへと消えてしまいます。

どうやらライトニングの呪文は、ファイヤーやアイスストームと違って、カガミやガラスみたいなモノに当たるとはねかえってしまうようです。ちょうど、お陽サマの光がガラスやカガミに反射するように。

……って、冷静にブンセキしてる場合ではありません。

パワーアップした魔力が残っていたのはよかったけれど、それを使っても向こう側——もとの世界に戻ることができなかったのです。

もう、アルルになすすべはありません……。

「…………」

ぺたん。

チカラをなくしたように、アルルはその場にすわりこみました。実際、ファイヤー、アイスストーム、ライトニングと呪文を3連発で唱えてしまったので、魔導力もほとんど残っていま

せん。

ずぅぅ……ん。

まわりの暗闇が、重く重くのしかかってくるような気がします。

「うぅ……」

じわわっ。

眼に、だんだん涙がたまってきました。

真っ暗闇の中にひとりぼっち……。ニセモノとムリヤリ交代させられてしまって、ココから出るコトもできずに……。

このまま、〝てんしさま〟に会うコトも、お家に帰るコトもできずに、アルルの旅、いえ、人生は終わってしまうのでしょうか……？　おかあさんやおばあちゃん、〝おとぎの国〟のヒトたちの顔を、二度と見るコトもできずに……。

そう考えるだけで、涙があとからあとからあふれてきます。〝おはなの国〟に落っこちたときでさえ、こんなひとりぼっちな気分にはなりませんでした。

ひとりぼっちで、さみしくて、かなしくて、くやしくて……。

悪い夢ならさめて……！　おとうさん、助けて……！

ぐすぐす……、しくしく……。

とアルルが泣いていると、

「ちょ――――――――――っぷ！」

　コツン。

「イタッ！」

　トツゼン誰かが後ろから、アルルの頭をたたきました。

　見ると、おじさん――らしきヒトが立っています。紙袋で顔をすっぽり覆い、そのうえにかけた黒ブチの眼鏡に、ふっといマユゲ。青い半袖のうえに、ゆったりした白い袖なしシャツを着て、さらにそのうえには軽めの魔導プロテクター。そして、なぜか青いミニスカート……。

　ちょっと、ヘンな格好……。

「ダレ……？　おじさん……」

「おじさんとはシツレイな。まだそんなトシじゃないっスよ」

　そのおじさん――じゃなくて、おにいさんはいいました。

「ボクは〝ちょっぷん〟。〝かがみの国〟の住人っス」

「〝かがみの国〟……？」

「そう。ちなみに、ココはカガミの裏側の世界。ボクらはもともと、あっちの表側に住んでいたんっスよ」

　アルルが入ってきた――というか、入れられた穴を指差して、ちょっぷんさんはいいます。

「見たところ、キミもこっち側にムリヤリつれてこられたようっスね」
「う、うん……」
「でも、泣くのはイカンっス。泣いててもナンの解決にもならないっスからね。さあ、コレで涙をふくっス」
ちょっぷんさんはポッケからハンカチを取り出して、アルルに渡しました。格好はちょっちヘンだケド、とってもいいヒトのようです。
「ありがとう……」
お礼をいって、アルルはハンカチで涙をふきました。完全にひとりぼっちじゃないってわかったので、ちょっと元気を取り戻します。
「どうして、ちょっぷんさんはこっち側に来ちゃったの？」
アルルはたずねました。
「〝だいまおう〞の手下、ドッペルゲンガーの仕業っス」
「ドッペルゲンガー？」
おとうさんの図鑑で、そんな名前を見たコトがあります。確か、アルルでもドラゴンでもネズミさんでも、なんにでもソックリに化けてしまう、イジワルなモンスターです。
それと同時に、アルルはやっぱり！　と思いました。この〝かがみの国〞にも、もう〝だいまおう〞の手下がやってきているようです。

「アイツが、〝かがみの国〟の住人をみんなカガミの裏側（うらがわ）にとじこめてしまったんっス」
ちょっぷんさんがいいました。だから、アルルが〝かがみの国〟を歩いていたときにダレにも会わなかったのです。
「ねぇ、ココから出れないの……？」
〝だいまおう〟の手下が来てるなら、なんとかしてあげないと……！　それに、ボクの荷物やテノリゾウさんも取り返さなくっちゃ……！
そう思いながら、アルルはいいました。
「この国の王、ちょっぷんRサマならなんとかできるかもしれないっスが……。王様がいちばん最初にとじこめられてしまったし、この暗闇（くらやみ）じゃあ、ドコをどう探（さが）していいのやら……。ボクも、さんざん歩いてようやくキミを見つけたところっス」
「………」
ちょっぷんさんのハナシを聞きながら、アルルは暗闇のほうを見ます。確かに、この中を歩くのはとってもタイヘンそうです。ヘタをすると、スグに自分がドコにいるのか、どっちに進んでるのかがわからなくなってしまうでしょう。
「う〜ん……」
アルルは、考えこみました。ドッペルゲンガーさんをなんとかして、〝かがみの国〟のヒトたちをもとに戻してあげたいっていうのはイイんだケド、とにもかくにも、このカガミの裏側

から出ないコトにはおハナシになりません。
どうしよう……。
魔法(まほう)を使ってもダメだったし、ちょっぷんさんも出る方法を知らないし……。
と思い悩(なや)んでいると……、
「ぐ――――――――――」
ひたひたひたひたひたひたひた……。
暗闇(くらやみ)の向こうから、〝ふしぎなどうぶつ〟がやってきました。そのまま、アルルたちの前を通り過ぎていきます。
ひたひたひたひたひたひたひた……。
「…………」
ひたひたひたひたひたひたひた……。
あまりにトッゼンの出来事に、アルルは茫然(ぼうぜん)と〝ふしぎなどうぶつ〟の姿を眼で追います。
しばらくして、
「はっ!?」
と我(われ)にかえり、
「ま、待ってぇ!」
あわてて〝ふしぎなどうぶつ〟を追いかけました。

〝ふしぎなどうぶつ〟のあとについていけば、ゼッタイにナニかが起きる……！

そうカクシンして、アルルは暗闇の中をひたすら走ります。事実、〝おはなの国〟では、そのおかげで木人(もくじん)のおにいさんたちに会えたのです。

ひたひたひたひたひたひたひたひた……。

あいかわらず、〝ふしぎなどうぶつ〟のスピードは速そうにみえないのに、アルルはゼンゼンおいつけません。

ひたひたひたひたひたひたひたひた……。

追いかけはじめて、どれくらいの時間がたったでしょうか……？　真っ暗闇の中を、〝ふしぎなどうぶつ〟の後ろ姿だけを見て走りつづけたので、どれだけたったかなんて、見当もつきません。

やがて、〝ふしぎなどうぶつ〟の前のほうに、キラキラした光が見えてきました。アルルと〝ふしぎなどうぶつ〟が進むにつれ、その光はだんだんだんだんおっきくなってきます。

ひたひたひたひたひたひたひたひた……。

「あ……」

〝ふしぎなどうぶつ〟は、別に迷(まよ)う様子も見せずに、そのまま光の中へと歩いていってしまいました。まるで、「ココまでおいでよ」ってアルルを誘(さそ)っているかのように。

「…………」

アルルは立ち止まって、その光の穴を見つめました。アルルがこっち側に来たときの、あのおっきなカガミほどじゃないケド、アルルが通れるだけの大きさはじゅうぶんにあります。コレの光の中に入ったら、いったいドコに出るのでしょうか……？　もとの世界なのでしょうか……？　それとも、別なカガミの裏側なのでしょうか……？

「……………」

そうかといって、ココで迷っていてもしかたがありません。アルルはカクゴを決めて、

「えいっ！」

光の中に飛びこみました。その向こうは……、

「……！」

カガミでいっぱいの世界！　床も、壁も、天井も、みぃんなカガミでできています。後ろを見ると、いろんなカタチのカガミが組みあわさった壁の中に、さっきアルルが飛びこんだ光の穴くらいのカガミがあります。それを通ってきたのでしょう。

やった！　もとの世界に戻れたんだ……！

と心の中でよろこびかけた瞬間、

「戻ってきたのか……」

アルルにソックリだけど、もっともっと重くて、悪そうな声。

見ると、カガミでできた部屋の奥に、これまたカガミでできたイスがあって、そこにもうひとりのアルルが座っています。ちなみにイスは、とってもリッパで、豪華そう。どうやら、王様の玉座のようです。

「ぱおー！」

もうひとりのアルルに握られているテノリゾウさんが、こっちのアルルを見て、よろこびの鳴き声をあげました。ニセモノといっしょにいるのが、イヤでイヤでしょうがなかった、ってカンジです。

「どうやって戻ったか知らないが、運のいいヤツだ」

ニセモノのアルル――ドッペルゲンガーさんが、イスから立ちながらいいました。そのイスのわきに、リュックが置かれています。ちなみに、あの〝ふしぎなどうぶつ〟の姿はもうありません。また、ドコかに行ってしまったようです。

「テノリゾウさんとリュックを返して！」

ホンモノのアルルはいいました。

「イヤだね」

ニヤリ、と笑ってドッペルゲンガーさんが応えます。

「どうして？」

「〝かがみの国〟の連中を、カガミの裏側にとじこめたごほうびを〝だいまおう〟さまからも

らったのだ。スキなコトをなんでもしていいっていうお許しをな。だから、オレはお前といれかわったのだ」

「……？」

「お前になりすまして、お前のウチに帰り、そして、お前の世界をメチャクチャにしてやるのだぁっ！」

「ええっ!?」

冗談ではありません。そんなコトをしたら、ドッペルゲンガーのいうとおり、まさにメチャクチャになってしまいます。アルルのままならそれほどでもないでしょうが、もし、あのガイコツ魔導師みたいなモノに化けられちゃったら……。

「そんなコトはさせないぞ！　ファイヤー！」

ゴォッ！

「あまいな。ファイヤー！」

ゴォッ！

ふたりのアルルは、同時に呪文を唱えました。お互いの手のひらから発射された火の玉が、部屋の真ん中でぶつかりあい、そして消えます。

「アイスストーム！」

「アイスストーム！」

ヒュゴォォォォッ！

これも結果は同じ。

「ライトニング！」

「ライトニング！」

ピシャア――――ンッ！

やっぱり、これも結果は同じ。

「ムダだムダだ」

ドッペルゲンガーさんがいいました。

「オレとお前はまったく同じチカラを持ってるんだ、戦ってもムダだぞ。よくて一生戦いつづけるハメになるし、悪ければ相打ち(あいうち)だ」

「………」

そういえばそうです。最悪のバアイ相打ちになっても、ドッペルゲンガーさんがアルルのお家(うち)に行くよりはマシですが、それはちょっと……、ってカンジです。いくらなんでも、まだ死にたくはないし……。

ナニか、考えないと……。

「………」

ドッペルゲンガーさんをじっと見つめながら、アルルは考えました。

お互(たが)いにおんなじチカラを持ってるなら、そのバランスを崩(くず)すようなナニかがあれば……。たとえば、こっちが強くなるアイテムを持ってるとか、相手が弱くなるアイテムを持ってるとか……。

「ぱおー！」

「こ、こらっ！　暴(あば)れるな！」

「……！」

そうだ！　テノリゾウさんだ！

鳴き声を聞いて、アルルは思い立ちました。テノリゾウさんにお願いすれば、なんとかなるかもしれない……！

モンダイは、そのテノリゾウさんがドッペルゲンガーさんの手の中にあるというコト。まずは、それをなんとかしなくては……。

かといって、普通(ふつう)に呪文(じゅもん)を唱(とな)えたのでは、さっきみたいにおんなじ呪文で消されてしまうのはカクジツです。なにか、普通でない方法を考えないと……。

「どうした、アルル……？　オレを止めるんじゃなかったのか？」

「………」

普通でないコト……。普通でないコト……。

ドッペルゲンガーさんのコトバをムシして、アルルはあたりを見回しながら考えます。

「……！」

ふと、カガミの裏側にとじこめられたときのコトを思い出しました。なんとか脱出しようとして、いっぱい呪文を唱えたときのコトを。

あのとき、ファイヤーやアイスストームは窓に当たって消えただけなのに、ライトニングだけはこっちに跳ね返ってきたのでした。もしかしたら、こっちの世界でもおんなじコトができるかも……！

「止めないんなら、オレは行かせてもらうぞ。どうせ、お前はこの〝かがみの国〟から出る方法など知るまい」

「待って！　ライトニング！」

ピシャァ――――ンッ！

アルルは、天井近くの壁に向けて呪文を唱えました。イナズマがキラキラ光る壁を目指して飛んでいきます。

「おいおい、ドコに向かって唱えてるんだ？」

と、嘲笑うようにドッペルゲンガーさんがいった瞬間！

パキィ――ンッ！

カガミの壁に当たったイナズマが、イキナリ進路を変えました。そのまま……、バシィッ！

「うあっ！」

テノリゾウさんを握る、ドッペルゲンガーさんの左手に大命中！

「ぱおー」

ブジにテノリゾウさんは脱出しました。そのまま、リュックを長いおハナでつかんで、ズルズルとひきずりながらアルルのところにやってきます。

「し、しまった……！」

「これでボクのほうがちょっとだけ強くなったよ。それでも戦うの？」

リュックを背負い、テノリゾウさんを頭にのせて、アルルはいいました。実は、テノリゾウさんはとっても強いのです。〃かがみの国〃に落ちる前のおしゃべりで、アルルはそれを知っています。

「くそっ……！」

ギリギリギリ……、とドッペルゲンガーさんはハガミします。

「〃かがみの国〃のヒトたちをもとにもどして、もうゼッタイにこんなコトしないって約束し

てくれたら、逃がしてあげるよ。どうする?」
「ぬぅ……」
パチン!
しかたない、といったふうに、ドッペルゲンガーさんは指を鳴らしました。
すると……、
「……!」
さっきまでアルルとドッペルゲンガーさんたちを映していた、部屋中のカガミというカガミに、ちょっぷんさんの顔があらわれます。
そして、水の中から浮かんでくるように、たっくさんのちょっぷんさんがワラワラワラと出てきました。どうやら、ドッペルゲンガーさんがアルルのいうとおりにしてくれたようです。
「くっそぉ……! アルル!」
ビシィッ!
トツゼン、ドッペルゲンガーさんがアルルを指差しました。
「このコトは、ゼッタイ〝だいまおうさま〟にいいつけてやるからな! おぼえてろよっ!!」
どろん!
はきすてるようにいって、ドッペルゲンガーさんはケムリのように姿を消しました。
まぁとにかく、これにてイッケンラクチャク!

……といいたいトコロだケド。

ワラワラワラワラワラワラワラワラワラワラワラワラワラワラワラ……。

ざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわ……。

いま、部屋の中はトンデモナイ数のちょっぷんさんでごったがえしています。しかも、カガミにその様子が映っているので、ますますたくさんに見えます。ちょっち、コワイかんじ……。

〃かがみの国〃のヒトたちは、ミンナこんな格好をしてるのでしょうか……？　ワリと、早くこの国から出たい気分……。

「…………」

そんな、アヤシイ雰囲気にとまどいながらも、アルルは、あるヒトを探してキョロキョロしました。

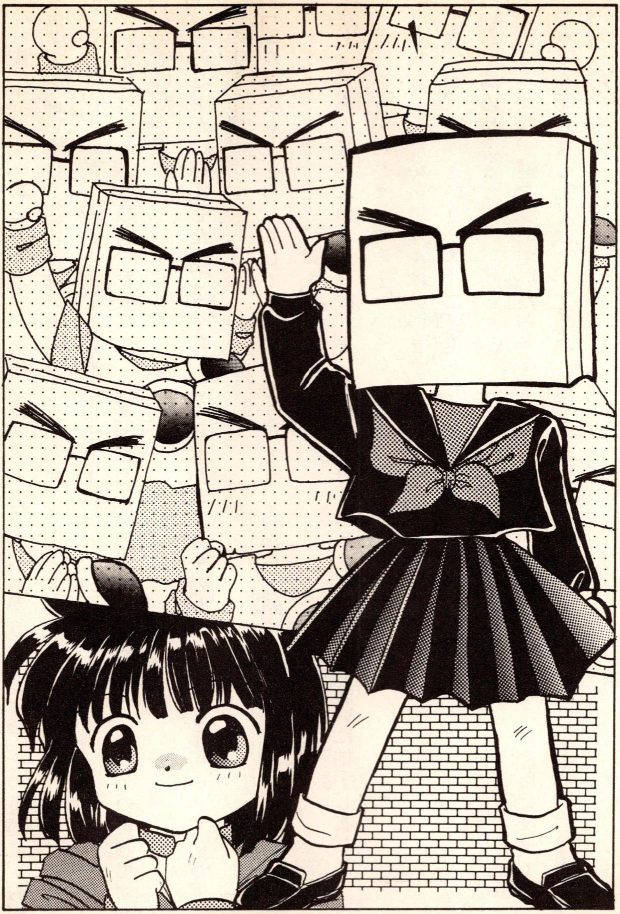
ドコいっちゃったんだろ……？　ハンカチかしてくれたちょっぷんさん……。

ヒトコトお礼をいいたいのに……。

といっても、みんながミンナおんなじ格好では、ダレが誰やらわかりません。誰もアルルに声をかけてこないってコトは、どうやら、この部屋にはいないようです。どこか別の部屋にいるのでしょうか……？

「アルルちゃん」

トツゼン、後ろから声がしました。見ると、ちょっぷんさんが立っています。



一瞬、ハンカチのヒトかな？　と思ったケド、どうやらちがうようです。その証拠に、服がゼンゼン違います。紺色の女のコ用セーラー服に、それとおんなじ色のミニスカート。アルルがいる部屋の中で、それと同じ格好をしてるヒトはほかにいません。

「わたしは〝かがみの国〟を治める、ちょっぷんRっス。キミの活躍は、カガミの裏側でずっと見ていたっスよ」

そのヒトがいいました。どうやら、このヒトがハンカチのちょっぷんさんがいっていた、王様のようです。

「この国をもとどおりにしてくれて、ありがとう。心から感謝するっス」

わ〜〜〜〜〜〜〜〜……。ぱちぱちぱち……。

ちょっぷんRさんのコトバに、まわりにいるほかのヒトたちがいっせいに拍手しました。

「ど、どういたしまして……」

もじもじしながらアルルはいいます。ちょっち、テレくさいカンジ。

「ナニか、望みをいうっス。ご褒美として、それをかなえてあげるっスよ」

「あ、あのね……」

とアルルは、道を歩いていたらイキナリ穴に落っこちて、この〝かがみの国〟に来てしまったコトを話しました。〝てんしさま〟に会うために、お家に帰るために旅をしてるコトも……。

「ふ〜む……」

ふっとイマユゲをよせて、考えこむようにちょっぷんRさんがいいます。
「多分、キミは、運悪くこの国の空気取り入れ口に落っこちてしまったっスね。なら、コレをあげるっス」
といって王様が懐から取り出したモノは、魔法のアイテムぽい巻物。
「これは……？」
「ワープの巻物っス。コレをひらいて『ワープ』と唱えれば、一気に地上まで行けるっスよ。1回使ったら、巻物は消えてしまうっスが」
「どうもありがとう！」
「いやいや、コレくらいならお安い御用っス。サスガに、キミのお家に帰したり、〝てんしさま〟のところに連れていってあげたりはできないっスが……」
ちょっぷんRさんはいいますが、そのキモチだけでじゅうぶんってカンジです。
「そうそう、〝てんしさま〟のトコロに行くなら、コレを持ってくとイイっス」
今度は、ちょっぷんRさんはおっきな葉っぱでくるんだ、ひとかたまりのお肉をアルルに渡しました。けっこうプリプリしてて、焼いたりするとおいしそうです。
「このお肉は……？」
「コレは〝知恵のお肉〟というっス。あのドッペルゲンガーを出し抜いた、キミの賢さをたたえるものと思ってくれっス。その知性、機転を忘れなければ、かならず〝てんしさま〟に会え

るっスよ。がんばるっス」
「うん！」
元気にうなずいて、アルルは〝知恵のお肉〟をリュックにしまいました。あと、心残りはひとつだけ……。
「………」
「どうしたっス？」
アルルがもじもじしていると、ちょっぷんRさんがたずねます。
「あ、あのね……。ボクがカガミの裏側に来ちゃって泣いてるときに、ハンカチをかしてくれたちょっぷんさんがいたの。それで、せっかくもとに戻ったから、『ありがとう』って……」
「キミは、とってもやさしいコなんっスね」
身体のワリにおっきな手で、王様はアルルの頭をナデナデしました。
「わかったっス。それは、わたしのほうからそいつにいっておくっスよ。だから、キミは安心して旅をつづけるっス」
「うん！　ありがとう！」
アルルがいうと、まわりのちょっぷんさんたちが、「がんばれ！」とか「負けるな！」とか、口々に応援してくれます。
王様のちょっぷんRさんをはじめ、みんなにあいさつしてから、アルルはもらった巻物をひ

らきました。おとうさんの書斎で見た、ムツカシイ魔法文字がずらりとならんでいます。まぁ、もう使い方はわかってるので、読めなくてもモンダイはないけれど。

ちょっと道草くっちゃったケド、どうやら、ナントカ旅をつづけられそうです。〝知恵のお肉〟っていう、新しいアイテムももらったし、なんだか、またちょっち強くなったような気がします。

ひとつだけシンパイなのは、〝だいまおう〟にいいつけるとかいって消えていった、ドッペルゲンガーさんのコト。とっても強いモンスターとかが、これから先に出てこなければイイんだけれど……。

まぁ、そんなコトをココで悩んでてもしかたがありません。旅をつづけなければおハナシになりませんからね。

アルルは、おっきな声で呪文を唱えました……。

「ワープ!!」

# だんすの国

てっくてっく、てっくてっく……。

ブジにワープの巻物(まきもの)で地上に戻(もど)ったアルルは、お陽(ひ)サマに向かってずぅっとのびる道を、まるでハイキングのような気分で歩きつづけました。風さんはサワヤカだし、お陽サマはポカポカしてキモチいいし、思わずハナ歌まで出ちゃいそうです。

もちろん、テノリゾウさんもいっしょ。だけど、もうおしゃべりしながら歩いたりはしません。また穴(あな)なんかに落っこっちゃったりしたら、タイヘンですからね。

てっくてっく、てっくてっく……。

〝てんしさま〟のトコロへと向かう——はずの——道のまわりには、あいかわらず、草原が広がっています。といっても、アルルよりも背の高い草ばかりなので、とおくのほうまで見渡(みわた)すことはできませんが。あまりヒトが住んでいないからなのでしょうか……? 〝おかねの国〟を出たあたり、〝かがみの国〟から戻ってきたあたりは、まだ草の背も低くて、遠くのほうにチョコチョコとお家やナニかが見えてたんだけれど。



てっくてっく、てっくてっく……。

まるで、草と土でできた廊下を歩いているようです。

〝だいまおう〟の手下がイキナリ出てきて、アルルに襲いかかるには、絶好の場所といえるかもしれません。

「………」

てっくてっく、てっくてっく……。

ふと、アルルはドッペルゲンガーさんのコトが気になりだしました。だけど、〝おはなの国〟を出たばかりのときみたいに、歩くリズムが落ちたりはしません。おとうさんが帰ってこなくなってイジケてばかりの弱虫泣き虫アルルも、この旅でうんと強くなりました。

ドッペルゲンガーさん、もう〝だいまおう〟にいいつけちゃったかなぁ……。

アルルは思いました。なんだか、大事なモノをイタズラして壊してしまったところを、お友だちに見つかってしまったときのようです。「い〜けないんだ、いけないんだ。おかあさんにいってやろ」といって、お友だちが去ってしまうパターンです。

いつも、アルルはいいつけるより、いいつけられるほうでした。「ヒトのコトをすぐ告げ口したり、悪口をいったりするような心の狭い人間にはなるなよ」と、おとうさんにいわれていましたからね。イタズラをいいつけるよりも、イタズラして怒られたほうがマシです。

まぁ、それはともかく……。

ドッペルゲンガーさんが〝だいまおう〟にアルルのコトを知らせたとしたら、アルルとしては気をつけなければなりません。いままでは、ドコかの国にアルルが行くと、そこに〝だいまおう〟の手下がいた、ってパターンでした。だけど今度からは、アルルを狙って〝だいまおう〟の手下がやってくるかもしれません。〝だいまおう〟本人がやってくるとか……。いや、サスガにそれはないか……。〝だいまおう〟には、この〝おとぎの国〟を支配するという目的があるワケだし、アルルひとりにかまってるヒマはないでしょうしね。……だといいケド。

「………」

てっくてっく、てっくてっく……。

そんなコトを頭の中でぐるんぐるんさせながら、アルルは歩きつづけました。ちなみに、テノリゾウさんはリュックの中でおひるね中。

「………」

てっくてっく、てっくてっく……。

〝だいまおう〟の手下かぁ……。今度はどんなヒトがでてくるのかなぁ……。強いヒトかなぁ、こわいヒトかなぁ……。ちょっちイヤだなぁ……。あんまり戦いたくないなぁ……。それだけ〝てんしさま〟のトコロに行くのが遅くなるワケだし……。

この旅で、アルルはいろんなコトをベンキョーしたし、いろんなイミで強くなりました。ゼッタイにくじけない、負けない心を持つようになりました。

魔力がパワーアップして、ファイヤー、アイスストーム、ライトニングが使えるようになりました。

ヒトに親切にしたら、必ず自分にもいいコトがあるんだ、と身をもって知りました。

強いモンスターに、タダ正面からぶつかっていくだけではダメで、頭——知恵をはたらかせてやっつける方法もあるんだというコトを知りました。

だけど、アレコレとウジウジ考えこむクセが、どうやらまだ残っているようです。これまでナントカなったんだから、これからもナントカなるよ、そう思ったコトでしょう。

ムカシの元気いっぱいアルルなら、こんなふうにクヨクヨしたりはしません。

だけどいまは、まだちょっぴり弱虫のアルル。草の中から、いまにも〝だいまおう〟の手下が襲いかかってくるんじゃないかって、ちょっちドキドキしながらお陽サマのほう目指して歩きます。

「…………」

てっくてっく、てっくてっく……。

ドドン！

「……!?」

トッゼン、おっきな音がどこからか聞こえてきました。ドキッ!! と心の中で驚きつつ、ア

ルルは立ち止まってキョロキョロします。誰かがタイコを鳴らしたような音です。

ぴ〜ひゃらら……。

また聞こえてきました。だけど今度は、おっきな音じゃなくて、笛かなにかのようです。

「……？」

ひゃらりら〜……。

と、また笛の音。

いったい、ダレが、ドコで、どんなコトをしてるのでしょうか……？　楽器を鳴らしてる、っていうのはだいたいわかるんだケド……。

ドドンガド〜〜〜ン!!

「……！」

だんだん、方向がわかってきました。どうやら、道を外れた草むらの中のほうから聞こえるようです。だけど、草の背がアルルよりも高いので、ちょっと見えません。

「ぱお〜」

ガサゴソガサゴソ……。

背中のリュックが、もぞもぞしました。おひるねから、テノリゾウさんが覚めたようです。

「ぱおー」

アルルがリュックから出してあげると、テノリゾウさんは音が聞こえてきたほうを差して鳴

きました。
「あっちに行きたいの？」
「ぱおー」
行きたい！　っていうふうに、テノリゾウさんがうなずきます。
「う〜ん……」
アルルは、行こうかどうしようか迷いました。できるなら、もう寄り道はしたくありません。それだけ〝てんしさま〟に会うのが、お家に帰るのが遅くなるってコトだし……。それに、この〝おとぎの国〟に落っこちて、もうだいぶ時間がたっているはずです。お陽サマがいつ沈んでも、おかしくありません。まだまだ、お空の真ん中にいるにはいるケド……。
やっぱり、お陽サマが暮れる前にお家に帰らないと……。
ふと、アルルの心の中に、アセリが出始めました。いままで、あんまり時間のコトを気にせずに旅をしてきたケド、ここにきて、はじめてそれを感じるようになりました。
お家に帰るのが、夜おそくとか、次の日になっちゃうとしたら、おかあさんがどんなに心配することか……。それに、夜になってもお外にいるのは、ちょっとコワイ。〝だいまおう〟のコトもあるし。だいたい、お外で夜をすごすなんて一度もしたコトありません。
「………」
どうしよう……。

「ぱおぱお」
アルルが悩んでいると、テノリゾウさんがまた鳴きました。「だいじょぶ、だいじょぶ。シンパイいらないよ」っていってるようです。
「……うん、わかった！」
と、アルルはカクゴを決めてうなずきました。せっかく、お友だちのテノリゾウさんが行きたいっていってるワケだし、アルルとしては、できるだけそれに応えてあげないと……！　それで帰りが遅くなっても大丈夫！　きっと、おかあさんはわかってくれます。
「行こう！」
「ぱおー！」
テノリゾウさんを頭に乗っけて、アルルは草むらの中に入りました。
ガサガサガサ……。
と草をかきわけかきわけしつつ進むと、やがて、ちょっとした広場に到着。アルルがいつも遊んでいたトコロほどではないけれど、けっこう広い原っぱです。
見ると、その真ん中に、木で造ったステージがあり、その上にダレかがいます。
おサカナの身体にニンゲンの手足をつけた〝すけとうだら〟。ヒツジさんみたいな角をはやして、腰から下がおウマさんかシカさんのような〝サテュロス〟。それから、赤いトンガリ帽子をかぶった、トンガリお耳の男のコ〝パノッティ〟。おとうさんの図鑑で見たコトのあるモ

ンスターたちばかりです。

ドドン！

ぴ〜ひゃらら。

ひゃらりら〜。

すけとうだらさんがタイコを叩くと、それにあわせてサテュロスさんとパノッティさんが横笛を吹きます。

どうやら、お祭りかなにかの練習をしているようです。

「オヤ……？」

すけとうだらさんが、アルルの姿に気がつきました。

「ぃよう！　まだ始まりの時間じゃないぜ。悪ぃが、そこで待っててくんな」

「始るって……ナニが？」

「なぁんだ、知らないのぉ？」

アルルがたずねると、パノッティさんがちょっちイジワルそうにいいます。

「ココは〝だんすの国〟だよ」

ちょっち眠そうなカンジの声で、サテュロスさんがいいました。

「今日は、月に1回のお祭りの日なんだ。夕方になったら、いろんなヒトたちが集まって、ミンナで踊るんだ。せっかくだから、キミもどう？」

「ぱおー！」
テノリゾウさんはうれしそうだけど、
「え……、でも……」
アルルはいいました。誘ってくれるのはうれしいケド、できるなら、やっぱり寄り道しないで〝てんしさま〟のトコロに行きたいし……。
「あ〰〰〰〰に〰〰〰〰？」
〝おはなの国〟で会ったスケアクロウさんみたいに、モノスゴイ迫力ですけとうだらさんはアルルをニラみました。
「ココまで来といて、踊らないってぇのか？」
「そりゃぁないよ」
「ボクたちなんかと踊るのは、イヤだっていうんだなー？　そうだろー？」
口々にサテュロスさんもパノッティさんもいいます。
「で、でも……、ボク、急いでお家に帰らなきゃ……」
「そんなコトは関係ねぇ！」
ぐぐっ！
とすけとうだらさんは、タイコのバチを握る右手にチカラをこめました。

「この〝だんすの国〟まで来て踊らないってぇのは、とてつもなく重大な犯罪だ！　どうしてもイヤってぇなら、そのバツとしてお前を食っちまうぞ!!」
「ええっ!?」
それは困ります。お家に帰るのが遅くなるのもイヤだけど、すけとうだらさんに食べられちゃって、帰れなくなるのはもっとイヤです。
「いっしょに踊ろうよ。ね？　とっても楽しいからさ」
「そーだそーだ！」
やさしくいうサテュロスさんを、パノッティさんが応援します。
「う、うん……」
アルルはうなずきました。こうなってしまっては、しかたがありません。すけとうだらさんに食べられてしまうより、寄り道するほうがマシです。
「よーし、オーケー！　始まるまでそこで座っててくんな」
すけとうだらさんがいうと、３人はまたタイコや笛の練習を始めました。
「…………」
アルルはステージの前にぺたんと座って、その練習をながめます。頭の上のテノリゾウさんは、とっても楽しそう。まだ練習だというのに、もう踊ってます。
テノリゾウさんが楽しいなら、それでいいか……。

アルルは思いました。
やがて、お陽サマがだんだん傾きはじめました。まるで、アルルが〝だんすの国〟に着くのを待っていたかのように。
お陽サマが、お空をオレンジ色にしながら西の地平線に隠れる頃、ひとり、またひとりとヒトが集まってきました。みんなみんな、おとうさんの図鑑で見たようなモンスターばかりです。ドラコケンタウロスさんとか、ハーピーさんとか、さそりまんさんとか、コカトリスさんとか、インキュバスさんとか、ファイヤーエレメントさんとか……。
ガヤガヤガヤ……、ざわざわざわ……。
ほどなくして、広場はモンスターたちでいっぱい！　いったいどれだけ集まったのか、アルルには数えきれません。
まわりはいつのまにか真っ暗になっていて、ステージのうえのかがり火が、広場を明るく照らしています。
深い深い紺色のお空には、いっぱいのお星サマと、お陽サマとバトンタッチしたまんまるのお月サマ。
「フィ――――ッシュ!!」
お――――っ!!

ステージの上のすけとうだらさんがおっきな声をだすと、集まったヒトたちがいっせいに応えました。いよいよ、お祭りの始まりのようです。

「今宵も集まってくれてサンキューベリーマッチ！　さあ、朝まで踊りまくるぜぇっ！」

おーーーーっ!!

「まず1曲めのナンバーは……！」

ぐぐっ！　と、すけとうだらさんはしばらくチカラをため、いいます。

「『灼熱のファイヤーダンス』だぁっ!!」

おおーーーーーーーっ!!

まだはじまったばかりだというのに、モノスゴイ盛り上がりです。

ドドン！

ひゃらら〜。

ひゃらり〜。

すけとうだらさん、パノッティさん、サテュロスさんは楽器をちょっと鳴らしたのち、

「レッツ！　ダーーーーンス!!」

曲を演奏しはじめました。リズムがよくって、とってもノリノリの曲です。

「……」

アルルは、まわりを見わたしました。みんなみんな、楽しそうに踊っています。もちろん、頭の上のテノリゾウさんも。

「オラオラァっ！　そこのおじょうちゃん！　ノリが悪いぜぇっ！」

ドンドコドンドコとタイコを叩きながら、アルルを指差して、すけとうだらさんがいいます。

もはや、広場にいるヒトたちで、踊っていないのはアルルだけのようです。ノリが悪いと怒られてもしかたがありません。

「……」

アルルは、そんな自分がはずかしくなってきました。それと同時に、なんだか身体がムズムズしてきます。

タンタンタンタン……！

いつのまにか、アルルは足でリズムを取っていました。それが、だんだん手や身体にも移動してきて……、

「……★」

やがて、リズムに任せて身体を動かし始めます。手を振り上げたり、左右にステップしてみたり……。

ダンスなんてアルルはまだよく知らないけれど、とにかく、リズムのままに身体を動かしま

した。

そんなダンスでも、ずっと踊っていると、だんだんだんだんホント楽しくなってきます。最初は、せっかく来たんだからなぁんてちょっち思ってたケド、もう、そんな考えはドコかに飛んでいってしまっています。ただひたすらに、みんなといっしょに踊ってる、すけとうだらさんたちの曲にあわせて踊るっていうのが、楽しくてしょうがないってカンジ。

とっても楽しくて、とってもキモチがよくって、とっても爽快です。

よくわからないケド、「ああ、みんなといっしょなんだ！　ひとりじゃないんだ！」っていうのがヒシヒシと感じられます。たとえ顔を知らなくても、出会ったばかりでも、お友だちとかじゃなくても、こうしていっしょの時間をすごすことができるのです。とってもスバラシイことのように、アルルは感じます。

そして、ひとりでウジウジ悩んでたりするのが、だんだんバカバカしくなってきました。世の中っていうモノは、なるようにしかならないのです。そう、おとうさんは、ドコかの賢者サマに教えてもらったといっていました。

そのコトバの本当のイミは、まだアルルは知らないけれど、〝だんすの国〟のみんなと踊っていて、ナントナクそれがわかったような気がします。

大丈夫だよね、なんとかなるよね。たとえお家に帰るのが遅くなっても、〝だいまおう〟の手下とかがやってきても……。



踊りながら、アルルは思いました。世の中、なんとかなるようにできているのです。ただし、なんとかしなければ、なんとかならないんだけれど……。
なんとかならなかったら、ボクがなんとかするもん！　大丈夫、いままでだってなんとかなってきたワケだし……。

「イェ――――イ！　今夜は最高だぜぇっ!!」

「お――――っ!!」

みんなといっしょに、アルルはすけとうだらさんのコトバに応えました。
もう、踊りのコトしか頭にありません。なんとかなるとか、ならないとか、そんなコトすら考えすらも、もういつのまにか消えてしまっています。
お祭りは、夜更けになってもずっとずっと続きました。みんな、そしてアルルも、疲れるコトなんてまったく知らないように踊りつづけます。その踊りにあわせて揺れる、かがり火やお月サマに照らされたカゲが、とってもステキで、とっても月影ナポリタンってカンジ。

「夜はこれからだ！　まだまだガンガンいくぜぇっ!!」

「おお――――っ!!」

アルルも、みんなも、一体になって叫びます。

踊りつづけていくうちに、やがて、東のお空が明るくなってきました。それといっしょに、アルルの頭の中は真っ白になってきて……。
「……はっ!?」
アルルは、トッゼンに眼が覚めました。
見ると、広場にはだぁれもいません。いままでのは、ゼンブ夢だったのでしょうか……?
と思ったけれども、どうやら違うようです。木で造られたステージの上で、すけとうだらさんやパノッティさん、サテュロスさんがぐぅぐぅと寝てるのがその証拠です。アルルのすぐわきには、テノリゾウさんも寝ています。
いつのまにか、お祭りは終わってしまったようです。
「ん〜……!」
サワヤカで、とっても爽快な気分で伸びをすると、お陽サマが昨日とおんなじ場所でアルルを見降ろしているのがわかります。このままそっちに向かって旅をつづければいいので、ちょっちラッキーなカンジ。
「ふわぁ〜あ……」
おっきなあくびとともに、すけとうだらさんも起きました。
「おはよう!」
「おう!」

アルルが元気にあいさつすると、すけとうだらさんも負けじと元気にあいさつ。
「もう行くのか？」
「うん、はやくお家に帰らなきゃ。おかあさんが心配するから」
「そうか、一晩もつきあわせて悪かったな」
「ううん、楽しかったよ！　とっても！」
「そういってくれると助かるぜ。……そうだ、お前にこれをやろう」
すけとうだらさんは、ハッパにくるんだ真っ赤(まっか)なふくじんづけをアルルに渡しました。
「これは、なぁに？」
「〝爽快(そうかい)さのふくじんづけ〟ってヤツだ。まぁ、オレたちからのお礼だと思ってくれ。なにかつらいコトがあったりしたら、これを見て、オレたちと楽しく踊(おど)ったコトを思い出すんだ。そうすれば、きっと乗りきれる」
「ありがとう！」
「じゃぁな。また来いよ、いっしょに踊ろうぜ！」
「うん！　バイバイ！　みんなによろしくね」
「おう！」
アルルは、〝爽快さのふくじんづけ〟と、まだ寝(ね)てるテノリゾウさんをリュックにいれて、すけとうだらさんに別れを告げました。

なんだか、いままでに味わったコトのない、ユカイツーカイな気分です。朝まで踊ってたので、ちょっぴり疲れ(つか)があるかなぁってカンジだけど。
まぁ、なんとかなるよ。
そう、自分の心にいいきかせて、アルルはまた旅立ちました……。

# つみきの国

「……!!」

ガガ――――ン!

ってカンジで、アルルは絶句。思わずそうしてしまうホド、それはそれはムゴイ光景が、アルルの眼の前に広がっていました。

〝だんすの国〟を出て、しばらく歩いたあとのコト。アルルより背の高かった草むらが、だんだん低くなり遠くまで見渡せるようになってきて、「また〝おかねの国〟みたいな街が近いのかな?」と思った拍子に、このアリサマです。アルルでなくても、そりゃぁ驚くというもの。

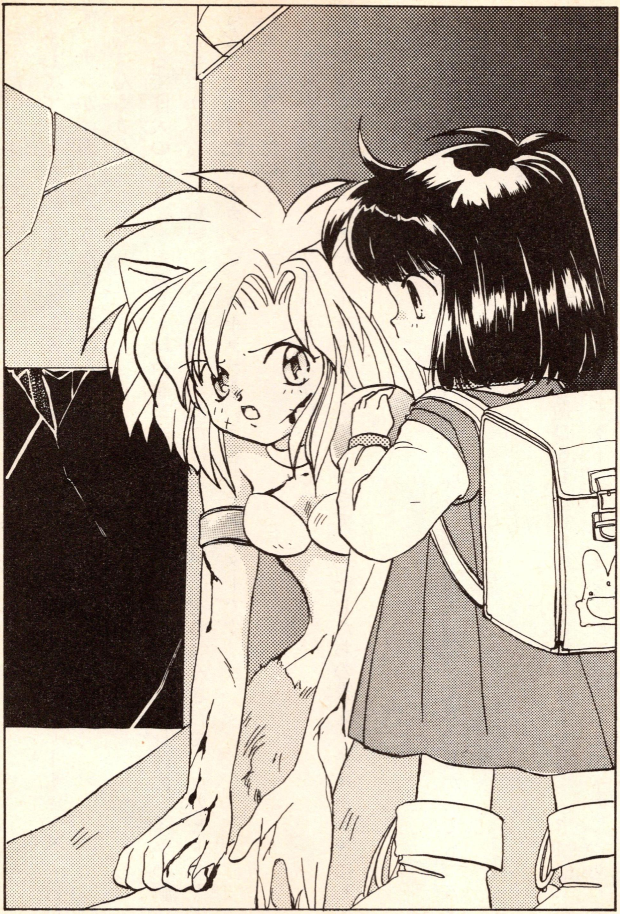
「………」

アルルはあたりを見回しました。平らにならされた広いはらっぱに、おっきなおっきなつみきのようなモノがたっくさん散らばっています。ピラミッド形や、真四角のモノ、長細いヤツ、まぁるい筒のようなモノ、アーチ形まであります。色も赤、青、黄色、緑、紫ととりどりです。

氷みたいにガチガチのヤツや、岩みたいなヤツ、透明なモノもあります。
よくよく見ると、それらは〝ぷよぷよ〟のようです。ゼリーみたいな透明感があって、おっきなクリクリっとした眼もついています。そのほとんどが、眼をくるくると回して〝ばたんきゅ〜〟してたり、自分じゃ起きあがれなくってうるうると涙を流してたりしてるケド。
ホントは、ぷよぷよはゼリーとおまんじゅうのアイノコみたいなモンスター。どうやら、そんなぷよぷよのカタチを変えて、つみきみたいにしてあるようです。
まさに、いまアルル——と頭の上のテノリゾウさんの眼の前に広がっている光景は、ぷよぷよのつみきがいっぱい入ったオモチャ箱を、ハデにひっくり返したってカンジ。
タダそれだけならば、ぷよぷよさんがちょっちカワイソーだけど、そぉんなにヒドイ光景には見えなかったコトでしょう。ぷよぷよつみきとおんなじように、たっくさんのモンスターが〝ばたんきゅ〜〟してなければ……。
あちこちでキズだらけのモンスターたちが眼を回していて、〝おはなの国〟よりもずっとずっとヒサンな状態です。また、〝だいまおう〟の手下のしわざでしょうか……？

「キャイ————ン！」

トツゼン、人影が叫び声をあげながら、アルルの前方から走ってきました。その人影はアルルのトコロまで来ると、ばたっ！　とつんのめるように倒れこんでしまいます。



「だ、だいじょうぶ!?」

あわててアルルは、しゃがみこんで声をかけました。よく見ると、このヒトもキズだらけです。ナニか、刃物のようなモノで斬られたみたい。

「くぅんくぅん」

まるで仔犬のように、そのヒトは声をあげました。キレイな女のヒトの身体に、イヌの胴体。というより、ちょっちザンコクないいかただけど、イヌの頭をちょんぎって、女のヒトの上半身をくっつけたってカンジ。スキュラという名のモンスターです。

「ど、どうしたの……?」

アルルがたずねると、スキュラさんがいいました。

「ブレードビーストっていうモンスターがやってきて、わたしたちの家をメチャクチャにしてるのぉ……」

「家……?」

「あの、ぷよぷよつみきで造った家なのぉ。ココは〝つみきの国〟。なんでもかんでもつみきでできてるのよぉ」

「へぇ～、そうなんだ」

いいながら、アルルは、お家でつみき遊びをしたときのコトを思いました。つみきで造ったお城とかに住んでみたいなぁって思ってたケド、それがホントにできるなんて、ちょっちウラ

ヤマシイかも……。
そうはいっても、こんなにメチャクチャではウラヤマシイもなにもありません。
「ブレードビーストさんって、もしかして〝だいまおう〟の……？」
アルルはたずねました。
「うん」
「やっぱり……」
どうやら、アルルのコトはまだ〝だいまおう〟の耳に届いていないようです。それとも、ムシしてるのでしょうか……？　どちらにしても、ちょっと安心。
でも、それと同時に、怒りがふつふつと沸いてきます。〝つみきの国〟をこんなにメチャクチャにして、それに、街のヒトビトにケガさせるなんて許せない……！
「お、お願いがあるのぉ」
すがりつくように、スキュラさんはいいました。
「ケットシーちゃんたちがアブナイのぉ。わたしのコトはいいから、ケットシーちゃんたちを助けて欲しいのぉ」
「うん、わかった！」
いままでみたいに、「え……、でも……」なぁんて、もういったりしません。アルルは元気よく引き受けました。

確かに、〝だいまおう〟手下とまた戦うのはコワイけど、パワーアップした魔法と〝魔力のタマネギ〟があるし、〝知恵のお肉〟のコトを考えれば、きっとグッドな作戦も思いつくでしょう。それに〝親切さのジャガイモ〟や〝爽快さのふくじんづけ〟が、きっとイイ方向になんとかしてくれるだろうし、〝負けないニンジン〟を持ってるんだから、ゼッタイに負けやしません。

ダッ！

アルルは、街の中に向かってかけだしました。すると……、

「にゃぁぁん！」

「にゃぁぁん！」

ドコからか、ネコの鳴き声が聞こえてきます。アルルはあたりを見渡し、やがてそれを発見。つみきで造られた高い高い塔のてっぺんに、2匹のシャムネコがいます。あれが、寝るときも、ゴハンを食べるときも、遊ぶときも、いつもいっしょのモンスター、ふたごのケットシーさんたちです。

「助けてにゃん！」

「助けてにゃん！」

ケットシーさんたちが、いっしょうけんめいに叫びます。タダ単に塔があまりにも高くて、コワイから降りられない、というワケではありません。塔がいまにも崩れそうなので、降りる

に降りれなくなってしまっているのです。

その塔は、細長い四角のヤツやまぁるい筒や、氷みたいな固ぷよや岩ぷよのつみきを、とってもたかぁくつんだモノで、ケットシーさんたちがほんの少しでも動くたびに、グラグラします。しかもそれが、崩れるか崩れないかの、ギリギリのところでつまれているのです。つみきのどれかが、あとほんのちょっとズレただけで、ゼンブがガラガラと崩れてしまうでしょう。といっても、このままにしていてもいずれ崩れてしまうのは眼に見えています。

「コワイにゃん！」

「コワイにゃん！」

どうやらふたごのケットシーさんたちは、暴れるブレードビーストさんから逃げてるウチに、この塔に取り残されてしまったようです。しかも、まわりのつみきがどんどん崩されていく衝撃で、少しずつ、少しずつ塔のつみきがズレていき、いまのような状態になってしまったみたいです。

ラッキーなコトに、ドコかほかのところで暴れているらしく、ブレードビーストさんはココにはいません。そのウチにやって来てしまうでしょうけれど……。

「…………」

だけど、サスガのアルルも手のだしようがありません。なにしろ、ちょっとさわったダケで崩れてしまいそうなのですから。登ろうと塔に手をかけた瞬間にアウトでしょう。

塔（とう）の高さは、お陽（ひ）サマに届（とど）きそうなほどあります。いくらネコは身が軽いといっても、そこから落ちてブジにすむはずがありません。なにか、クッションになるモノがあればいいんだけれど、〝つみきの国〟だけに、まわりはぷよぷよのつみきばっかりです。

「……！」

ふと、アルルはある作戦を思いつきました。それは……、

自分の身体（からだ）をクッションにする――！

つまり、落っこちてくるケットシーさんたちを、アルルが受けとめてしまうという作戦です。よく、木に登ったものの降（お）りれなくなって、おとうさんが飛び降りたアルルをがっちりキャッチしてくれたコトを思い出してのモノです。

とはいえ、おとうさんならまだしも、アルルはまだちっちゃい女のコ。そんなアルルがクッションになったら、ケットシーさんたちは多少のケガですむかもしれないけれど、アルルのほうがタイヘンです。しかも、落ちてくるのはケットシーさんたちだけじゃありません。崩れたつみきまでアルルめがけて落っこちてくるでしょう。

もしそうなったら、アルルは、よくて大ケガ、悪くて……。

「………」

ぶるるっ。

最悪のバアイを想像（そうぞう）して、アルルはふるえました。ケットシーさんたちを助けてあげたいの

はヤマヤマだけど、そうしたおかげで、この旅どころかアルルの人生が終わってしまうのはとてもイヤです。でもこのままでは、アルルの代わりにふたごのケットシーさんたちが……。

「………」

どうしよう……。

と、塔を前にしてアルルが悩んでいると、

シュゴォォォォッ！

トッゼン、アルルと塔のあいだに、ちいさな竜巻がまきおこりました。

「ひゅるりらぁっ！」

竜巻がやむと同時に、そこから、両手に鎌を持ったイタチのモンスターが出現！　どうやら、このヒトがブレードビーストさんのようです。

「あとは、この塔を壊すだけだりら……」

ブレードビーストさんは、アルルには眼もくれず、ずんずんと塔に迫ります。

「にゃぁぁぁっ！　イヤだにゃん！」

「イヤだにゃん！」

「スグらくにしてやるりら……」

「ま、待って……！」

アルルがいうと、ブレードビーストさんはジロリと振りむきました。
「お前はなんだりら……？」
ブレードビーストさんはいいますが、なんだか、眼のピントがあっていません。アルルのほうを向いてはいるんだケド、ずっとずっと遠くを見てるようです。しゃべりかたもなんとなくぼぉっとしてて、「起きてる？」って思わず聞きたくなるようなカンジ。
「ジャマするなりら……」
「つみきの塔を壊しちゃダメ！」
とアルル。ふたごのケットシーさんたちを助け出す方法は、まだ思いついてないケド、このまま壊されちゃうよりはマシです。なにか思いつくまで、なんとか時間をかせがないと……！
「どうしてもっていうんなら、ボクと戦って勝ってからにして！」
「ことわるりら……」
「ど、どうして？」
「わたしは〝だいまおう〟さまのいいつけで、この〝つみきの国〟を破壊しなければならないんだりら……。あともう少しで終わるから、そのあとでいくらでも相手してやるりら……」
「そ、それじゃぁ、ふたごのケットシーさんたちが……！」
「ひゅるりらぁっ！」

ぎゅるるっ！

アルルのコトバに耳をかさず、ブレードビーストさんはトツゼン、コマのようにまわりだしました。そして、だんだんだんだん速くなってきて……、

シュゴォォォォォォォォォッ！

さっきとおんなじ竜巻（たつまき）に変身！

「あ……！」

とアルルが思ったときにはもう遅（おそ）く、竜巻はモノスゴイ勢いで塔に向かって突進（とっしん）します。

パッカ――――ン!!

ヤケに軽い音をたてて、塔のイチバン下のつみきが竜巻に弾（はじ）き飛ばされました。つぎの瞬間（しゅんかん）、バランスを失った塔が、崩（くず）れはじめます。

「にゃぁぁぁっ！」

「にゃぁぁぁっ！」

そして、足場をなくしたケットシーさんたちが、地面に向かってまっさかさまに……！

「………」

そんな様子が、なんだかスローモーションなカンジで、アルルの眼に飛びこんできます。落

っこちるケットシーさんたちのわきで、跳ね飛ばされたつみきが、クルクルとお空を舞っています。バランスを崩した塔のつみきが、うえから順番にケットシーさんたちのあとを追います。このままでは、ケットシーさんたちは地面にゲキトツしたうえに、つみきの下敷きになってしまうでしょう……。

「…………」

アルルは、ケットシーさんたちを見つめたまま、リュックと、頭の上のテノリゾウさんを地面にそっと降ろしました。そして、崩れる塔に向かって、ダッシュ！

つみきの塔が崩された瞬間に、アルルのカクゴは決まりました。

ケットシーさんたちを助けるんだ！　おっきなつみきにツブされたって、かまうもんか。いままでだって、何度も死ぬようなメにあってるんだ。いまさら、自分の命を惜しがってどうするの？　いや、ホントは惜しいケド……。おとうさんだって、自分の命をかけてガイコツ魔導師を倒したんだ！　騎士さんたちを守ったんだ！　ココでケットシーさんを助けないコは、おとうさんのコじゃないよ！

いま、アルルの心の中は、そんなキモチでいっぱいです。ケットシーさんたちを助けるために、心のすみっこで眠っていたアルルの勇気が目覚めたのです。

「にゃぁぁあっ！」

「にゃぁぁあっ！」

がしっ！

落ちてくるケットシーさんたちを、アルルはだっこするようにがっちりキャッチ！

「うっ……！」

その途端に、モノスゴイ衝撃がアルルに襲いかかります。だけど、このままケットシーさんたちをうえにして倒れてしまったら、クッションになったイミがありません。つぎにふってくるのはおっきなおっきなぷよぷよつみきなのですから。

「……っ！」

思いっきりふんばって衝撃にたえ、アルルはケットシーさんたちに覆いかぶさるように倒れこみました。そして、カメさんのように身体をまるめます。

ガラガラガラガラガラガラガラガラ……!!

そんなアルル目掛けて、崩れた塔のつみきが容赦なくふりそそぎます。

ガッチ―――――ンッ！

「……!!」

イキナリ、アルルの頭にモノスゴイ衝撃が走り、その瞬間にアルルの意識はプッツリ切れてしまいました……。

「……はっ!?」
つぎに眼をあけたときに広がっていたのは、真っ青なお空と、ポカポカのお陽サマ。
もしかして、天国……?
とアルルが思っていると、誰かが心配そうな顔でアルルをのぞきこみました。ふたごのケットシーさんたちと、テノリゾウさんです。
「よかった、眼を覚ましたみたいだにゃん」
「みたいだにゃん」
「ぱおー」
眼をあけたアルルを見て、3人はうれしそうにいいました。
「ぼ、ボク、生きてるの……?」
いいながら、アルルは身体を起こしました。すると、ケットシーさんたちの後ろに、ブレードビーストさんがいるのが見えます。
「あ……! ケットシーさんたち、後ろに……!」
「大丈夫だにゃん。このヒトがキミを助けてくれたんだにゃん」
「くれたんだにゃん」
「ええっ!? ど、どうして……?」
「わたしは、眼が覚めたんだりら」

ブレードビーストさんはいいました。
「キミの、自分を犠牲にする勇気を見て、〝だいまおう〟の術が解けたんだりら」
「どういうコト……？」
「実は、わたしは〝てんしさま〟のしもべなんだりら。だけど、〝だいまおう〟に術をかけられて、手下にされていたんだりら」
「そ、そうなの……!? じゃ、じゃあ、〝てんしさま〟は……？」
「残念ながら、〝だいまおう〟につかまってしまっているりら」

「ええ――っ!?」

アルルは、思わず飛び上がるほどに驚きました。
なんだか、とてもタイヘンなコトになっています。〝てんしさま〟が〝だいまおう〟につかまってしまってるってコトは、まず、〝だいまおう〟をなんとかしなきゃならないというコトです。
「キミ、名前はなんていうりら？」
「アルル」
「もしかして、アルルちゃんは〝てんしさま〟に会いたいと思ってるりらか？」
「う、うん……」

「わたしも〝てんしさま〟をお助けせねばならないりらし……。よし！　いっしょに〝だいまおう〟をやっつけに行こうりら」
「ほ、ホント!?」
「その前に、わたしのほかに〝てんしさま〟のしもべがもうひとりいるりら。それを探さなければならないりら。〝だいまおう〟はとてつもなく強いからりらな」
「………」
「悪いりらが、先に行っててくれないりらか？　もうひとりのしもべを探したら、スグに追いつくりらから」
「う、うん……」
「大丈夫、ケットシーを助けたあの勇気があれば、〝だいまおう〟なんかには負けないりら。キミがきてくれたほうが、わたしとしても心強いりら」
「うん、わかった！」
「アルルちゃん、これをあげるにゃぁ」
「あげるにゃぁ」
いいながら、ふたごのケットシーさんたちが、ナニかをアルルにさしだしました。茶色い、チョコレートのようなモノです。でも、ニオイはカレーのようです。
「これは〝勇気のルー〟だにゃん。命をかけてボクたちを助けてくれたお礼だにゃん」

「お礼だにゃん」
「ありがとう！」
「〝だいまおう〟をやっつけられるように、ココで祈ってるにゃん。がんばってにゃん」
「がんばってにゃん」
「うん！」
アルルは、〝勇気のルー〟を入れて、リュックを背負いました。ウィッチさんにもらったときより、うんと重くなっています。つまりは、それだけいろんなケイケンをしたってコトです。もう、ついこないだの弱虫泣き虫アルルはいません。いるのは、負けない心と、強い魔力と、優しい親切さと、賢い知恵と、明るい爽快さと、リッパな勇気をもった、元気いっぱいアルルです。
「じゃあ、ブレードビーストさん、ボク先に行ってるからね」
「うん、必ず追いつくりら」
「ケットシーさん、バイバイ」
「バイバイだにゃん」
「バイバイだにゃん」
あいさつをすませたアルルは、テノリゾウさんを頭に乗っけて、またお陽サマに向かって歩き出しました。

どうやらこの旅は、ひとすじなわでは終わらないようです。ドッペルゲンガーさんのコトもあるし、〝だいまおう〟との戦いはさけられそうにありません。でも、ブレードビーストさんやテノリゾウさんっていう強い味方もいるし、きっと、なんとかなるでしょう。

〝だいまおう〟をやっつけて、〝てんしさま〟を助ければ、メチャクチャになりかけている〝おとぎの国〟ももとにもどるだろうし、アルルもようやくお家に帰れるというモノです。

ボク、負けないもんね！

おとうさんがいなくなってからというもの、うつむきがちだった顔も、いまはキッとあげて、アルルは歩きつづけました……。

# おかしの国

ぷぅ～ん……。

〝つみきの国〟を出て、草原の一本道をお陽サマに向かって歩く、アルルのちっちゃなおハナに、なんだか甘いニオイが飛びこんできました。お砂糖、ハチミツ、バター、クリーム、それからいろんなフルーツが混ざったような、とても甘酸っぱいカンジです。

くんくん……。

アルルはハナをきかせてみました。どうやら、前のほうから風さんにのってにおってきているようです。

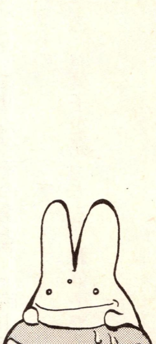
もしかして、お菓子がいっぱいあるのかなぁ……。

ちょっちワクワクしながら進むと、やがて〝おかねの国〟のような、街が見えてきました。

「うわぁ～～～……★」

街の前まで来た途端、アルルは思わず歓声をあげてしまいました。

〝おかねの国〟とちがって、建物はあんまり多くないけれど、アルルとしてはこっちのほうが



るからです。

大好きになってしまいそうです。なぜかというと、ゼンブの建物が、なんとお菓子でできてい

壁がスポンジケーキやウェハースで、柱はチョコレートやスティック状のビスケット。屋根は薄く切ったバウムクーヘンや、ビスケットや板チョコを重ねたモノだし、生クリームやドライフルーツやゼリービーンズをトッピングしたお家もあります。ドアはクッキーだし、窓ガラスはうすくのばしたアメかなにかでしょうか……？　オレンジやグレープフルーツジュースでいっぱいの噴水もあります。

とにかく、アルルにとってはタマラナイところです。いますぐにでも食べてしまいたいくらい。いつもおかあさんが、「虫歯になるからダメ！」といって、あんまり食べさせてくれませんからね。

ぐぐ〜〜〜ぅ……。

待ってましたとばかりに、アルルのお腹が鳴りました。そういえば、〝おかねの国〟で焼きたてのパンをのほほさんにもらったきり、なんにも食べていません。そのあと、一晩中踊ったりなんかしてましたから、そりゃぁ、お腹もすくというもの。

ちょうどいいコトに、この街にはお店もあるようです。お菓子を売ってる、お菓子でできたお店、っていうのもちょっとヘンなカンジだけど……。

「…………」

とはいうものの、アルルはいまお金をゼンゼン持っていません。１枚だけ持っていた、おばあちゃんにもらった金貨は、〝おかねの国〟で使ってしまいました。それで〝おかねの国〟のヒトたちを助けたんだから、そのコトじたいは後悔してないケド……。でも、これだけのお菓子を眼の前にしてなんにも食べられないなんて、ちょっちクヤシイかも……。

まぁ、お金がない以上、お家に帰るまではガマンしなければなりません。いくらなんでも、ヒトのお家を食べちゃうワケにはいきませんし。

お腹へったなぁ……。お菓子食べたいなぁ……。

なぁんて思いながら、アルルはとぼとぼと街の中を歩きました。お肉のおあずけをくらったイヌみたいに、ちょっち元気がナイ。

「どうしたんだい？　おじょうちゃん」

トツゼン、ドコからか声がしました。見ると、バウムクーヘンの切り株に座っているおばあさんが、ニコニコとこっちを見ています。アルルのおばあちゃんによく似て、とってもやさしそうなカンジです。

「お腹でもすいてるのかい？」

「う、うん……」

「そうかいそうかい、ちっちゃいのにカワイソウにねぇ……。じゃあ、おばあさんのお家においで。お菓子をごちそうしてあげましょう」

「ホント!?」

アルルは、いわれるままにおばあさんのお家(うち)に行きました。もう、頭の中はお菓子(かし)を食べるコトでいっぱいです。

ひときわリッパな——というか、おいしそうなお菓子のお家に案内されて、アルルはバウムクーヘンのイスに座(すわ)りました。するとやがて、おっきなビスケットのテーブルに、お菓子がどんどん運ばれてきます。

「わぁ〜……★」

ケーキに、チョコレートに、グミキャンディに、チョコチップのクッキーに、ゼリービーンズに、ぷよまんに、ぷよゼリーに、〝ふしぎなどうぶつ〟のカタチをしたおまんじゅうもあります。飲み物は甘(あま)い甘いミルクティーに、イチゴ牛乳(ぎゅうにゅう)に、ホットチョコレートに、オレンジジュースにと、これまたたくさんあります。もちろん、こんなにたっくさんのお菓子を見たのははじめてです。まるで夢(ゆめ)のようです。

「こ、コレ、ゼンブ食べちゃっていいの?」

「いいともいいとも、たんとお食べ」

アルルがワクワクしてたずねると、ニコニコしながらおばあさんはいいます。

「いっただっきま〜す!」

いうが早いか、アルルはさっそくケーキにとりかかりました。ナイフでケーキをちっちゃく

切って、それをフォークでさして、口の中へ……。
「……!」
ケーキをほおばる直前、アルルは、ふとあるコトに気づきました。
「ねぇねぇ、おばあさん」
「な、なんだい?」
フォークを置いてアルルがたずねると、おばあさんは、ほんのちょっぴりドギマギしながら返事をします。
「この街には〝だいまおう〟の手下は来てないの?」
これまでにアルルが通過した国には、みんな〝だいまおう〟の手下が来ていて、街をメチャクチャにしていました。しかも、だんだんメチャクチャの度合いがひどくなっていくような気がします。〝つみきの国〟なんかは、それはそれはヒドイ状態でした。
「〝だいまおう〟……?」
「うん。〝おとぎの国〟をシハイしようとしてる、悪いヤツなんだって」
アルルはいいました。
「〝おはなの国〟とか、〝おかねの国〟とか、〝だいまおう〟の手下ってヤツが来てて、タイヘンだったんだよ」
「ほかの国のコトは知らないが、この〝おかしの国〟は平和なもんさ。その〝だいまおう〟っ

てヤツも、ココのコトは忘れてるんじゃないかい？」
「ふぅん」
「ささ、アルルちゃん、そんなコトなんか気にしてないで、たんとお食べ。ホットチョコレートも冷めてしまうよ」
「うん！」
アルルは、ケーキをさしたフォークをまた持ち上げました。
そういえば、〝だんすの国〟にも〝だいまおう〟の手下はいなかったし、この〝おかしの国〟にも来てないのかもしれないね……。
そう思いながら、ケーキを口の中に入れようとした瞬間、

「ぱおー」

声とともに、イスの下に置いたリュックがもぞもぞしはじめました。おひるねしていたテノリゾウさんが眼をさましたようです。
「ぱおー、ぱおぱおー」
アルルがリュックから出してあげると、テノリゾウさんはさかんに鳴き声をあげました。ナニかを、アルルに伝えようとしてるみたいです。
「なぁに？　テノリゾウさんもお菓子食べたいの？」

「ぱおー」

テノリゾウさんはぶんぶんと首をふります。

「ぱおぱおー！」

とっても大事なナニかを、アルルにいいたいようです。お菓子のコトで頭がいっぱいのアルルは、テノリゾウさんがナニをいってるのか、ちょっちわかりません。

「アルルちゃん、そんなのなんかほっといて、早くお菓子をお食べよ」

おばあさんが、ちょっとイライラしたようにいいました。

「ちょ、ちょっとまって。……なぁに？　テノリゾウさん、ナニがいいたいの？」

「ぱおー」

テノリゾウさんは、リュックの中から〝負けないニンジン〟を取り出しました。

「それが、どうしたの……？」

〝負けないニンジン〟をくれた、切り株のおじいさんのコトを思い出せっていうの……？

切り株のおじいさんは、ボクに負けない心を忘れるなっていってた。ずっと、それは忘れてないつもりだったケド……。

「ボク、負けてる……？」

アルルはテノリゾウさんにたずねました。

「ぱおー」

テノリゾウさんは、コクコクとうなずきながら、テーブルに乗ったたっくさんのお菓子を差します。

そうか……!!

心の中で、アルルはいいました。確かに、負けているかもしれません。あまりにもたくさんのお菓子のユウワクに……。

なんだか、悪い予感がします。こんなにやさしいメにあったのは、はじめてです。もちろん、いままでに出会ったヒトたちはみんなみんなやさしかったケド、〃だいまおう〃の手下をやっつけたとか、いっしょに踊ったとか、そのお礼でいろんなコトをしてもらったのです。こんなふうに、なんにもしないのにお菓子を食べさせてくれるなんて、いままでのパターンにはありません。

「やっぱり、ボクいいよ。ごちそうさまでした」

「そんなコトいわずにお食べよ、アルルちゃん。とってもオイシイよ」

アルルが断ったにもかかわらず、おばあさんは熱心にすすめます。落ち着いて考えてみると、ちょっちシツコイかも……。

だいたい、この〃おかしの国〃は、オカシイことだらけです。おばあさんがムリにお菓子を食べさせようとしてるのもオカシイし、こんな目立つ国に〃だいまおう〃の手下が来てないっていうのもオカシイ。

それに……。
「おばあさん、どうしてボクの名前を知ってるの？」
テノリゾウさんのおかげで、お菓子のユウワクに打ち勝ったアルルは、おばあさんにいいました。
「え……？　そ、そうだっけねぇ……」
「うん。ボク、一度も名前いってなかったと思うケド……」
「し、しまった……！」
「も、もしかして、〝だいまおう〟の……？」
「ちっ、バレちまったんじゃぁ、しょうがねぇな」
トツゼン、おばあさんの声が変わりました。モノスゴイがらがら声で、まるでタバコ喫（す）いすぎのおじさんってカンジです。
「いかにも、オレ様は〝だいまおう〟さまに仕（つか）える……」
バサァッ！
いいながら、おばあさんはイキナリ自分の服をひっぺがします。
その中から出てきたのは……、
「アウルベアさまよぉっ！」
クマさんとフクロウさんを合体させたような、おっきなモンスター！

「オラオラァッ！」

ビシィッ！

と、アウルベアさんはするどいツメのついた指を、アルルに向けました。

「ドッペルゲンガーのヤツを出し抜いたそうじゃねぇか。ホメてやるぜ」

どうやらアウルベアさんは、アルルをやっつけるために、ココにいたようです。そのため、アルルの名前を最初から知っていたのです。

というコトは……、

「〝おかしの国〟って、もしかして……」

アルルはいいました。

「そのとおり！　お前をダマすためのワナよぉっ！　お前みてぇなガキンチョは、お菓子でヒッカケるのがイチバンだからな」

「う〜っ……」

子供の弱味につけこむなんて、ちょっち許せないってカンジ。しかし、アブナイところで完全にひっかかるトコロでした。そうならなかったのは、テノリゾウさんのおかげです。

「お菓子を食えば、あっというまに〝の〜みそぷ〜〟だったんだけどよぉ。そういうクスリを入れといたからな。しかしそれをかわすたぁ、なかなかヤルじゃねぇか」

シャキ―――ン！

アウルベアさんは、両手のツメを長くのばしました。とってもするどくて、包丁みたいによく斬れそうです。

「こうなったら、チカラずくでお前を倒してやるぜ！　まぁ、お前にウラミはねぇが、これも〝だいまおう〟さまの命令だからな」

ジロッとアルルをニラむ眼が、すっごい威圧感です。

「ドッペルゲンガーを出し抜いたからといって、オレ様を倒せると思うなよな。なにしろ、オレ様はヒトの心が読めるんだからな！」

「……!!」

これは、ちょっちヤバイかも……。

アルルは思いました。ヒトの心が読めるってコトは、いつ、どのタイミングで、どうやって攻撃するかがスグわかっちゃうっていうコト。つまり、こっちの攻撃はゼンブよけられちゃうってコトです。頭を使って、なにか、よけられないような、読まれないような攻撃を考えないと……。

「オラオラァッ！　行くぜぇっ！」

ブォンッ！

アウルベアさんは、たかぁくあげた右腕を、大きく振り下ろしました。
「ひゃあっ！」
あわててアルルは回避！
ガッシャア――――ンッ!!
目標に当たらなかった右腕は、勢いあまってビスケットのテーブルをコナゴナにしました。
「ファイヤー!!」
ゴォッ！
よけたスキに、アルルはイチかバチかの呪文！
「ムダムダァッ！」
ひょいっ。
アルルの手から発した火の玉は、アウルベアさんに軽々とよけられてしまいました。やっぱり、普通に攻撃しただけではダメのようです。
なにか、グッドな手を考えないと……。
「………」
アウルベアさんから眼をはなさずに、アルルは頭を働かせました。
そうだ！〝かがみの国〟でやったみたいに、ライトニングをカガミで反射させれば……！

と思ってカガミを探しますが、どうやらこのお家にカガミはないようです。もしかすると、アルルにそれをさせないように、カガミを置いていないのかもしれません。

「オラオラァッ!!」

ブォンッ！

今度は、アウルベアさんのふっとい左腕が襲いかかってきます。

「きゃあっ！」

バリバリバリッ！

よけたアルルの代わりに、ウェハースの壁がやぶれてしまいました。

「アイストーム！」

ヒュゴォォォォォォォォッ！

ダメでもともとと思いつつ、アルルはもう一度呪文を唱えますが……、

「ムダだといっとるだろうがぁっ！」

ひょいっ。

やっぱりダメ。よけられてしまいました。

「ライトニング！」

ピシャア――――ンッ！

またさらに呪文。今度は、アウルベアさんではなく、お家の窓をねらい撃ちです。ガラスもカガミとにたようなモノだから、ライトニングが反射するかも……！

パキィンッ！

はたして、アルルの狙いは大当り！　アメ細工の窓ガラスに当たったライトニングは、見事に反射しました。そのまま、後ろからアウルベアさんに襲いかかります！

やった……！

とアルルが思った瞬間、

ひょいっ。

なんなく、アウルベアさんはライトニングをよけてしまいました。

「だからムダだといっただろうが！」

アウルベアさんはいいます。

「お前がライトニングを窓ガラスに反射させるコトくらい、すでにお見通しなのよっ！」

「ううっ……」

もはや、アルルにはなすすべがありません。アウルベアさんに勝つには、まず、心を読む能力をなんとかしないと……。ひとりじゃなくて、ふたりで戦うとか……。

「……!?」

ふと、アルルはテノリゾウさんのコトを思い出しました。アウルベアさんの攻撃をよけるの

に夢中で、すっかり忘れていたのです。
キョロキョロと部屋中を見渡しますが、テノリゾウさんの姿はありません。まさか、こわれたテーブルの下敷きとかになってしまったのでしょうか……？
「ぱおー」
トツゼン、テノリゾウさんの声。よくよく見ると、アウルベアさんの脇腹あたりにしがみついています。
「ああっ！　キサマ、いつのまに！」
サスガのアウルベアさんも、テノリゾウさんの心は読めなかったようです。
「はなれろっ！　うっとおしいっ！」
ぶんぶんぶんと身体をふって、アウルベアさんはテノリゾウさんをふり落とそうとしますが、しっかりとしがみついているので、テノリゾウさんはなかなか離れません。
「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ……」
やがて疲れたアウルベアさんは、肩で息をしはじめました。
「ぱおー」
そのスキをついて、テノリゾウさんはおハナをながぁくのばして、アウルベアさんのわきのしたをコチョコチョコチョ……。
「うわはははははははははははは……！　や、やめろっ！　くすぐったいっ！　うわはははは

ははははははっ……!!」

あまりのくすぐったさに、アウルベアさんはジタバタと転(ころ)がりはじめました。

チャ——ンス到来(とうらい)です！

だけど、このまま呪文(じゅもん)を唱(とな)えるワケにはいきません。テノリゾウさんまで巻(ま)きこんでしまうコトになりますからね。

「…………」

アルルはあたりを見回しました。そして、さっき食べそこなったケーキを発見。

それを拾って、アルルはまだジタバタしてるアウルベアさんのところに行き……、

「えいっ！」

がぼっ！

笑いころげておっきくあいているアウルベアさんの口に、ケーキを思いきりつっこみました。

すると……、

「ほげほげぇ……」

トツゼン、アウルベアさんの笑いがとまり、口をだらしなくあけて、ぼぉ〜っとしはじめてしまいました。まるで、起きていながら夢(ゆめ)でも見てるってカンジです。

「やった！」

アルルは思わず声をあげました。〝の〜みそぷ〜〟大作戦、成功です！

アウルベアさんのセリフを、アルルはずっとおぼえていたのです。アルルに食べさせようとしていたお菓子(かし)には、〝の〜みそぷ〜〟にするクスリが入っていた、というコトを。つまり、そのお菓子を食べさせて〝の〜みそぷ〜〟にしてしまえば、心の中は読まれないってワケです。

「ぱおー」

見事(みごと)に作戦が成功したので、テノリゾウさんもアルルのところに戻(もど)ってきました。あとは、トドメの一撃(いちげき)だけ！

「よぉ〜し……！」

すぅぅっ……。

チカラいっぱい呪文を唱えようと、アルルは思いっきり息をすいました。

そこへ、

「ま、待つりら！」

バタン！

とクッキーの扉(とびら)をあけて、誰(だれ)かが飛びこんできました。見ると、〝つみきの国〟で会ったブレードビーストさんです。

「ブレードビーストさん、どうしたの……？」

「そのアウルベアこそ、もうひとりの〝てんしさま〟のしもべなんだりら」
「えぇっ!?」
「わたしといっしょに、〝だいまおう〟の術をかけられたのはおぼえていたりらが、ドコでなにをやってるかまではわからなかったんだりら。で、アチコチ探し歩いて、ようやくココにいるコトがわかったんだりら。まさか、アルルちゃんを待ち伏せていたりらとは……」
「そうだったのかぁ……」
なんだか、アルルは〝だいまおう〟のコトをますますもって許せなくなってきました。〝てんしさま〟のトコロに行こうとしてるボクを、もともとは〝てんしさま〟のしもべだったアウルベアさんを使ってやっつけようとするなんて、なんて悪いヤツなんだ……！
そんなアルルをよそに、ブレードビーストさんはすたすたとアウルベアさんに近づきます。
「おいっ！　アウルベア！　しっかりするりら！」
「ほげぇ……？」
「しっかりするりらぁ〜〜〜〜〜っ！」
ブレードビーストさんは、アウルベアさんの肩をつかんでユッサユッサ。
「……はっ!?」
ようやく、アウルベアさんは我にかえりました。
「こ、ココは……？　オレ様はいったい……？」

といいながらキョロキョロするアウルベアさんの眼から、さっきのようなコワイ威圧感がなくなっています。どうやら、もとのアウルベアさんにもどったようです。
アウルベアさんに、ブレードビーストさんがゼンブ説明をしました。〝だいまおう〟に術をかけられ、あやつられていたコト。その〝だいまおう〟の命令で、〝てんしさま〟のトコロに向かう旅をしているアルルのジャマをしようとしてたコト。それから、アルルの〝の〜みそぷ〜〟大作戦で負けてしまったコト……。
「そうか……」
ハナシを聞き終わったところで、アウルベアさんはいいました。
「アルルちゃんみてぇなちっちゃいコをやっつけようなんて、〝だいまおう〟ってのはずいぶんひでぇヤロウだな。それにしても……」
ちらっ、とアウルベアさんはアルルを見ます。
「〝だいまおう〟にあやつられていたとはいえ、オレ様を負かすたぁ、たいした娘っコだな。オレ様にあのお菓子を食わせる作戦は、ナカナカだったぜ」
「えへへ……」
アルルは、ちょっちテレくさくなって、顔を赤くしました。
「ホレ、オレ様からのプレゼントだ。受け取りな」
といってアウルベアさんがさしだしたのは、カップに入った真っ白なヨーグルト。

「コレは……？」

「〝冷静さのヨーグルト〟だ。オレ様を負かすほどの冷静な判断力のあるお前こそ、これを持つにふさわしい。その冷静さを忘れなければ、〝だいまおう〟なんかメじゃねぇぜ」

「うん！　ありがとう！」

「さあ、早くココを出るりら。〝てんしさま〟のお身体がシンパイだりら」

ブレードビーストさんがいいました。

「そうだな。オレ様がもとにもどったと気づかれる前に行けば、奇襲にもなるしな」

アウルベアさんもいいます。

「じゃあ、行こう！」

アルルの掛け声とともに、アルル、ブレードビーストさん、アウルベアさん、そしてテノリゾウさんの4人は〝おかしの国〟をあとにしました。

とても頼もしい仲間がいっぱい増えて、アルルはむかし以上に元気！　元気！　元気です！

いろんなヒトたちからもらった、いろんなアイテムもあるコトですしね。

おかあさん、待っててね。もうすぐ帰るから……。

# かれーの国

「よいしょ、よいしょ……」
3人――テノリゾウさんは、アルルの頭のうえにいるので――は、小高い丘を登りつづけました。けっこう坂が急で地面もけわしいので、丘というよりは山といったほうがより正確かもしれません。
「よいしょ、よいしょ……」
〝おかしの国〟を出発して、もうずいぶんたちます。〝おはなの国〟の切り株のおじいさんが「これをまっすぐ行けばいい」と教えてくれた道は、とっくになくなっています。ブレードビーストさんやアウルベアさんによると、それは〝てんしさま〟のいる国が近いからだそうです。この丘を越えれば、もうスグだとふたりはいっていました。
「よいしょ、よいしょ……。ふう……」
「疲れたりらか？」
アルルがため息をつくと、ブレードビーストさんがたずねました。



「ううん。大丈夫(だいじょうぶ)だよ」
「ムリしたらダメりらよ」
「疲(つか)れたらちゃんといえよ。おんぶしてやるから」
アウルベアさんもいいます。
「うん、ありがとう。でも、ボクはホントに大丈夫」
ホントは、ちょっちつらいケド……。
丘(おか)を登るまえ、アウルベアさんが「おんぶしてやる」といってくれたんだケド、アルルはそれを断(ことわ)りました。せっかく、もう少しで〝てんしさま〟のトコロに行けるワケだから、自分で歩きたいっていうのもあったし、おんぶしてもらうなんて赤ちゃんみたいでちょっちハズカシイしね。
でも、正直いって、アルルはもうヘトヘトです。こんなに坂がキツイとは、思ってもみなかったのです。それでもなんとか歩いていられるのは、「一度やると決めたら、最後までやりとげろ」というおとうさんの教え。ココでアウルベアさんにおんぶなんかしてもらったら、それこそおとうさんにあわせる顔がありません。おとうさんが帰ってくればのおハナシだけど……。
「よいしょ、よいしょ……」
アルルたちはひたすら登りつづけました。
「おっ、頂上(ちょうじょう)が見えてきたりらよ」

「ホント!?」

見ると、ブレードビーストさんのいうとおり、丘のいただきがすぐそこにあります。その向こう、というか上には、いっぱいのお空が広がっているけれど、ポカポカのお陽サマは見えません。いまにも雨がふりそうな、真っ黒な雲がたちこめています。これも、〝だいまおう〟の影響でしょうか……?

あともうひとふんばり！　と元気をふるい起こして登りつづけると、やがて丘のいただきに到着。

「わぁ～……」

丘のふもとに広がる光景を見て、アルルは思わず声をもらしました。

これまでに見た、どんなトコロよりもリッパな街が、そこにはありました。アルルのお家の近くにある街よりも、〝おかねの国〟よりもです。ちっちゃい頃におとうさんに連れていってもらった、お城のまわりの街よりもリッパかもしれません。

たっくさんの、アルルのお家よりもリッパな建物がキチンと並んでいて、そのイチバン奥に、これまた豪華でリッパなお城があります。

「ねぇ、あそこに〝てんしさま〟がいるの?」

アルルはお城を指差していいました。

「そうりら。あれが〝おとぎの国〟の中心りらよ」

ブレードビーストさんがいいます。

街のまわりは、いまアルルたちがいるような、丘と山のあいのこのような土地にかこまれています。なるほど、これでは見つかりにくいのは当然です。

ちなみに、真っ黒な雲は、どうやらこの街の上だけにかかっているようです。遠くのほうを見ると、晴れているところがチラホラあります。〝だいまおう〟がいるんだ、ってカンジがますますしてきます。

つぅん……。

「……?」

ふと、アルルはスパイシーなニオイを感じました。ドコかでかいだようなニオイです。

「ねぇ、なんかカレーくさくない?」

「それは当然だ」

とアウルベアさん。

「ココは別名を〝かれーの国〟といってな、カレーライスがウマイことでも有名だったりするんだ。また〝てんしさま〟が、ことのほかカレーがスキでなぁ」

「へぇ〜。ボクも大好きだよ」

「実は、〝だいまおう〟が〝おとぎの国〟を支配しようとしてるのも、この街のカレーをひとりじめしたいからというウワサがあるりら」

ブレードビーストさんがいいました。
「じゃあ、〝だいまおう〟もカレーがスキなんだね。でも、ひとりじめはよくないよね」
「そうりらな」
「〝だいまおう〟にそうさせないために、オレ様たちがこうしているってワケだ」
「そうだね」
「さて、いつまでもココでじっとしててもしょうがねぇ。城に行くぜ」
「うん！」
アルルたちは、丘をおりて街へと向かいました。ここから先は下りの坂なので、とってもラクチンです。
街の中は、ひっそりとしていて、外に出ているヒトはだぁれもいません。建物の窓という窓なんか、がっちりと雨戸がしめられています。
「なんだか、静かだね……」
「みんな、〝だいまおう〟をおそれて、家から出てきやがらねぇのさ」
アルルがいうと、アウルベアさんが応えます。
「まぁ、〝てんしさま〟がイキナリつかまっちまって、オレ様たちも術をかけられちまったからな。街の連中がビビるのもムリはねぇ」
「そっか……」

ほどなくして、アルルたちはお城に到着。お城は天井がとっても高くて、柱や壁や床もとってもリッパだけれど、やっぱりひとっこひとりいません。しんと静まりかえっていて、まるでオバケ屋敷のようです。

お城に入るまえは、〝だいまおう〟の手下とかが襲ってくるんじゃないかってシンパイしてたケド、誰かが出てくるようすはゼンゼンありません。みんな、ほかの国をメチャクチャにしにいっていて、いないのでしょうか……？

3人はずんずんと奥に進み、やがて、謁見の間に着きました。見ると、山みたいに高い段々の上の玉座に、誰かが座っています。

「待っていたよ、キミたち……」

透きとおるような、それでいてすっごい威圧感を持った声で、玉座に座っている誰かがいいました。アルルなら千人でも二千人でも入れそうな広い広い謁見の間に、アルルたちとそのヒトしかいないので、ますます声がよく響きます。

近づいてよく見ると、そのヒトは、金や銀、いろんな宝石の飾りをゴテゴテとつけた真っ黒なローブを着た、いかにも〝だいまおう〟といったふうです。ローブのフードに隠れて顔は見えないケド、フードにあけた穴から飛びだしてる2本のリッパな角が、いかにもってカンジを倍増させています。

「よくココまでたどりついたな、アルルくん」

とっても若そうな声です。おとうさんとおんなじくらいか、ちょっち下くらいの年齢でしょうか……?

「おにいさんが〝だいまおう〟……?」

アルルがいうと、玉座のヒトはこっくりとうなずきました。

「いかにも、わたしは〝だいまおう〟。いや、この〝おとぎの国〟の新たなる王だ」

「ふざけるんじゃないりら！　誰もお前なんか王などと認めないりら！　さっさと〝てんしさま〟を解放するりら！」

「キサマはだまっていろ!!」

ブレードビーストさんを、〝だいまおう〟は思いっきり怒鳴りつけました。アルルに対するのとはゼンゼン違う、とってもキビシイ態度です。もし、アルルに向かってあんなふうにいわれたら、イッパツでアルルは泣いてしまうでしょう。

「でも、カレーをひとりじめするためにこんなコトするなんて、悪いコトだよ。お願いだから、〝おとぎの国〟をもとにもどして！」

怒鳴られませんように、と思いながら、アルルはちょっぴり勇気をだしていいました。

「まぁ、わたしの手下を退け、ココまでたどりついたキミに免じて、〝おとぎの国〟をもとにもどしてやらないでもない」

「ホント!?」
「ただし、わたしの最後のテストに合格したらのハナシだ」
「テスト……?」
「戦って勝てっつーんなら、オレ様たちもアルルちゃんに協力するからな!」
パチン!
アウルベアさんのコトバをムシして、〝だいまおう〟は指を鳴らします。その途端、

ポポンッ!

「わっ!」
トツゼン、アルルたちの眼の前に、テーブルがケムリとともに現れました。その上には、ゴハンをてんこもりにしたお皿が乗っています。
「これは……?」
「そのライスは、この〝かれーの国〟で一万年に一度とれるかとれないかという、極上の米で炊いたものだ。それにあうカレーを作ってもらおう。それが、わたしのテストだ……。ちなみにいっておくが、そのライスにあうカレーは、いままでダレひとりとして作れたコトがない。少しでもあわなければ、とんでもなく不味いシロモノと化す。気をつけたまえ」
「ええっ!?」

パチン！

驚くアルルをよそに、〝だいまおう〟はまた指を鳴らしました。

ポポンッ！

今度は、テーブルのわきにキッチンが出現。魔法の水道やかまど、お鍋、フライパン、包丁、調味料などなど、おかあさんがいつも使っているようなキッチンの道具が、ゼンブそろっています。

「器材はそれを使うといい」

「で、でも、ボクはカレーを作ったコトなんて、一度も……！」

「そんなものは、わたしの知ったコトではない」

アルルのコトバを跳ねのけるように、〝だいまおう〟は、イジワルにもつーんとそっぽを向いてしまいました。

だいたい、アルルはまだちっちゃいので、カレーを作ったコトがないどころか、キッチンにロクに入ったコトもありません。よく、ツマミ食いをしようとしてキッチンに入り、おかあさんに怒られたものです。ちっちゃいコが刃物や火を使うのは、とってもキケンですからね。

「大丈夫だ」

ポン。

と、アウルベアさんがアルルの肩をやさしく叩きました。
「オレ様たちがいることを忘れちゃこまるぜ。アルルちゃんのできないコトは、みんなオレ様たちがやってやるよ」
「そうだりら」
「ぱおー」
ブレードビーストさんも、テノリゾウさんも、アルルを元気づけるようにいいます。
「みんな……、ありがとう」
そしてアルルは、〝だいまおう〟を見上げていいました。
「作るのはいいケド、材料がないよ！」
「それも、わたしの知ったコトではない。自分で探してくるんだな」
あいかわらず、〝だいまおう〟はそっぽを向いています。
「そ、そんな……。材料なんてどうやって……あ!!」
ふと、アルルは思いだしました。いろんなヒトたちにもらった、いろんなアイテムのコトを。
〝負けないニンジン〟。〝魔力のタマネギ〟。〝親切さのジャガイモ〟。〝知恵のお肉〟。〝爽快さのふくじんづけ〟。〝勇気のルー〟。そして〝冷静さのヨーグルト〟。
そういえば、これらはみんな、カレーの材料です。あとで役に立つって、もしかして、このコト……？

ゴロゴロゴロ……。

アルルは、リュックの中身をキッチンのまないたの上に出しました。

「これで作るりらか？」

ブレードビーストさんがたずねます。

「うん。たぶん、コレで大丈夫だと思う」

「よしわかったりら。切るのはわたしにまかせるりら。アウルベアは火を頼むりら」

「おう！」

「アルルちゃんは切った材料を入れるうつわを用意してりら」

「うん！」

アルルがキッチンの戸棚からうつわを出すと、ブレードビーストさんは〝負けないニンジン〟をつかんでポーンと上に放り投げました。そして、自分もジャンプ！

「ひゅるりらぁっ！」

ヒュゴォォォォォオッ！

空中でコマのように回転し、ブレードビーストさんは竜巻に変身。その竜巻の中に〝負けないニンジン〟が入った途端、

シャキシャキ――ン！

ボトボトボト……。

すっかり食べやすい大きさになって、アルルの用意したうつわの中に落ちました。

「アルルちゃん、つぎはタマネギを投げてりら！」

竜巻回転をしたままで、ブレードビーストさんがいいます。

「いくよぉ！　それっ！」

アルルは、〝魔力のタマネギ〟を放り投げました。

こんな調子で、〝親切さのジャガイモ〟や〝知恵のお肉〟も、あっというまにこまかくなりました。もちろん、ニンジン、タマネギ、ジャガイモの皮もキレイにむかれています。

「こっちも準備オーケーだぜ！」

かまどのほうで、ジュージューという音と、いいニオイがします。アウルベアさんが、お鍋にバターをひいているのです。

「まずは肉からだ。アルルちゃん、鍋の中に入れてくんな」

「うん！」

じゅぅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ。

アルルがお鍋の中に〝知恵のお肉〟をいれると、おかあさんがカレーをつくるときのような、イイ音がします。

「オラオラァッ！」

アウルベアさんは、オタマを器用に使って、お肉を炒めます。塩コショウをテノリゾウさんが入れて、やがてお肉がイイ色になった頃、

「つぎはニンジンだ！　アルルちゃん、頼むぜ！」

「うん！」

〝負けないニンジン〟につづいて、〝親切さのジャガイモ〟、〝魔力のタマネギ〟と入れ、材料がだんだん炒められていきます。

「ぱおー」

じゃぁぁぁぁぁぁぁぁっ。

そのタイミングをみはからって、テノリゾウさんがボウルにくんだお水をお鍋に流しこみました。それと同時に、アウルベアさんはかまどの火をちょっと弱くします。

「よし！　これで材料が煮えてきたら、ルーを入れてオーケーだ」

といってるまに、お鍋がふつふつと沸騰してきました。やがて、ジャガイモやニンジンがほどよくやわらかくなってきます。

「じゃあ、アルルちゃん、ルーを入れてくれ」

「わかった！」

アウルベアさんの指示にしたがって、アルルは〝勇気のルー〟をこまかく割って、お鍋の中にぽとぽとと落としました。それがよく溶けるように、アウルベアさんがオタマを使ってお鍋の奥へと沈めます。

「ココからはお前の番だ」

アルルのほうを向いて、アウルベアさんはいいました。

「カレーが焦げないようにかき回すんだ。ゆっくり、心をこめてな」

「うん！」

オタマをアウルベアさんから受け取って、アルルはカレーのお鍋をかき回しはじめました。

だんだん、カレーのいいニオイがしてきます。

ぐるぐる……ぐるぐる……。

お鍋をかき回していると、いままで出会ったコトや、いろんなヒトたちのコトが頭に浮かんできます。

木人のおにいさんたちのコト。ウィッチのおねえさんたちのコト。ゴールドドラゴンさんたちのコト。ちょっぷんさんたちのコト。すけとうだらさんたちのコト。ふたごのケットシーさんたちのコト。まだ会ったことのない〝てんしさま〟や、そのしもべのアウルベアさんたちのコト。アルルのお家のコト。魔導幼稚園のコト。お友だちのコト。おかあさんのコト。おばあちゃんのコト。そして、おとうさんのコト……。

いろんな思いが、お鍋の中のカレーのように、アルルの頭の中でぐるぐるします。
これまで、ホントにいろいろなコトがありました。いろんなつらいコトもありました。これからも、たぶんつらいコトはいっぱいあるでしょう。でも、楽しいコトもたっくさんあるはずです。そう思うと、なんだかつらいコトがあっても平気なような気がします。お家に帰っても、クライ顔でおとうさんを待ったりなんかしません。明るく元気におとうさんの帰りを待ってるような気がします。いや、待たなくてもいいのです。もし、ずっとずっとおとうさんが帰ってこなくても、アルルがおっきくなって、リッパな魔導師になったら、そのときは……。
「もうそろそろイイんじゃねぇの？」
アウルベアさんのコトバで、アルルは、はっ！　と我にかえりました。お鍋を見ると、おいしそうなカレーができています。とってもいいニオイです。
アルルは、それをオタマですくってライスにかけました。その上につけあわせの〝爽快さのふくじんづけ〟を乗っけて、デザートの〝冷静さのヨーグルト〟をそえて、できあがり！
「できたよーっ！」
玉座の〝だいまおう〟に向かって、アルルはいいました。
「ほほう……」
カッッ！

乾いたブーツの音を立てて〝だいまおう〟が立ち上がり、こっちに向かって降りてきました。歩くたびに、ローブの飾りがジャラジャラと音を出します。それがまた、えもいわれぬ威圧感をかもしだしています。

「ふむ……」

パチン！

テーブルの前まで来た〝だいまおう〟は、今度はスプーンとイスを魔法で出し、そのイスに座りました。

「どれどれ……」

〝だいまおう〟は、アルルのカレーをスプーンですくって、パクッ。そのまましばらく味わったのち、よくかんで飲みこみました。

そのあとは、なにもいわずにもくもくと食べ始めます。

「………」

ドキドキしながらアルルがそれを見てるうちに、やがて、〝だいまおう〟はデザートのヨーグルトまでキレイに食べてしまいました。

「あの～……」

アルルが問いかけようとした瞬間に、〝だいまおう〟はアルルをキッ！　と見つめました。フードに隠れてるせいで、表情はわからないけれど……。

「………」
おいしかったのか、まずかったのか、ナニをいわれるかと思って、アルルのちっちゃな胸は、もうドキドキです。破裂しそうなくらい。
ニコッ。
トッゼン、フードの下から見える〝だいまおう〟の口が笑いました。
「うまい！」
「ほ、ホント!?」
「本当です。アルルくん、キミは合格です」
いつのまにか、〝だいまおう〟の口調が変わっています。声も、モノスゴイ威圧感が消えて、とってもあったかい、やさしい響きになっています。だけど、合格と聞いたうれしさのあまり、アルルはそれに気づいていません。
「じゃあ、〝おとぎの国〟をもとにもどしてくれるんだね!?　〝てんしさま〟に会わせてくれるんだね!?」
「それはできません」
「ど、どうして!?」
「〝てんしさま〟なんていう人物は、存在しないからですよ」

「へ……？」

バサァッ！

〃だいまおう〃は、いきなりローブを脱ぎ捨てました。その下から出てきたヒトは、やっぱりローブを着ているけれど、ゼンゼン雰囲気が違います。ローブは雪のように、お陽サマの光のように真っ白で、悪魔のような角もありません。

「わたしは、しがない魔導師。ヒトは〃南の賢者〃と呼んでいますが……」

「？？？」

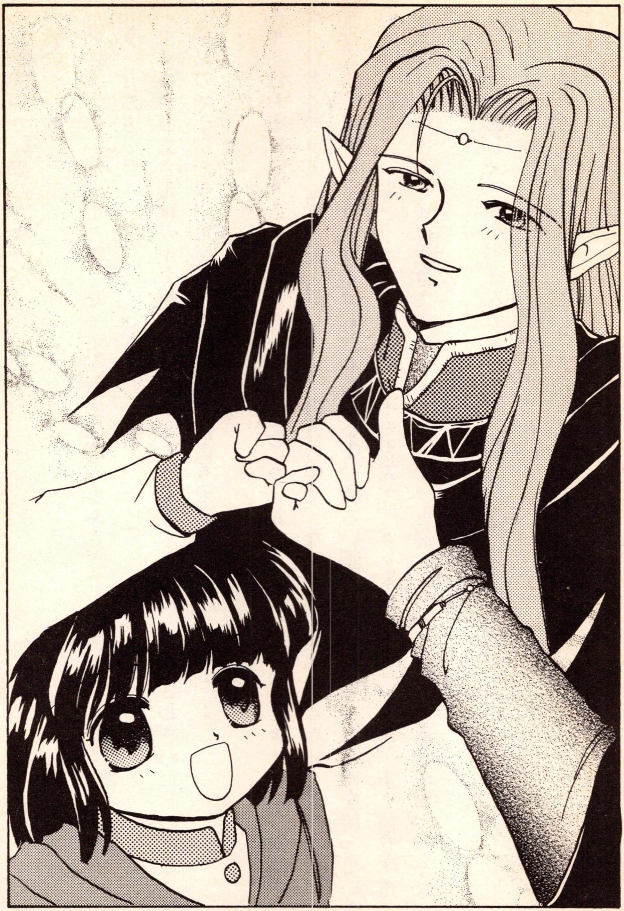
アルルの頭の中はもうぐちゃぐちゃで、チンプンカンプンです。なにがどうなってるのか、さっぱりわかりません。〃南の賢者様〃って、おばあちゃんのお友だちの魔導師じゃなかったっけ……？　どうしてそのヒトがココにいるの……？

「この〃おとぎの国〃は、キミの、夢の中の世界です。キミのおばあさんが、ベッドの横で本を読んでいるというおぼえはありませんか？」

「あ……!?」

アルルは思いだしました。そういえば、ボクはおばあちゃんにご本を読んでもらってて、いつのまにか寝ちゃって、そんでいつのまにか〃おとぎの国〃に来ちゃったんだ……。

「わたしがおばあさんにお貸しした〃おとぎの本〃には、キミのようなコを夢の世界に誘うチ



カラを持っているのです」
「…………」
「おとうさんが帰ってこなくなって、キミはずっとふさぎこんでいましたね？」
「う、うん……」
「キミのおばあさんは、キミがもとの元気をとりもどすようにと、わざわざわたしのところまで来たのです。どうやら、その甲斐(かい)はあったようですね」
「……？」
「キミはお家に帰りたい一心で、一生懸命(いっしょうけんめい)にこの〝おとぎの国〟を旅してきました。その中で、キミは多くのコトを学んだと思います。自分の中で、なにかが変わったと思いませんか？」
「うん！　ボク、もうクヨクヨしたりしないよ。明るい顔で、ずっとおとうさんを待っていられるよ。だって、おとうさんが死んじゃったなんて、ダレもいってないもん。ボク信じてるよ、おとうさんはゼッタイに生きてるって。もし、ずっと帰ってこなくても、ボクがおっきくなったら……！」
一生懸命にしゃべりつづけるアルルを、〝南の賢者様(けんじゃ)〟は手で制しました。
「いまは、そのキモチだけでじゅうぶん。そして、キミの作ったカレーの味は、そのキモチの現われです。とてもおいしかった。だから、キミは合格です。おめでとう」
わー、ぱちぱちぱち……！

ブレードビーストさん、アウルベアさん、テノリゾウさんが拍手をします。

「ありがとう！」

「玉座の裏に、扉があります」

〝南の賢者様〟がいいました。

「その扉を越えたら、キミは眼が覚めるでしょう。そのとき、この夢のコトはすべて忘れてしまうけれど、キミはそのあとも、いまのキモチを忘れずにいられますね？」

「うん！　約束するよ！　ゆびきりしてもいいよ！」

「では……」

そっ、と〝南の賢者様〟は右手の小指を出しました。アルルも小指を出して、それにひっかけます。賢者様の指は、おとうさんのようで、おかあさんのようで、おばあちゃんのようです。とってもあったかい指です。

「ゆ〜びきりげんまん、ウソついたらハリセンボンのーます！」

指がはなれたところで、賢者様はいいます。

「さ、お行きなさい。この夢のコトを忘れてしまうのはさみしいでしょうけれど、わたしたちはキミが元気になれば、それでいいのです。それに、わたしたちはキミのことをずっと忘れませんから」

「うん！」

「アルルちゃん、どんなつらいコトにも負けるんじゃねぇぜ」
「わたしたち、ココでずっと応援してるりら」
「ぱおー」
「アウルベアさんも、ブレードビーストさんも、テノリゾウさんも、みんな元気でね！　ほかのヒトたちにもよろしくね！」
あいさつをすませたアルルは、玉座への階段をかけあがりました。
……と、玉座のうえになにかがいます。
「ぐー！」
「あれれ……？」
それは、この世界で何度もみかけた、〝ふしぎなどうぶつ〟でした。
「ぐー！」
アルルが玉座の前まで来ると、〝ふしぎなどうぶつ〟はちっちゃな紙切れをさしだします。
「コレ、ボクにくれるの？」
「ぐ」
「ありがとう！　大事にするね」
「ぐー！」
〝ふしぎなどうぶつ〟は、ぴょーんと飛んで、玉座の後ろにある扉のノブをまわしました。

ガチャッ！

扉がひらいた瞬間(しゅんかん)、真っ白な光がその向こうから飛びだしました。アルルはその光につつまれ、そして……。

# えぴろうぐ



「……はっ!?」

アルルは眼が覚めました。

いつのまにか朝になっていて、カーテンごしにさしこむお陽サマの光が、アルルのベッドをやさしく照らしています。お外のほうからは、チュンチュン、チュンチュンというスズメさんの声も聞こえます。

ご本を読んでくれていたはずの、おばあちゃんの姿はありません。たぶん、アルルが寝ているあいだに帰ってしまったのでしょう。

でも、不思議とさみしいカンジはしません。だって、会おうと思えば、いつでも会えますからね。

「ん〜〜〜〜〜〜〜〜……っ！」

お陽サマの光をいっぱいに受けながら、アルルはベッドのうえでおおきくのびをしました。

なんだか、モノスゴイ夢を見たような気がするけれど、それがなんなのか、ゼンゼン思いだ

せません。だけど、すっごくサワヤカな朝です。「おとうさんが帰ってこない。死んじゃったのかな……」なぁんてウジウジしてた、昨日までの弱虫泣き虫アルルはドコへいった、ってカンジ。そのコトじたいが、悪い夢だったかのようです。

　おとうさんはゼッタイに生きてる……！　ボクは信じてるもんね！

　もう、あのガイコツ魔導師の夢のコトを思いだしても、くじけたりしません。爽快で、親切で、冷静で、勇気があって、負けない心をずっと持ちつづけていられます。

　ボク、魔導幼稚園に入ったら、いっぱいいっぱいお勉強して、いっぱいいっぱい知恵をつけて、強い強い魔力を身につけて、リッパな魔導師になるんだ！　そんで、ボクがおっきくなってもおとうさんが帰ってこなかったら、そのときは、ボクがおとうさんを探しにいくんだもんね！　だから、待っててね、おとうさん……！

「アルル――――っ！」

　ドアの向こうから、おかあさんの声がしました。

「ゴハンの時間よぉ！　早く起きなさ――――い！」

「は――――い！」

　アルルは元気にお返事。さあ、これから新しいいちにちの始まりです！

と勢いをつけてベッドから起き上がった途端、

カサッ。
アルルの手の中から、なにかが落ちました。見ると、ちっちゃな紙切れです。
いつ、どうやって、どうして持ってるのかわからないけれど、なんだか、とってもあったかいカンジのする紙切れです。持っているだけで、いつまでも元気いっぱいでいられそうな気がします。おばあちゃんが、帰るときに持たせてくれたのでしょうか……？　いや、それはちょっと違(ちが)うかも……。
ひろげてみると、その紙切れには、なにか文字が書いてあります。だけど、アルルはまだちっちゃいので、なんて書いてあるのかはわかりません。でもなんだか、すっごく安心するような、ワクワクするような、そんな不思議(ふしぎ)なコトバです。
アルルは、それを大事(だいじ)な大事な宝箱(たからばこ)の中にしまっておくコトにしました。
その紙には、実は、こう書いてあるのでした。
ずっと、そばに、いるよ——。

おしまい。

# あとがき

魔導物語はとぉっても楽し、

みんなでぺらぺらしゃべりますぅ〜。

さのよいよい★

い〜かげん、このパターンもマンネリ化してきたな。ナニか新しいイントロを考えないと。

まぁ、そんなコトはさておいて……。

全3巻でイキナリ完結！　と世の中を震撼（しんかん）させた（というホドでもないケド）『魔導物語』シリーズ。『新★魔導物語』となって、まさしく装（よそお）いも新たに大復活ぅ!!

わ――ぱちぱちぱち……★

それもこれも、編集サマ、読者サマのおかげでございます。

反響高かったッスからねぇ。『魔導物語』3巻の広告にあった「完結」ってコトバに対して。「やめないで！」とか、「完結なんてウソでしょ!?」とかっていうお手紙をたくさんたくさんいただきました。この『新★魔導物語』が日の目を見る運びとなったのも、そのお手紙があったからこそです。感謝感謝。

ちなみにですねぇ、ボクのところに来たお手紙には、ひとつひとつお返事を書くつもりでいます。……が、生来の筆不精のせいで、なかなかお返事できません。

はぁぁっ！　ごめんなさいぃ！

お返事は必ずしますので、どうか気長にお待ちください。せめてお返事がわりになればと、この『新★魔導物語』もバンバン書きまくりますので、どうか見捨てないでください。

はてさて、この『新★魔導物語』。せっかく新シリーズになったワケだから、いままでとは違ったパターンで行こうとボクは考えました。

それが、アルルのちっちゃい頃のおハナシを書くってコトと、絵本みたいに「ですます」調で書くってコトです。

アルルのちっちゃい頃のおハナシっていうパターンは、以前からずっと考えていたもので、パソコンゲーム『魔導物語ＡＲＳ』から拝借したものです。これは、4歳のアルル、16歳のルルー、14歳のシェゾの3人を主人公にして、3話を1セットにしたものです（というコトは、次の『新★魔導物語』の主人公は……!?）。それに加えて、ゲームギアでは『魔導物語Ａ　ドキドキばけーしょん』が、スーパーファミコンでは『魔導物語　はなまる大幼稚園児』が出ています。このふたつも幼稚園に入ったアルルが主人公で、そうくればもう、この『新★魔導物語』でもそれをヤるしかないでしょう。

でもって、せっかくちっちゃいアルルが主人公なのだから、絵本みたいな雰囲気が出せると

いいなと思って、「ですます」調で書いてみました。
その結果は、いかがだったでしょうか？
書いてる途中は「やるんじゃなかった」って思ってたケド、どうにかこうにか原稿を書き終えて、ひと安心しております。願わくば、読者の皆様がおもしろいと思ってくれることを……。
ところで！　今回で初めて、いままでの『魔導物語』小説シリーズには出てこなかった、アルルの家族が登場します。だけど悲しいコトに、アルルのおとうさんは、狂悪な魔導師もろとも谷底に落ちてしまいました。今回のおハナシは、大好きなおとうさんが帰ってこなくて落ちこんでいるアルルを、おばあちゃんが魔法の本で元気づけてあげるというものです。そして、カー＝バンクルとの初めての出会いや、いろんな経験をしたアルルは、もとの元気を取り戻すと同時に、またさらに成長をして、一流の魔導師になっておとうさんを探す旅に出るコトを決意するのでした。
ちなみに、前のシリーズで、いいよるサタン様にゼンゼンなびかなかったのも、大好きなおとうさんの影をずっとひきずっているのかもしれませんね。
ナニ!?　前のシリーズを読んでない？
そんなアナタには、〝貧乏ヒマなし忙しく3回攻撃〟っ!!
はぁぁ……。なんだかとても忙しいよぅ。〝ぷよゼリー〟でも食べて元気つけるか（ホントにあるのですよ。ぷよまんとかといっしょに、広島のコンパイルさんのお店で売ってます）。

って、ンなコトをしてるバアイじゃないし、こんなに長々とあとがきを書いてるバアイでもない。次の『新★魔導物語』を書かなきゃイケナイし、社命でテーブルトークRPGなるものを作らねばならないし。ちなみに、それのタイトルは『創聖記エルジェネシス』といいます。久保田悠羅さんていうヒトといっしょに作ってます。お店でみかけたら、買って遊んでみてね。

もちろん、『魔導物語』『新★魔導物語』シリーズのほうもよろしくね★

そんなお願いのキモチをこめて、最後に一言……。

ぷよゼリー。「カキ味」っていうから、てっきりオイスター（貝のカキね）だと思っていたボク。実は、果物のカキだった。

いやほら、広島だしさ……（笑）。

一九九六年五月吉日　ＦＥＡＲ事務所にて

# 新★魔導物語 1

## アルルとおとぎの国

山本 剛

角川文庫　10096



平成八年八月一日　初版発行
平成十年五月十日　五版発行

発行者―角川歴彦
発行所―株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話　編集部(〇三)三二三八―八四五一
　　　営業部(〇三)三二三八―八五二一
〒一〇二―八一七七
振替〇〇一三〇―九―一九五二〇八

印刷所―旭印刷　製本所―大谷製本
装幀者―杉浦康平


落丁・乱丁本はご面倒でも小社営業部サービスセンターにお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。



S 56-4　ISBN4-04-415604-2　C0193

# 角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

**冒険、愛、友情、ファンタジー……。**
**無限に広がる、**
**夢と感動のノベル・ワールド！**

**スニーカー文庫**
SNEAKER BUNKO

いつも「スニーカー文庫」を
ご愛読いただきありがとうございます。
今回の作品はいかがでしたか？
ぜひ、ご感想をお送りください。

---

〈ファンレターのあて先〉
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店 書籍第一編集部気付
「山本 剛先生」係

---

**東京・渋谷の一角にあるBAR〈うさぎの穴〉。**
**そこに舞い込む奇妙な事件……**
**シェアード・ワールド・ノベルズの決定版!!**

## 真夜中の翼




山本弘
下村家惠子
友野詳

## 悪夢ふたたび……




山本弘

## 真紅の闇




友野詳
高井信
山本弘

## 悪魔がささやく




水野良
白井英
山本弘

## 鳩は夜に飛ぶ




友野詳
高井信
山本弘

## 魔獣めざめる




伏見健二
高井信
山本弘

## 闇より帰りきて




友野詳

## 影と幻の宴




清松みゆき
柘植めぐみ
友野詳

## 私は十代の蜘蛛女だった




山本弘

最新刊